

坑夫

夏目漱石

青空文庫

さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いものだ。いつまで行つても松ばかり生えていていつこう要領を得ない。こつちがいくら歩行たつて松の方で発展してくれなければ駄目な事だ。いつそ始めから突つ立つたまま松と睨めつ子をしてゐる方が増した。

東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちやくちやに北の方へ歩いて来たら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗闇の神樂堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それから何べつ平押しにここまでやつて来たようなものの、こうやたらに松ばかり並んでいては歩く精がない。

足はだいぶ重くなつてゐる。膨ら脛に小さい鉄の才槌を縛り附けたように足搔に骨が折れる。袷の尻は無論端折つてある。その上洋袴下さえ穿いていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじや所詮敵わない。

掛茶屋がある。葭簀の影から見ると粘土のへつついに、錆た茶釜が掛かっている。床几が二尺ばかり往来へ食み出した上から、二三足草鞋がぶら下がつて、絆天だか、

どてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の杵天とどてらの中ちゅうを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒くなった歯を、厚い唇くちびるの間から出して笑っている。これはと少し気味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになった。

今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相に出でつ喰くわしたものと見える。ともかく向うが真面目になったのでようやく安心した。安心したと思う間まもなくまた気味が悪くなった。男は真面目になった顔を真面目な場所に据すえたまま、白眼しろめの運動が氣に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額ひたいとじりじり頭の上へ登つて行く。烏打帽ひさしの廂またを跨いで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降さがつて来た。今度は顔を素通りにして胸から臍へそのあたりまで来るとちよつと留まった。臍へその所には墓かまぐち口がある。三十二錢は這入はいっている。白い眼は久留米くるめがすり緋ひの上からこの墓口を覗ねらつたまま、木綿もめんの兵児帯へこおびを乗り越してやつと股倉またぐらへ出た。股倉から下にあるものは空脛からすねばかりだ。いくら見たつて、見られるようなものはない。食くツ附ついちやいない。ただ不断より少々重たくなっている。白い眼はその重たくなっている所を、わぎつと、じりじり見て、とうとう親指の痕あとが黒くついた俎下駄まないたげたの台まで降くだつ

て行つた。

こう書くと、何だか、長く一^{ひとところ}所に立っていて、さあ御覧下さいと云わないばかりに
 振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼の運動が始まるや否^{いな}や急に茶店へ休
 むのが厭^{いや}になつたから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、このつもり
 が少々^{おほつか}覚束なかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵^{こしら}えて、俎^ね下駄を振る間際^{まぎわ}には、
 もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものである。じりじり見るんだか
 ら定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違ひ。じりじりには相違ない、どこまでも落
 ちついている。がそれで滅^{めつ}法^{ぽう}早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用
 を持つてゐる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩^{ゆる}くり見られない
 うちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだろうか。さんざつ腹^{はら}冷^{ひや}かされて、さあ御歸り、
 用はないからと云う段になつて、もう御免蒙^{ごめんこうぶ}りますと立ち上つたようなものだ。こつち
 は馬鹿^{ばか}氣^げている。あつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立つた。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしま
 った。と思うとまた足が重くなつた。——この足だもの。何しろ鉄の才^{さい}槌^{づち}を双方の足へ
 縛^{しば}り附けて歩いてるんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやら

れたのも、満更持前の半間からばかり来たと云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしていられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあつても家へ戻る了。簡はない。東京にさえ居り切れない身体だ。たとい田舎でも落ちつく気はない。休むと後から追つ掛けられる。昨日までのいさくさが頭の中を切つて廻つた日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども別段に目的もない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損なつた写真のように曇っている。しかもこの曇つたものが、いつ晴れると云う的もなく、ただ漠然と際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いて走っても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を抜出すために歩くのではない。抜け出そうとしたつて抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立つた昨夜の九時から、こう諦はつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松が厭きるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦しい。何のために歩いているんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては

一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多にない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇った世界の中へだんだん深く潜り込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代が違っている。

手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆が違ふ。そのくせ暖かな朗かな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭から呼びたくなる

くらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。この漠々のうちへ――

――命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ――自分はふらふら迷い込むのだから心細い。

この曇った世界が曇ったなりはびこつて、定業の尽きるまで行く手を塞いでいてはたまらない。留まった片足を不安の念に駆られて一步前へ出すと、一步不安の中へ踏み込んだ訳になる。不安に追い懸けられ、不安に引つ張られて、やむを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒が明くはずがない。生涯片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とてものに曇ったものが、いつそだんだん暗くなってくれればいい。暗くなった所をまた暗い方へと踏み出して行つたら、遠からず世界が闇になって、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなってくれず、と云つて暗くもなってくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩こめている。これでは生甲斐いきがいがない、さればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかった。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしていない事はなかった。後あとからぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかった。ところが今度は天からどきんともぞつともしない。どきんともぞつとも勝手にするが善いいと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がつていたんだろう。その上いつその事を断行するのが今が今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日あしたになるか明後日あさってになるか、ことに由よつたら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差さ支しないつかえと高たかを括くくつていたせいかも知れない。華嚴けごんの瀑たきにしても浅間あさまの噴火口ふんかこうにしても道程みちのりはまだだいぶあるくらいは知らぬ間まに感じていたんだろう。行き着いていよいよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇つた世界が苦痛であつて、この苦痛をどきんとしない程度において免まぬれる望が

あると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこのくらいの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責めてもの慰藉と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくつちやならないと思ひながら、雲を攫むような料簡で歩いて来ると、後からおいおい呼ぶものがある。どんなに魂がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根があるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持たなかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさっきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の絆天とどてらの合の子が出て、脂だらけの齒をあらわに曝しながらしきりに自分を呼んでいる。

昨夕東京を立つてから、まだ人間に口を利いた事がない。人から言葉を掛けられような

どとは夢にも予期していなかった。言葉を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸けられたのだから——粗末な齒並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然すると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装も動作もあんまり気に入っちゃいない。ことにさつき白眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪の念が胸の裡に萌し掛けたくらいである。

それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打つて変つた一種の温味を帯びた心持で後歸りをしたのはなぜだか分らない。自分は暗い所

へ行かなければならないと思つていた。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的

とは反対の見当に取つて返す事になる。暗い所から一歩立ち退いた意味になる。とこ

ろがこの立退が何となく嬉しかった。その後いろいろ経験をして見たが、こんな矛盾は

到る所に転がつている。けつして自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格な

んてものはないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、あんな性格をこ

しらえるのと云つて得意がつている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分つたよう

な事を云つてゐるが、ありや、みんな嘘をかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがつてゐるんだ

ろう。本当の事を云うと性格なんて纏まとったものはありません。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたつて、小説になる氣づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏まとめにくいものだ。神さまでも手古てこずるくらい纏まとまらない物体だ。しかし自分だけがどうあつても纏まとまらなく出来上つてゐるから、他人ひとも自分同様締しまりのない人間に違ないと早合点はやがてんをしてゐるのかも知れない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉めくらじま縞そぼの傍そばまで行くと、どてらはさも馴なれ馴なれしい声で

「若い衆しゅさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めてゐる。自分自分は好加減いいかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、

「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどてらから若い衆しゅさんなんて云われて快よく返辞へんじをする自分じゃない。返辞へんじをするにしてもうんとか何だとかで済すしたろうと思う。ところがこの時に限つて、人相にようのよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような氣持きもちがした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けつしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見倣みなしたような語氣で、

「御前さん、働く^{りようけん}了簡はないかね」

と云った。自分は今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟していたんだから、藪^{やぶ}から棒^{ぼう}に働^{はたら}く了簡はないかねと聞かれた時には、何と答えて善^いいか、さっぱり訳^{わけ}が分らずに、空^{から}脛^{すね}を突^つつ張^はったまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺^{なが}めていた。

「御前さん、働^{はたら}く了簡はないかね。どうせ働^{はたら}かなくっちゃならないんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹も、どうか、こうか、受け答^{こた}の出来るくらいに眼前の事^じ況^{きやう}を会得^{えとく}するようになった。

「働^{はたら}いても善^いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やつと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通っておる。自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く気でいた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫^び然^{ぜん}な感がある。と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほどさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背^{そむ}かねばならぬほどに自分は薄弱なものであつ

たと云う事をも証拠立てている。手短かに云うと、自分は暗い所へ行く気でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引つかりが出来れば、得たり賢しと普通の娑婆に留まる了簡なんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引つかかってくれたんで、何の気なしに足が後向きに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよつとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にするかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖くなつてぞつとしたに違ない。それほど娑婆気が、戻り掛ける途端にもう萌していたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆気は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛を二本、棒のようにどてらの真向うに突つ立てた時は、この娑婆気が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く気はないかねと来た。御粗末などてらだが非常に旨く自分の心理状態を利用した勧誘である。だし抜きの質問に一時はぼんやりしたようなものの、ぼんやりから覚めて見れば、自分はいつか娑婆の人間になっている。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくつちや駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと言うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもっともだと首肯した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」

と自分はここで再び聞き直して見た。

「大変儲かるんだが、やって見る気はあるかい。儲かる事は受合なんだ」

どてらは上機嫌の体で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待っている。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌にもなんにもなつちやいない。元来笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやって見ましょう」

と受けてしまった。

「やって見る？ そいつあ結構だ。君儲かるよ」

「そんなに儲けなくつても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭だなんて云われちゃ困るが。きつとやるだろうね」

どてらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかった。云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやって退けるが、万一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずにやる気ですと云ったんだろう。——こう自分の事を人の事のように書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だつて、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区別はありやしない。すべてがだるうに変化してしまう。無責任だと云われるかも知れないが本当だから仕方がない。これからさきも危しいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略話が纏つたものと呑み込んで

「じゃ、まあ御這入り。緩くり御茶でも呑んで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這入つてどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆが

んだ四十ばかりの神かみさんが妙な臭においのする茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減つて来た。減つて来たのか、減つていたのに気がついたのか分らない。墓がまぐち口には三十二銭這入っている、何か食おうかしらと考えていると

「君、煙草たばこを呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角かどが裂けるのは仕方がないが、何だか薄うす穢ずたなく垢あかついた上に、びしやりと押し潰つぶされて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてるように思われる。袖そでのないどてらだから、入れ所に窮はらして腹掛はらがけの隠しへでも振ねじ込んで置くものと見える。

「ありがとうございます、たくさんです」

と断ると、どてらは別に失望ていの体もなく、自分でかたまつたうちの一本を、爪垢つめあかのたまつた指先で引つ張り出した。はたせるかな煙草は皺しわだらけになって、太刀たちのように反そっている。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻から煙けむが出る。際きわどいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年いくつになんなさる」

どてらは自分の事を御前さんと云つたり君と云つたりするようだが、何で区別するんだ

か要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲かるときには君になって、不断の時
には御前さんに復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になっているらしい。
「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかつたのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向うしろむきになつて盆を拭きながら云つた。後向きだから、どんな顔
つきをしているか見えない。独り言ひとりごとだかどてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相
手にする気なんだか分らなかつた。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくつちやならないような語気である。自分はだまつて床几しょうぎを離れ
た。

正面に駄菓子だがしを載せる台があつて、縁ふちの毀れた菓子箱の傍そばに、大きな皿がある。上に青
い布巾ふきんがかかっている下から、丸い揚げ饅頭あげまんじゅうが食み出している。自分はこの饅頭が喰い
たくなつたから、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつら饅頭まんじゅう
の皿を覗のぞき込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留まるや否いなや足音

にパツと四方に散つたんで、おやと思ひながら、氣を落ちつけて少しく揚饅頭を物色して
いると、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せたように、再
びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色い油切つた皮の上に、黒いぼちぼちが出鱈目に
できる。手を出そうかなと思う矢先へもつて来て、急に黒い斑点が、晴夜の星宿の
ごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易してしまつて、ぼんやり皿を見下していた。
「御饅頭を上げんなさるか。まだ新しい。一昨日揚げたばかりだから」
かみさんは、いつの間にか盆を拭いてしまつて、菓子台の向側に立っている。自分
は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思つたか、いきなり、節太の手
を皿の上に翳して、

「まあ、大変な蠅だ事」

と云いながら、翳した手を豎に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸で、饅頭をぽんぽん
と七つほど挟み込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床^{しやうぎ}几の上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ歸つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺^{なが}めながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云つて見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだろうか食わないだろうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴^{やつ}を取つて頬張^{ほおば}つちまつた。唇^{くちびる}の厚い口をもごつかせているところを観察すると、満^{まん}更^{ぜい}でもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗^{きれ}なのを摘^{つま}み出して、あんぐりやつた。油の味が舌の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦^{にが}い餡^{あん}が卒然として味覚^{あじ}を冒^{おか}して来た。しかしこの際だから別にしまつたとも思わなかつた。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑^ふへ吞^のみ下^{くだ}してしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大變速力が早い。そうして食

つてゐる間は口を利かない。働く事も儲かる事もまるで忘れてゐるらしい。したがって七つの鰻頭は呼吸を二三度するうちに無くなつてしまつた。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬く間にどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡をするほどの汚らしいものでも、一度皮切りをやると、あとはそれほど神経に障らずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐の真理になつてしまつたが、その時は鰻頭を食いながら少々呆れたくらい後が食いたくなつた。それに腹は減つてゐる。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた鰻頭をぱくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、神経などは有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はどうとう神さんにたのんで鰻頭の御代りを貰つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿が床几の上に乘るや否や、自分の方でまず一つ頬張つた。するとどてらも、「や、すまない」とも何とも云わずに、だまつて一つ頬張つた。次に自分がまた一つ頬張る。次にどてらがまた一つ頬張る。互違に頬張りつ子をして六つ目まで来た時、たった一つ残つた。これが幸い自分の番に當つてゐるので、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張つてしまつた。それからまた御代り

を貰った。

「君だ**いぶ**やるね」

とどてらが云った。自分は**だいぶ**やる気も何もなかったが、云われて見ると**だいぶ**やるに違ない。しかしこれは**初手**に**どてら**の方で自分の食いたくないものを、むしやむしや食つて見せて、自分の食慾を誘致した結果が与つて力あるようだ。ところがどてらの方では全然こつちの責任で**だいぶ**やるような口氣であつた。だから自分は何だかどてらに對して弁解して見たい氣がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫むようにどてらにも責任があるんだらうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙つていた。すると

「君、揚饅頭がよ**つぽ**ど好きと見えるね」

と今度は云った。饅頭にも寄り切りで、一昨日揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌だとは無論云われない。だから今度も黙つていた。そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅頭は名代の御饅頭だから、みんなが旨がつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような氣がした。そこでますます

黙ってしまった。黙って聞いてると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云つてゐる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見当がつかなかった。とにかく鰻頭はどうでも構わないから、肝心の労働問題を聞糾して見ようと思つて、

「先刻の御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働いて飯を食わなくっちゃならない身分なんです、いったいどんな事をやるんですか」

とこつちから口を切つて見た。どてらは正面の菓子台を眺めていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりにして、しきりに儲けさせたがっている。こつちへ向き直つて、自分を誘い出そうと力める顔つきを見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張っている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下から弓形にでき上つた皺が深く映っている。この様子を見た自分は何となく儲けるのが恐ろしくなつた。

「僕はそんなに儲けなくつても、いいです。しかし働く事は働くです。神聖な労働なら何

でもやるです」

どてらの頬の辺あたりには、はてなと云う景色けしきがちよつと見えたが、やがて、かの弓形ゆみなりの皺を左右に開いて、脂やにだらけの齒を遠慮なく剥むき出して、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考えるとどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかったらしい。いやしくも人間たるものが金かね儲もうけの意味さえ知らないで、こむずかしい口巧くちこうしゃ者な事を云うから、気の毒だと云うのでどてらは笑ったのである。自分は今まで死ぬ気でいた。死なないまでも人間のいない所へ行く気でいた。それができ損そこなったから、生きるために働く気になつたまでである。儲もうかるとか儲からないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京にいて親の厄介やっかいになつてゐる時分からなかつた。どころじゃない儲もうけ主義しゆぎは大いに輕蔑けいべつしていた。日本中どこへ行つてもそのくらいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じていた。だからどてらがさつきから儲かると云うのを聞くとたんびに何のためだろうと不思議に思つていた。無論癩しやくには障さわらない。癩に障るような身分でもなし、境遇でもないから、いっこう平氣ではいたが、これが人間に對する至大の甘言で、勧誘の方法として、もつとも利目ききめのあるものだと夢にも想おもひ至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいっこう通じなかつた。今考えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、

「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」

と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日自宅を逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃剣げっけんの稽古けいこと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくつちやあならない身分です」

「そうだろう。働いた事がなくつちや……じゃ、君、まだ儲けた事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙っていると、茶店のかみさんが、菓子台うしろの後から、

「働くからにや、儲けなくつちやあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようつたつて、今時そう儲け口が転がつてるもんじゃない」

と幾分か自分に対して恩に被きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行つた。このそうさが妙に気になって、こ

とによると、まだその後あとがあるかも知れないと思つたせい、何気なく後うしろ姿を見送つて、大きな黒松の根方ねがたのところへ行つて、立小便たちしょうべんをし始めたから、急に顔おもてを背そむけて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私わたしだから、お前さん、見ず知らずの他人にこんな旨い話うまをするんだ。これがほかのものだつたら、受合うあつてただじゃ話わしつこない旨い口なんだからね」

とまた恩に被きせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張よしかてつて答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云う。自分は黙もくつて聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅山やまへ行つて仕事をするんだが、私が周旋しゆせんさえすれば、すぐ坑夫こうふになれる。すぐ坑夫こうふになれりや大したもんじやないか」

自分は何か返事うたがを促うながされるような気がしたけれども、どうもどてらの調子に載のせられて、そうですとは答える訳に行かなかつた。坑夫と云えば鉈山なの穴の中で働く労働者に違ちがない。世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくつて、もっと

も下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合すどころの騒ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種属があると云うのは、大晦日おおみそかの後にあとにまだたくさん日が余つてると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどてらがこんな事を饒舌しゃべるのは、自分を若年じゃくねんと侮あなどつて、好い加減に人を瞞だますのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とつつけからすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なもんさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまつちまつて、好きな事が出来らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めつから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持つて行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うなるほど溜うなるばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。——今のうち儲けなくっちゃ損だ」
と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとりごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占^{くちうら}で、全然どてらと同意見を持つているように思われた。無論それでよろしい。またそれでなくともいつこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであった。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云つて聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出^{しで}かした不都合やら義理やら人情やら煩悶^{はんもん}やらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日までの自分の事を考えると、どうしたって、こんなに温和^{おとな}しくなれる訳がないのだが、実際この時は人に逆^{さか}うような気分は薬にしたくても出て来なかった。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかつた。おそらく考える余裕がなかつたんだろう。人間のうちに纏^{まと}つたものは身体^{からだ}だけである。身体が纏^{まと}つてるもんだから、心も同様に片づいたものだと思つて、昨日と今日^{きよう}とまるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済ましているものがだいぶある。のみならずいったん責任問題が持ち上がって、自分の反覆^{はんぷく}を詰^なめられた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分ですら、無理と思ひながらも、いささか責任を感じよう。して見ると人間はなかなか重宝^{ちようほう}に社会の犠牲

になるように出来上ったものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した鼻^{ひいきめ}眞目なしの真相から割り出して考えると、人間ほどの^{あて}にならないものはない。約束とか契^{ちがい}とか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯^{たて}にとって相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行は野暮^{やぼ}の至りである。大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理を強^して圧^おしかくして、知らぬ顔でやって退^のけるまでである。決して魂の自由行動じやない。はやくから、ここに気がついたなら、むやみに人を恨^{うら}んだり、悶^{もだ}えたり、苦しまぎれに自宅^{うち}を飛び出したりしなくつても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変ったところを、他人扱いに落ち着き払って比較するだけの余裕があったら、少しは悟れたろう。惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかった。ただ口惜^{くや}しくつて、苦しくつて、悲しくつて、腹立たしくつて、そうして気の毒で、済^すまなくつて、世の中が厭^{いや}になつて、人間が棄^すて切れないで、いても立つても、いたたまれないで、むちやくちやに歩いて、どてらに引つ掛つて、揚^{あげ}饅頭^{まんじゅう}を喰^くったばかりである。昨日は昨日、

今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫統つなぎの取れない魂がいとどふわつき出して、實際あるんだか、ないんだかすこぶる明瞭めいりょうでない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、朦朧もうろうと一団の妖氛ようふんとなつて、虚空遥こくほるかに際限もなく立て罩こめてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、どうして坑夫より下等なものがあるんだとか、自分は儲もつける事ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりやどこがいんだとか、何とかかとか理窟りくつを捏こねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘か弁んべんしないところを、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する気が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強して殺ころしてしまうほどの無理を冒おかさない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲もかろうが、儲もかるまいが、どんな問題にならなかつたものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き

方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相容れぬ法螺を吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の人間として自分の人格に虧からぬ汚点を貽す恐れがあつても、まるで気にならなかつたんだらう。こんな時には複雑な人間が非情に單純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉しい心持がした。自分は第一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくつても好いから人のいない所へ行きたいと移つて来た。それがまたいつの間にか移つて、第三にはともかくも働こうと變化しちまつた。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に緣故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心變りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返つて、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くとう決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかつたし、第一と交渉を絶つほど遠くにもいなかったと見える。働きながら、人のいない所において、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶う訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑の中で、日の目を見ない家業である。娑婆にいながら、

娑婆から下へ潜り込んで、暗い所で、鉋塊土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごてにいるが、自分ほど坑夫に適したものはけつしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。——とここまで明瞭には無論考えなかったが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりどうあつても他人の事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向つてこう云つた。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょうか」

するとどてらはなかなか鷹揚な態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私が周旋さえすりやきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙っていると、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵さんが口を利きさえすりや、坑夫は受合だ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。それからいっしょに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男を捕えて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。

しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん^{あてじ}当字である。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引つ張つて、思いも寄らない見^{けんとう}当に向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異^いな事だ。

さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合^{うあひ}うから、自分もなれるんだろうと思つて、

「じゃ、どうか何分願います」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺^{へん}はさつぱり分らなかった。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違^{ちが}はないと思つて、あとは聞かずに黙つていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻^{しり}を床^{しょうぎ}几^こから立てて、

「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支^{したく}度^どはいいかい。忘れものないようによく気をつけて」

と云つた。自分^{自分}はうちを出る時、着^きのみ着^きのままで出たのだから、身^{からだ}体^{たい}よりほかに忘れ物

のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝心の揚げ饅頭の代を忘れて
いる。長蔵さんは平気な面をして、もう半分ほど葎の外に出て往來を眺めていた。自分
は懷中から三十二銭入りの蠶口を出して饅頭三皿の代を払って、ついでだから茶代とし
て五銭やった。饅頭の代はどうとう忘れちまつて思い出せない。ただその時かみさんが、
「坑夫になつて、うんと溜めて歸りにまた御寄」

と云つたのを記憶している。その後坑夫はやめたが、ついにこの茶店へは寄る機会がな
かつた。それから長蔵さんに尾いて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃
を上げて、やつて来ると、さっきの長たらしいのに引き易えて今度は存外早く片づい
ちまつた。いつの間にやら松がなくなつたら、板橋街道のような希知な宿の入口に出て来た。
やッぱり板橋街道のように我多馬車が通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返つて、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗つても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくつてもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくつてもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云つたから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行つてしまつた。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通つた馬車の埃ほこりが日光に

まぶれて、往来が濁つたように黄色く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町

並がしだいに立派になる。しまいには牛込の神楽坂かぐらざかくらいな繁はんじょう昌しょうする所へ出た。こ

こいらの店みせ付つきや人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であつた。長蔵さんのようなのは

ほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかったのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いったい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついぞ一と口もと自分に聞いた事がなかつたのは、人を周旋する男の所為しよゐとしては、少しく無頓着むとんじゃく過ぎるようにも思われたが、この男は全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後で分つた。この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようにして、ある横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有つたものの子である。込み入った事情があつて、耐え切れずに生家を飛び出したようなものの、あながち親に対する不平や面当ばかりの無分別じゃない。何となく世間が厭になつた結果として、わが生家まで面白くなつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮れば焦慮るほど厭になる。揚句の果は踏張の栓が一度にどつと抜けて、堪忍の陣立が総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまったのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍にまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲に親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲いてゐる。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりする。すると何かの因縁で自分も丸くなつたり四角になつたりしなくつちやなくなる。しかし自分はそう丸くなつたり四角になつたりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別えていた。が済まないと思えば思うほど丸くなつたり四角になつたりする。しまいには形態ばかりじゃない

組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨めしうに見ている。親も親類も
 見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲ったりくねったりす
 るところを、どうかして隠そうと力めたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれな
 いで、むやみに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終せる段じやない。
 親にも親類にも目つかってしまった。怪しからんと云う事になった。怪しかるとは自分で
 も思っていなかったが、だんだん聞き糾して見ると、怪しからん意味がだいぶ違つてゐる。
 そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつと
 も信用しないのが第一不都合だと思ふと同時に、第一の少女の傍にいたら、この先どうな
 るか分らない、ことに因ると實際弁解の出来ないような怪しからん事が出来来するかも
 知れないと考え出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に対しては
 気の毒である、済まん事になったと云う念が日々烈しくなる。——こんな具合で三方四
 方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、五色の糸のこんがらかつたように、こつちを
 引くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるとこつちが釣れると云う安排で、乱れた
 頭はどうあつても解けない。いろいろな工夫を積んで自分に愛想の尽きるほどひねくつて
 見たが、とうてい思ふように纏まらないと云う一点張に落ちて来た時に——やつと気が

ついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいいような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを^{あて}当にしていた。つまり往来で人と行き合った時、こっちは突ツ立つたまま、向うが泥^{ぬかるみ}濘へ避^よけてくれる工面^{くめん}ばかりしていたのだ。こっちが動かない今のままのこっちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸^かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじやない。世間の掟^{おきて}という鏡が容易に動かせないとなると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙^{けむ}にしてしまおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古^{けいこ}をしても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなつた。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親を持つて朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家^{うち}においては自滅しようがない。どうしても逃^{かけ}亡^{おち}が必要である。

逃げ落ち

逃亡をしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考えた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残った人は自分の逃亡のために助かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたって、いつまでも逃亡かけおちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやっぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅の計はかりごとを廻らしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くとは自分はいかにも下らない人間になつてしまふが、事実を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきこみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考える。

それでなくつても實際その当時の、二人の少女の有様やら、日ひごとに変る局面の轉換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だいぶん面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、まあやめにして、せつかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔^{しゅっぱん}したんだから、固^{もと}より生きながら葬^{ほうぶ}られる覚悟でもあり、また自ら葬^{みずか}つてしまふ了^{りようけん}簡^{かん}でもあったが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら棄鉢^{すてばち}になつても長蔵さんには話したくなかつた。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかつた。すべての人間は愚か、自分にさえできる事なら語りたくないほど情ない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言^{いちごん}も聞き糺^{ただ}さなかつたのは、変と思ひながらも、内々嬉しかつた。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘^{うそ}をつく事をよく練習してゐなかつたし、ごまかすと云う事は大變な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困つたろうと思う。

そこで長蔵さんに尾^ついて、横町を曲つて行くと、一二丁行つたか行かないうちに町並が急に疎^{まばら}になつて、所々は田圃^{たんぼ}の片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌^{はんしょう}しても、繁昌は横幅だけであるなど気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑^{にぎや}かな所へ出された。その突当りが停車場^{ステーション}であつた。汽車に乘らなくつては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知つた。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるらなうと思つてい

た。

そこで停車場へ這入る五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云つたのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返つたが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入つた。

自分は停車場ステーションの入口に立つて考え出した。あの男はいつたい自分といつしよに汽車へ乗つて先方さきまで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にこう叮嚀ていねいな世話を焼くのはおかしい。ことによると彼奴あいつは詐欺師かたりかも知れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭いやになつて来た。いつその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当けんとうに向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかなかつたと見えて、茫然ぼうぜんとして、停車場前の茶屋の赤い暖簾のれんを眺めながめていると、いきなり大

きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると云う事を悟つた。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜^{はす}に出して、しきりにこちらを見て、首を豎^{たて}に振っている。何でも身体^{からだ}は便所の堀^{へい}にかくれてゐるらしい。せつかく呼ぶものだからと思つて、自分は長蔵さんの顔を目的^{めあて}に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうもないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた變つた。自分は身体よりほかに何にも持つていない。取られようにも瞞^{かた}られようにも、名譽も財産もないんだから初手^{しよて}から見込の立たない代物^{しろもの}である。昨日^{きのう}の自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給の差^さし押^おを苦^くにするようなものであつた。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風体^{ふうてい}を見て一^{いち}目^{もく}騙^{かた}るべからずと看破するには教育も何も要^いつたものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだらうと思ひ出した。それならそれで構わない。給料のうちの幾分かやれば済む事だなどと考えながら用を足した。――実は自

分がこれだけの結論に到着するためには、わずかの時間内だがこれほどの手数と推論とを要したのである。このくらい骨を折つてすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会得する事が出来なかつたのは、年が十九だつたからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、こうか、漕ぎつけながら、それでも、もしや好意ずくの世話ずきから起つた親切じやあるまいかと思つて、飛んだ気兼をしたのはおかしかつた。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方^{さき}まで連れて行つていただいては恐縮ですから、もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろな御世話になつてありがたいです。これから先はもう僕一人でやりますから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省いたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰つたが、

「今貴方に伺つて置けば、先へ行つて貴方の名前を云つて、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私の名前くらいで、すぐ坑夫になれると思つてるのは大間違いだよ。坑夫な

んで、そんなに容易になれるもんじやないよ」

と跳つけられちまつた。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶をすると、

「なに遠慮しないでもいい、先方まで送つてあげるから心配しないがいい。——袖摩り合

うも何とかの因縁だ。ハハハハハ」

と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合せに腰を掛けていると、だんだん停車場へ人が寄ってくる。大抵は田舎者である。中には長蔵さんのような粋天兼どてらを着た上に、天秤棒さえ荷いだのがある。そうかと思うと光沢のある前掛を締めて、中折帽を妙に凹ました江戸ツ子流の商人もある。その他の何やらかやらでベンチの四方が足音と人声でざわついて来た時に、切符口の戸がかたりと開いた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がって、みんな鉄網の前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ちつき払ったものであった。例の太刀のごとくそっくりかえった「朝日」を厚い唇の間に啣えながら、あの角張った顔を三が二ほど自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるか」

と聞いた。また自分の未熟なところを発表するようだが、実を云うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫も上らなかつたのである。汽車に乗るんだなと思ひながら、いくら

金を払うものか、また金を払う必要があるものか、とんと思ひ至らなかつたのは愚^ぐの至^{いた}りである。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢^{であ}うまでは無^た賃^だで乗れるかのごとき心持で平氣でいたのは事實である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長藏さんにさえ食つついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと云う依頼心が妙に潜^{ひそ}んでいたんだらう。ただし自分じゃけつしてそう思つていなかった。今でもそうだとはい自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場^{ステーション}へ来て汽車賃の汽の字も考えずにいられるもんじやない。その癖こんなに依頼している長藏さんに対して、もう御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人で行きますのと平^{ひら}に同行を断つたのは、どう云う了^{りよう}簡^{けん}だらう。自分はこう云う場合にたびたび出逢^{であ}つてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。――病氣に潜伏期があるごとく、吾^{われ}々の思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有^もちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覺しない。またこの思想や感情が外界の因縁^{いんねん}で意識の表面へ出て来る機会がないと、生^{しょう}涯^{がい}その思想や感情の支配を受けながら、自分はけつしてそんな影響を蒙^{こう}つた覺^{おぼ}えがないと主張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、傍^{はた}から見ると矛盾に

なっている。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やつぱりこの潜伏者を自覚し得なかつたからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだろうに。ところがそう思うように行かぬのは、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持っていなさるか」と問われた時に、自分ははつと思つて、少からず狼狽うろたえた。三十二銭のうちで 鰻まんじゅう 頭の代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて 呑込のみこみ 顔がおに受合つたんだから、自分は少し図迂ずうずう図迂ずうずうしい人間であつたんだと気がついたら、急に 頬辺ほつぺたが熱くなった。その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今だったら、たとい電車の中で借金きんの催促をされようとも、ただ困るだけで、けつして赤面はしない。ましてぼん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥しゆうちの血色を見せるなんてもつたいない事は、夢にもやる気遣いきづかはありやしない。

自分はどうか云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと答えたかつた。しかし実

際がないんだから嘘うそを吐く訳には行かない。嘘を吐きつ放はなにして済ませられるなら、思い切つて、嘘を吐く事にしようが、とにかく今切符を買まうと云う間際まぎわで、吐けばすぐ露現ろけんしてしまうんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんざらの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣のついた、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかつたもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかったが、何しろもつたいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しつて、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、恐縮しても、まるで頓とんじ着やくしない。ただいくら持つてるか聞きたい様子であつた。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。何しろしめめて三十二銭のうち、饅頭まんじゅうを三皿食つて、茶代を五銭やつたんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くつても同じくら

いなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私が足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、いかにも体

裁^{いさい}がわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭^{いや}だから、懷^{ふところ}から例

の墓^{がまぐち}口を取り出して、墓口ごと長蔵さんに渡した。この墓口は鰐^{わに}の皮で拵^{こしら}えたすこぶる

上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると云う講釈をとくと聴かされた

贅^{ぜいたくもの}沢物である。長蔵さんは墓口を受け取つて、ちよつと眺^{なが}めていたが、

「ふふん、安くないね」

と云つたなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまつた。中味を改めないところはよかつたが、

「じゃ、私が切符を買つて来て上げるから、ちゃんとここに待っていないくつちや、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行つてしまった。見ていると人^{ひとこみ}込

の中へ這入^{はい}ったなり振り返りもしないで切符を買う番のくるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、今先方^{いまさき}までの長蔵さんは始終^{しじゅう}自分の傍^{そば}に食^くつついていて、たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れてるように見受けられた。あんまり人が多くつて、こつちへ眼をつける暇^{ひま}がなかつたんだらう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんびに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺^{なが}めていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれつばかりしか持つていないのかと長蔵さんが驚くに違^{ちが}ない。どうも気の毒である。いくら足し前をするんだらうなどと入らざる事を苦^くに病^やんでいると、やがて長蔵さんは平生^{へいぜい}の顔つきで歸つて来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わない。きまりが悪かつたから、自分もただ

「ありがとう」

と受取つたぎり賃銭の事は口へ出さなかつた。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さ

んの方でも墓口の事はそれっきり云わなかった。したがって墓口はついに長蔵さんにやつた事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別にこれと云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物^{できもの}だらけの、腐爛^{ただれ}目の、痘痕^{あばた}のある男が乗ったので、急に心持が悪くなって向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよっぽどおかしい。生家^{うち}を逃亡^{かけお}ちて、坑夫にまで、なり下る決心^{さか}なんだから、大抵の事に辟易^{へきえき}しそうもないもんだがやっぱり醜^{きた}ないものの傍^{そば}へ寄りつきたくなかった。あの按排^{あんぱい}では自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違^{ちが}ない。それなら万事^{ばんじ}こう几帳面^{きちようめん}に段落をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵さんや茶店のかみさんに逢^あった時なんぞは平生の自分にも似ず、の音^{おと}も出さずに心^{しん}からおとなしくしていた。議論も主張も感慨^{きがい}も何もあつたもんじやありやしない。もつともこれはだいぶ餓^{ひも}じい時であつたから、少しは差引いて勘定^{たて}を立るのが至当だが、けつして空腹のためばかりとは思えない。どうも矛盾——また矛盾が出たから廃^よそう。

自分は自分の生活中もつとも色彩の多い当時の冒険を暇さえあれば考え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく厳密なる解剖の刀を揮^{ふる}つて、縦横^{たてよこ}

十文字に自分の心緒しんしよを切りさいなんで見るが、その結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔むかしだから忘れちまったんだなどと云ってはいけけない。このくらい切実な経験は自分の生涯しょうがい中に二度とありやしない。二十はたち以下の無分別から出た無茶だから、その筋道が入り乱れて要領を得んのだと評してはなおいけけない。経験の当時こそ入り乱れて滅多めったやたらに盲動するが、その盲動に立ち至るまでの経過は、落着いた今日の頭脳こんにちの批判を待たなければとても分らないものだ。この鉱山行ゆきだって、昔の夢の今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたから、あらいいざらい書き立てる勇氣があると云うばかりじゃない。その時の自分を今の眼の前に引擦り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだってどうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻下こつかの事情と云うものは、転瞬てんしゆんの客氣かっきに駆られて、とんでもない誤謬ごびゆうを伝え勝ちのものである。自分の鉱山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、氣取つた、偽りの多いものが出来上つたろう。とうてい、こうやって人の前へ御覽下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一目ちよつと自分と腐爛

目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかつた。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少からず驚嘆した。のみならず、平気な顔で腐爛目と話し出したに至つて、少しく愛想が尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻つて、腐爛目は、

「まただいぶん儲かるね」

と云つた。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾液をした。するとその唾液が汽車の風で自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らない男が二人弁じている。

「泥棒が這入るとするぜ」

「()そこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身ぬきみか何かで威嚇おどした時によ」

「うん、それで」

「それで、主人あるじが、泥棒だからってんで贖にせがね錢をやって帰したとするんだ」

「うんそれから」

「後あとで泥棒が贖あし錢と気がついて、あすこの亭主は贖あし錢使つかいだ贖あし錢使つかいだって方々振れて歩くんだ。常公つねこうの前めえだが、どっちが罪が重いと思う」

「どっちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねぶくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそらく同じ事だろう。しかし死ぬのは、やさしいようでなかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道をやる人が、時々ほうゆ朋友ゆうに咽喉のどを締めて貰う事がある。夏の日永ひながのだるい時などは、絶息したまま五分も道場

に死んでいて、それから活かつを入れさせると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治あらりようじを頼んだ事がない。睡眠はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り損そこなう危険ともなも伴っていないから、心配のあるもの、煩悶はんもんの多いもの、苦痛に堪たえぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取つては、至大なる自然たの賚たまものである。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑ひまもないうちに、うつとりとしちまって、生きてゐる以上は是非共その経過を自覚しなければならぬ時間まるつぶを、丸潰まるつぶしに潰つぶしていた。ところが眼めが覚さめた。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝込ねこんだもんだから、汽車の留つたために、眠りが調子を失つてどこかへ飛んで行つたのである。自分は眠つてゐると、時間の経過だけは忘れてゐるが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくつては駄目だ。ただし煩悶がなくなつた時分には、また生き返りたくなるにきまつてゐるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互たが違ちがにするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか剽ひようきん軽きんな冗談じやうだんを云つてゐるようだが、けつしてそんな浮いた了りようけん見けんじやない。本氣に眞面目まじめを話してゐるつもりである。その証

拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじゃない。実際汽車が留つて、不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿^{ばか}気を感じだから滑稽^{こっけい}のように思われるけれどもその時は正直にこんな馬鹿気た感じが起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可^{かわい}愛^そ想^うに思うのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目^{まじめ}に抱^{いだ}かねばならぬほど、その時の自分は情^{なさけ}ない境遇におつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留つていた。汽車が留まつたなど云う考えよりも、自分は汽車に乗つていたんだなと云う考えが第一に起つた。起つたと思うが早いか、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家^{うち}を出^{しゅっ}奔^{ぽん}したんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだがむらむらと塊^{かた}まって、頭の底から一度に湧^わいて来た。その速い事と云つたら、言語^{ごんご}に絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺^{おぼ}れかかったその刹那^{せつな}に、自分の過去の一生を、細^{さい}大^{だい}漏^{らい}らさずありありと、眼の前に見た事があると云う話をその後^{のち}聞いたが、自分のこの時の経験^よに因^よつて考えると、これはけつして嘘^{うそ}じゃなからうと思う。要するにそのくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると

同時に、急に厭^{いや}な心持になった。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云つて、別に叙述しようもない心持ちだからただの厭とめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなと、直勘^{すかん}つくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けつして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入^{はい}つて来る。

どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろきよするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更^かえて窓へ首を出したり、欠伸^{あくび}をしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態に世の中を崩^{くず}し始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覚していた。自覚すると共に、自分は普通の人間と違って、みんなが活動する時分でさえ、他に釣り込まれて気分が動いて来ないような仲間外れ^{はず}だと考えた。袖^{そで}が触^ふれ違って、膝^{ひざ}を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁^{ゆかり}も由緒もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持であつた。今までは、どうか、どうか、人並に調子を取つて来たのが汽車が留まるや否や、世間は急に陽気になつて上へ騰^{あが}る。自分は急に陰気になつて下へ降^さる、とうてい交際^{つきあい}はできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゆうと減つて、臟腑^{ぞうふ}が薄^{うす}つ片な一枚の紙のように圧^おしつけられる。途

端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまった。まことに申訳のない、御恥ずかしい心持ちを
ふらつかせて、凹^{へこ}んでいた。

ところへ長蔵さんが、立つて来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」

と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上った。魂が地の底へ抜け
出して行く途中でも、手足に血が通^{かよ}つてゐるうちは、呼ぶと返つて来るからおかしなものだ。
しかしこれがもう少し烈^{はげ}しくなると、なかなか思うように魂が身体^{からだ}に寄りついてくれない。
その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛想^{あいそ}を尽かされて、非常な難義をした事
がある。何^{なん}にでも上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだのと思つて、
安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時はこの心持が自分に取つてもつとも新
しくて、しかもはなはだ苦^{にが}い経験であつた。

長蔵さんのどてらの尻を嗅^かぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿^{しゆく}の通りへ出た。一
本筋の通りだが存外広い、ばかりではない、心持の判^{はつきり}然するほど真直^{まつすぐ}である。自分は
この広い往還^{おうかん}の真中に立つて遥^{はる}か向うの宿外^{しゆくはずれ}を見下した。その時一種妙な心持にな
つた。この心持ちも自分の生^{しょう}涯^{がい}中^{ちゆう}にあつて新らしいものであるから、ついでにここに

書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人間らしい了^{りようけん}簡^{かん}になつて、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸^ひく息につれて、やつと胎内に舞い戻つただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場^{ステーション}から出ても、またこの宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよやながら、義理に働いてくれたようなもので、けつして本気の沙汰^{さた}で、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかつたくらい、鈍^{にぶ}い意識の所有者であつた。そこで、ふらついている、氣の遠くなつてゐる、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼^{まなこ}を開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間^まに、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴^{したた}るほどの山が、自分の眼を遮^{さえぎ}りながらも、邪魔にならぬ距離を有^{たも}つて、どろんとしたわが眸^{ひとみ}を翠^{どりうち}の裡に吸寄せてゐる。——そこで何んとか今云つたような心持になつちまつたのである。

第一には大道砥^{だいどうと}のごとしと、成語にもなつてゐるくらいで、平たい真直な道は蟠^{わだか}まりのない爽^{さわやか}なものである。もつと分り安く云うと、眼を迷^{まよ}つかせない。心配せずにこつちへ御^お出^{いで}と誘うようにでき上つてゐるから、少しも遠慮や氣^き兼^{がね}をする必要がない。ばかりじやない。

御出と云うから一本筋の後を喰ツつて行くと、どこまでも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくなつては、窮屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上つたものと自分は堅く信じている。それから左右の家並を見ると、——これは瓦葺も藁葺もあるんだが——瓦葺だろうが、藁葺だろうが、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだいだいに屋根が低くなつて、何百軒とある家が、一本の針金で勾配を纏められるために向うのはずれからこつちまで突き通されてるように、行儀よく、斜に一筋を引っ張つて、どこまでも進んでいる。そうして進めば進むほど、地面に近寄つてくる。自分の立つている左右の二階屋などは——宿屋のように覚えているが——見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒を透して見ると、指の股に這入ると思われるくらい低い。その途中に暖簾が風に動いていたり、腰障子に大きな蛤がかいてあつたりして、多少の変化は無論あるけれども、軒並だけを遠くまで追つ掛けて行くと、一里が半秒で眼の中に飛び込んで来る。それほど明瞭である。

前に云つた通り自分の魂は二日酔の体たらくで、どこまでもとろんとしていた。ところへ停車場を出るや否や断りなしにこの明瞭な——盲目にさえ明瞭なこの景色にばった

りぶつかつたのである。魂の方では驚かなくつちやならない。また實際驚いた。驚いたには違いないが、今まであやふやに不精不精に徘徊していた情性を一変して屹となるには、多少の時間がかかる。自分の前に云つた一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たないさき、景色がいかにも明瞭であるなど心づいたあと、——その際、中間に起つた心持ちである。この景色はかように暢達して、かように明白で、今までの自分の情緒とは、まるで似つかない、景氣のいいものであつたが、自身の魂がおやと思つて、本氣にこの外界に對出したが最後、いくら明かでも、いくら暢びりしていても、全く実世界の事実となつてしまふ。実世界の事実となるといかな御光でもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覺するほど作用が鋭くなかつたため——この真直な道、この真直な軒を、事實に等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼した快感をもつて、他界の幻影に接したと同様の心持になつたのである。自分は大きな往來の真中に立つている。その往來はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通つてゐる。歩いて行けばその外まで行かれる。たしかにこの宿を通り抜ける事はできる。左右の家は触れば触る事が出来る。

二階へ上れば上る事が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸ひとみのなかに受けながら立っていた。自分は学者でないから、こう云う心持ちは何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないのてついでに長くかいてしまった。学問のある人から見たら、そんな事と笑われるかも知れないが仕方がない。その後のちこれに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思つて、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾かたむきかけている。初夏しよかの日永ひながの頃だから、日差ひざしから判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそらく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ていくくらいだから悪いとは云われない。自分は斜はすかけに、長い一筋の町を照らす太陽を眺ながめた時、あれが西の方だと思つた。東京を出て北へ北へと走つたつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなつていた。この町を真直に町の通つてゐるなりに、下くだると、突き当りが山で、その山は方角から推おすと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変らず、北の方へ行くんだと思つた。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さもけっして低くはない。色は真蒼まつさおで、横から日の差す所だけが光るせい、陰の方は蒼あおい底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉すぎ櫨ひのきの多いためかも知れない。ともかくも蓊鬱こんもりとして、奥深い様子であつた。自分は傾かたぶきかけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあつても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はことごとく北へ北へと連なっている。しかし思われなかつた。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなか麓ふもとへ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾かたぶいて陰の方は蒼い山の上うわ皮かわと、蒼い空の下した層がわとが、双方で本分を忘れて、好い加減に他ひとの領分を犯おかし合つてゐるんで、眺める自分の眼にも、山と空の区劃くかくが判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕ゆうべ東京を出て、千住せんじゅの大橋まで来て、裕あわせの尻はしを端折はしよつたなり、松原へかつ

ても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗つても、空^{からすね}脛^{すね}のままで押し通して来た。それでも暑いくらいであつた。ところがこの町へ這^{はい}入^いつてから何だか空脛^{すね}では寒い氣持^{きもち}がする。寒いと云うよりも淋しいんだらう。長藏さんと黙^{もく}つて足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になつた。たびたび空腹になつた事ばかりを書くのはいかがわしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致^{いた}し方がない。實際自分は空腹になつた。家^{うち}を出てから、ただ歩くだけで、人間の食^くうものを食^くわないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに氣分がわるくつても、煩^{はん}悶^{もん}があつても、魂^{たま}が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂^{たま}を落^おつけるためには飯^いを供^くえなくつちやいけないと云い換^かえるのが適當^{とうたう}かも知れない。品^{ひん}の悪い話だが、自分は長藏さんと並んで往來の真中を歩きながら、左右に眼をくばつて、兩側^{りょうそく}の飲食店^{のぞ}を覗^{のぞ}き込むようにして長い町を下^{くだ}つて行^いつた。ところがこの町には飲食店^{のぞ}がだいぶんある。旅^{はたごや}屋^やとか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長藏さんが這入^{はいりゆう}つてしかるべきやたいち流^{りゆう}のがあすこにもここにも見える。しかし長藏さんは毫^{ごう}も支^し度^たをしそうにない。最前^{さいぜん}の我多馬車^{がたばしゃ}の時のように「御前^{ごぜん}さん夕^{ゆうめし}食^{めし}を食^くうかね」とも聞^きてくれない。その癖^{くせ}自分と同じように、きよろきよろ兩側^{りょうそく}に眼を配^はつて何だか発見^{はっけん}したい

ような気色けしきがありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好かつこうな所を見つけて、晩食ばんめしをしたために自分を連れ込む事と自信して、気を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下って行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひもじくは無かつた。胃の中にはまだ先刻さつぎの饅頭まんじが多少残つてゐるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や滅めり込みこみそうな精神が、真直まつすぐな往来の真中に抛ほうり出されて、おやと眼を覚したら、山里の空氣がひやりと、夕日の間から皮膚わかわを冒おして来たんで、心機一転の結果としてここに何か食つて見たくなつたのである。したがって食わなければ食わないでも済む。長蔵さん何か食わしてくれませんかと言うほど苦しくもなかつた。しかし何だか口が淋さびしいと見えて、しきりに縄なわ暖簾のれんや、お煮にめや、御中食おちゆうじき所が気にかかる。相手の長蔵さんがまた申し合せたように右左と覗のぞき込むので、こつちはますます食意くい地じが張つてくる。自分はあの長い町を通りながら、自分らに適當と思ふ程度の一膳いちぜんめし屋をついに九軒まで勘定した。数えて九軒目に至つたら、さしもに長い宿しゆくはどうとうおしまいになり掛けて、もう一町も行けば宿外しゆくはれへ出で抜ぬけそうである。はなはだ心細かつた。時にふと右側を見ると、また酒めしと云う看板に逢ほう着ちやくした。すると自分の心のうちにこれが最後だなど云う感じ

が起つた。それがためか煤すすけた軒の腰障子こししょうじに、肉太したたに認めた酒めし、御肴おんさかなと云う文字がもつとも劇烈な印象をもつて自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、めしの字でも、御肴おんさかなの字でもありあり見える。この様子では、いくら毫も碌ろくしてもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強がんきょうの長蔵さんも今度こそ食いに這入はいるに違なかうと思つた。ところが這入らない。その代りぴたりと留つた。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うかがうと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち留つてこの赤い人間を覗のぞき込むのか、とんと自分には分らなかつた。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留つてみると、やがて障子の奥から赤毛布あかげつとが飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、實際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣ひとえもの一枚だけしきや着ていないんだから、つまりしめべて見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚で凌しのいでると云う事は、あとから

の発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりであつた。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側^{そば}へつかつかやって行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕^{つか}まつた時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆^かられながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆^{しゅ}とさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然^{はんぜん}と覺つた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするんで、けつして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推挙した訳ではなかつた。おおかたどこで、どんな人に、幾^{いく}人逢^あおうとも、版行^{はんこう}で押したような口調で御前さん働く気はないかねを根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を厭^あきもせず、長の歳^{とし}月^{つき}やられたものだ。長蔵さんだつて、天性御前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やつぱり何かの事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう思えば、まことに罪のない男である。要するに芸^げがないからほかの事は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩悶^{はんもん}する気色^{けしき}もなく、自分でなくつちや御前さんをやり得る人間は天下広しといえども二人と有るまい

と云うほどの平氣な顔で、やつている。

その当時自分にこれだけの長蔵観ちようぞうかんがあつたらだいぶ面白かつたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なつている最中だつたから、なかなかそんな余裕は出て来なかつた。この長蔵観は当時の自分を他人と見倣みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序の節じよせつに浮かんだのである。だからヤツぱり紙の上だけで消えてなくなるんだろう。しかしその時その砌みぎりの長蔵観と比較して見るとだいぶ違つてゐるようだ。――

自分は長蔵さんと赤毛布あかげつとの立談たちばなしを聞きながら、自分は長蔵さんから毫ごうも人格を認められていなかったと云う事を見出した。――もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京を出奔しゅつぽんして坑夫にまでなり下がるものが人格を云々うんぬんするのは変挺へんていな矛盾である。それは自分も承知している。現に今筆を執とつて人格と書き出したら、何となく馬鹿ばか氣けでいて、思わず嘖ふき出しそうになつたくらいである。自分の過去を顧かえりみて嘖き出しそうになる今の身分を、昔と比べて見ると実に結構の至りであるが、その時はなかなか嘖き出すどころの騒ぎではなかつた。――長蔵さんは明かに自分の人格を認めていなかった。と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴おんさかなの裏うちから飛び出した若い男を捕つかまえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もつと立ち入つて

云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘している。それを自分はなぜだか少々怪^けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざっとこんな訳なんだろう。――

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家^{かぎ}業^{よう}だとは、常識を質に入れた当時の自分にももつとも思ひようがなかった。まず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不名誉だと心得ていた。自慢にやならないと覺^{さと}つていた。だから坑夫の候補者が自分ばかりと思^{おも}ひのほか突然居酒屋の入口から赤毛布になって、あらわれようとも別段神経を悩ますほどの大事件じゃないくらいは分りきつてゐる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般的な人間であると云う氣になつちまう。取扱方の同様なのを延^ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他人^{ひと}が赤毛布を着て立つてゐるようには思われない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情^{なさけ}なくなつちまつた。自分が直接に長蔵さんと

応対している間は、人格も何も忘れていたんだが、自分が赤毛布になって、君儲かるんだぜと説得されている体裁を、自分が傍へ立つて見た日には方なしである。自分ははたしてこんなものかと、少しく興を醒まして赤毛布を、つらつら観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被つてゐる赤毛布ばかりじゃない、心底から、この若い男は自分と同じ人間だった。そこで自分はつくづくつまらないなと感じた。その上もう一つつまらない事が重なったのは、長蔵さんが、にくにくいほど公平で、自分の方が赤毛布よりも坑夫に適していると云うところを少しも見せない。全く器械的にやっている。先口だから、もう少しこつちを鼻根にしたらかうと思うくらいであつた。——これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切齒詰つた時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有つていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。——しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覺して、大につまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人の談判は見る間に片づいてしまつた。これは必ずしも長蔵さんがことほどさように上手だからと云う訳ではない。赤

毛布の方がことほどさように馬鹿だったからである。自分はこの男を一概に馬鹿と云うが、あながち、自分に比較して軽蔑する氣じゃけつしてない。自分の当時は、長藏さんの話をはいい聞く点において、すぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点において、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。もし強いて違ふところを詮議したら赤毛布を被つてゐるのと絆を着てゐるとの差違くらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分と同じく氣の毒な人と云う意味で、馬鹿のうちに少しぐらいは同情の意を寓したつもりである。

で、馬鹿が二人長藏さんに尾いていつしよに銅山まで引つ張られる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと氣がついて見ると、さっきのつまらない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了見ほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心していると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るやうで、ないやうでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後さる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べてあつたなかに、心は三世にわたつて不可得なりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟な法螺だろが、不可得と云うのは、こんな事を云うんじゃないやなかうかと思う。もつともある人が自

分の話を聞いて、いやそれは念ねんと云うもので心こころじやないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙もくっていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかという、世間には大変利口な人物でありながら、全く人間の心を解とけていないものがある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱よらせられる。そうして、そう云う呑のん気きな料りよう簡けんで、人を自由に取とり扱とうの、教育するの、思うようにして見せるのと騒さわいでいるから驚おどろころちまう。水だつて流れりや返かへつて来きやしない。ぐずぐずしていりや蒸発さつしちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻さつのつまらない考えが蒸発さつしていたと云う事だけを記憶きおくして置いて貰もらえばいい。——そうして吾われながら驚おどろろしたのは、どうも赤毛布あかかげつとと並んで歩くのが愉快えきになつて来た。もつともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音はつおんをする。芋いもの事を芋えもと訓しじたのはこれからさきの逸話えきわに属ぞくするが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声おんせいではなかつた。その上顔かほが人並ひとなみにできていなかつた。この男に比べると角張かくはつた顎あごの、厚あつくちびる唇くちびるの長蔵ちやうざうさんなどは威風堂々いふうたうたうたるものである。のみならず茨城の田舎を突つつ走はしつたのみで、いまだかつて東京の地を踏ふんだことがない。そうして、赤い毛布けつとが妙めづに臭くさい。それにもかかわらず自分はこの山里で、

銅山行きの味方を得たような心持ちがして嬉しかった。自分はどうせ捨てる身だけれども、一人で捨てるより道みちづれ伴があつて欲しい。一人で零落おちぶれるのは二人で零落れるのよりも淋しいものだ。そう明らさまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好いてるところはなかったけれども、ただいっしよに零落れてくれると云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつてしまった。これから推おして考えると、川で死ぬ時は、きつと船頭の一人や二人を引き擦ずり込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいない地獄よりも、必ず鬼のいる地獄を択えらぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻下こつかかん感に乏しい時に汽車を下りたんで、次に真ま直すぐな往来を真直に突き当りの山まで見下みおろしたもんだからようやく正氣づいたのは前申した通りである。それが機縁になつて、今度は食氣くいけがついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく顔勢たいせいを挽回ばんかいしたと云うしだいになる。だに困よつて

また空腹に立ち戻つたと説明したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の一膳飯屋いちぜんめしやはもう通り越している。宿しゆくはすでに尽きかかった。行く手は暗い山道である。とうてい願は叶かないそうもない。それに赤毛布は今食つたばかりの腹だから、勇ましくどんどん歩く。どうも、降参しちまつた。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さんに話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越しちや大変だ。これから左へ切れるんさ」

と云つたなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよつぽどあるんですか、僕は少し腹が減つたんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束したように、そことこに芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云えば天佑てんゆうである。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のように奇き麗れいじゃなかつた。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋

だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかは何を売ってるんだったか、今は忘れちまった。食う方に気を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載せて、真黒な家から、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食った」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡やせていて、湿しめっぽそうで、それで所々皮が剥はげて、剥はげた中から緑ろくしやう青を吹いたような味みが出ている。どれにぶつかつたつて大同小異である。そんなら一目惨澹いちもくさんたんたるこの芋の光景に辟へきえき易いもちゆうして、手を出さなかつたかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中の、とも云わるべきこの御薩おさつを快よく賞しょうがん翫する食欲は十分有つたように思う。しかし「さあ、食った」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おいきたと手を出し損そくなつた。これはおおかた「さあ、食った」の云い方が悪かつたんだらう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎で芋を指しながら、前へ出した手顎を、食えと云う相図にちよつと動かした。

よく考えて見ると、両手が芋で塞^{ふさが}つてるんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、口へ持つて行く事ができないのであった。じれたのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕で、変な曲線を描いて、右の手を芋まで持つて行こうとすると、持つて行く途中で、芋の方が一本ころろと往来の中へ落ちた。これはすぐさま赤毛布^{あかげつと}が拾った。拾ったと思つたら、

「この芋は好芋だ。おれが貰おう」

と云った。それでこの男は芋を芋と発音すると云う事が分つた。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本締^{しめ}て五本、前後二回に受取つたと記憶している。そうしてそれを懐^{なつ}かしげに食いながら、いよいよ宿外れ^{しゆくはず}まで来るとまた一事件起つた。

宿の外れには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れている。自分はもう町が尽きるんだなとは思ひながら、つい芋に心を奪われて、橋の上へ乗つかかるまでは川があるとも

気がつかなかった。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出ている。川がある。水が流れている。——何だか馬鹿氣た話だが、事実にもっとも近い叙述をやらうとすると、まあ、こう書くのが一番適切だろう、こう書いて置く。けっして小説家の弄ぶような法螺七分の形容ではない。これが形容でないとするとその時の自分がいかに芋を旨がったのかがおのずから分明になる。さて水音に驚いて、欄干から下を見ると、音のするのほもつともで、川の中に大きな石がだいぶんある。そうしてその形状がいかに不作法にでき上つて、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝たり、突っ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその水には勾配がついている。山から落ちた勢いをなし崩しに持ち越して、追つ懸けられるように跳つて来る。だから川と云うようなものの、実は幅の広い瀑を月賦に引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変烈しい。鼻っ端の強い江戸ツ子のようにむやみやたらに突つかかってくる。そうして白い泡を噴いたり、青い飴のようになったり、曲つたり、くねつたりして下へ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだん暮れてくる。仰向いて見たが、日向はどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうつと明るくなって、その明かるい空を背負つて山だけが目立つて蒼黒くなつて来た。時は五月だけれども寒いもんだ。この水

音だけでも夏とは思われない。まして入日^{いりひ}を背中から浴びて、正面は陰になった山の色と来たら、——ありや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫^{むらさき}でも黒でも蒼^{あお}でも構わないんだが、あの色の氣持を書こうとすると駄目だ。何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どっと圧^おつ被^{かぶ}さるんじやあるまいかと感じた。それで寒いだろう。實際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方ことごとく、あの山のよ^ような氣味のわるい色になって、自分も長蔵さんも茨城県も、全く世界^{いっしき}一色の内に裹^{つつ}まれてしまふに違ないと云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日^{いりひ}の方^{かた}の局部の色として認めたから、局部から全体を唆^{そその}かされて、今にある山の色が広がるんだと、どつかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧^おつ被^{かぶ}さるんじやあるまいかと云う氣を起したんだと——自分は今机の前で解剖して見た。閑^{ひま}があるとかく余計な事がしたくなって困る。その時はただ寒^さいばかりであつた。傍^{そば}にいる茨城県の毛布^{けつと}が羨^{うらや}ましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向^むたつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はどう突然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄らなかつたのである。——その淋^{さむ}しい山の方から、小僧が一人

やつて来た。年は十三四くらいで、冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいている。顔は始めのうちはよく分らなかったが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこつちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下こしたや闇みの一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隠したりするような仕掛しかけにできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いもを口へ宛あてがつたなり、顎あごを動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云つたつて、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上つた小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいるのを、とんと苦にならない様子で通り抜けるようにする。すこぶる平気な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆おくした気色けしきもなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留^{とどま}った。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になったものだ。なかなかえらいと感心していると、長蔵さんは、

「芋^{いも}を食わないかね」

と云いながら、食い残しを、氣前よく、二本、小僧の鼻の前^{さき}に出した。すると小僧はたちまち二本とも引つたくるように受け取って、ありがとうと何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手取り早い行動を熟視した自分は、なるほど山から一人で下りてくるだけあつて自分とは少々訳が違ふなど、また感心しちまつた。それとも知らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張^{ほおば}つた奴^{やつ}を、唾液^{つばき}も交ぜ^まずに、むやみに呑^のみ下^{くだ}すので、咽喉^{のど}が、ぐいぐいと鳴るように思われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわらず、当人は、傍^{はた}で見るほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい食う。芋だから無論堅いもんじやない。いくら鵜呑^{うのみ}にしたって咽喉に傷のできつこはあるまいが、その代り咽喉がいつぱいに塞^{ふさ}がつて、芋が食道を通り越すまでは呼息^{いき}の詰る恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしない。今咽喉がぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。

後の芋が、前の芋を追つ懸けてぐいぐい胃の腑に落ち込んで行くようだ。二本の芋は、随分大きな奴だったが、これがためたちまち見る間に無くなつてしまった。そうして、小僧はついに何らの異状もなかった。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧の芋を食うところを見ていたが、三人共、食つてしまふまで、一句も言葉を交わさなかつた。自分は腹の中で少しはおかしいと思つた。しかし何となく憐れだつた。これは単に同情の念ばかりではない。自分が空腹になつて、長蔵さんに芋をねだつたのは、つい、今しがたで、餓じい記憶は氣の毒なほど近くにあるのに、この小僧の食ひ方は、自分より二三層倍餓じそうに見えたからである。そこへ持つて来て、長蔵さんが、

「旨まかつたか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べたくらいだから、食つたあとの小僧は無論何とか云うだろうと思つていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙つて立つている。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分つたがこの小僧は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだつた。それが分つてからはさほども思わなかつたが、この時は何だ顔に似合わない無愛嬌な奴だなど思つた。しかしその丸い顔を半分傾けて、高い山の黒ずんで行く天辺を妙に眺めた時は、また可愛想になつた。それから

また少し物騒になった。なぜ物騒になったんだかはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の宿とが、何か深い因縁で互に持ち合つてゐるのかも知れない。詩だの文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらくこんな因縁に勿体をつけて書くもんじやないかしら。そうすると妙な所で詩を拾つたり、文章にぶつかつたりするもんだ。自分はこの永年方々を流浪してあるいて、折々こんな因縁に出つ食わして我ながら変に感じた事が時々ある。——しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやつぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損なつたところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天辺を眺めていた。

すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想である。長蔵さんは平気なもので、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもので、

「どこへも帰りやしねえ」

と云つてゐる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。この小僧は宿無に違ないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸の据つた宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐れとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは少しも起らなかったらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向つて、

「じゃ、おいらといつしよにおいで。御金を儲けさしてやるから」

と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかげつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏まとまつてしまふには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなからう。しかしそう云う自分がこの赤毛布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人であつたん

だから妙なもんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左へでも誘われしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものがだいぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいるときは、目眩めまぐるしいほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生えてるんで、たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しといえども、自分だけであろうくらいで、千住から尻を端折はしよつて歩き出した。だから心細さも人一倍であつたが、この宿しゆくで、はからずも赤毛布あかげつとを手に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちにまたこの小僧を手に入れた。そうして二人とも自分よりは遙はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちゃんとして生活していた。煩悶はんもんも坊ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶の極試きよくみたこの駆落かけおちも、やっぱり坊ちゃんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事事件のように考えていた。生死しやうしの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼で見渡した世の中には、駆落をしたものは一人もない。――たまにあれば新聞にあるばかりである。ところが新聞では駆落が平面になって、一枚

の紙に浮いて出るだけで、云わばあぶり出しの駆落だから、食べたって身にはならない。あたかも別世界から、電話がかかったようなもので、はあ、はあ、と聞いている分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もっとも自分はただ煩悶して、ただ駆落をしたままで、詩とか美文とか云うものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横に飛び廻って、大いに苦しがつたりまた大いに悲しがつたりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的だなどと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、自分の不経験からして、さほど大袈裟に考えないでも済む事を、さも仰山ぎようさんに買い被かぶつて、独りひとでどぎまぎしていた事実を指さすのである。しかるにこのどぎまぎが赤毛布に逢あい、小僧に逢あつて、兩人ふたりの平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄らいだのは、やつぱり経験の賜たまものである。白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かつたようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分も、たわいもなく攻め落された事実を綜合そうごうして考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、満更まんざら待ち草臥くたびれの骨折

損になる訳でもなかった。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやなりましょうと二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折で夜逃をした自分くらいと思っていた。したがって長蔵さんのような気楽な商売は日本にたった一人あればたくさんで、しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻り合せると云う運勢をもつて生れて来なくつちや、とても商売にならないはずだ。だから大川端で眼の下三尺の鯉を釣るよりもよっぽどの根気仕事だと、始めから腰を据えてかかるのが当然なんだが、長蔵さんはとてもそんな自覚は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるびれずに往来の男を捉まえる。するとその捉まえられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつとも普通の商売じやあるまいかと疑念を起すように成功する。これほど成功する商売なら、日本に一人じやとても間に合わない、幾人あつても差支ないと云う氣になる。——当人は無論そう思つてゐるだろう。自分もそう思つた。

この呑気な長蔵さんと、さらに呑気な小僧に赤毛布と、それから見様見真似で、大いに呑気になりかけた自分と、都合四人で橋向うの小路を左へ切れた。これから川に沿って登りになるんだから、氣をつけるが好いと云う注意を受けた。自分は今芋を食つたばかり

だから、もう空腹じゃない。足は昨夕から歩き続けで草臥れてはいるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布の後を跟けて行った。路があまり広くないので四人は一行に並べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足後れて、自分と摺々くらいになって食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いとの両方で、口を利くのが厭になった。長蔵さんも橋を渡ってから以後とんと御前さんを使わなくなった。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかったが、どう云うものかここに至ってますます無口となつちまつた。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿いている冷飯草履がびちやびちや鳴るばかりである。

こう、みんな黙つてしまうと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋しい。夜と云つたつて、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけはどうか、こうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいかな、少しずつ光つて見える。もつともきらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたつて碎ける所は比較的判然と白くなっている。そうしてその声がさあさあと絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細い道が少しずつ、上りになるような気持がしだした。上りだけならこのくらいな事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹する。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引つ込んだりするんだらう。この凸凹に下駄を突つ掛ける。烈しいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になって来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴れていると見えて、よくも見えない木下闇を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履をびしやびしや云わして、暗い凸凹を平氣に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないんだが、この際だから、薄暗い中でびしやりぴしやりと草履の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠蝙蝠といつしよに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸が切れる。凸凹はますます烈しくなる。耳ががぁんと鳴つて来た。これが駆落でなくつて、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺の仕損いから起つた自滅の第一着なんだから、苦しくつても、辛くつても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいやしない。よいいたつて、こだわるだけの勇氣はない。その上先方は相手になつてくれないほど平氣である。すたすた歩いて行く。口さえ利かな

い。まるで取附端とつつきはがない。やむを得ず呼吸いきを切らして、耳をがぁんと鳴らして、黙って後から神妙しんびように尾ついて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟つたのはこの時が始めてである。もつともこれが悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉾山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬たとえに云うが、涙が出るくらいなら安心なものだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてゐる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙氣を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になった長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は氣の毒だったと云つてくれるかも知れない。増長したにしても氣の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてゐるんだから致し方がない。夏になつても冬の心を忘れずに、ぶるぶる悸ふるえていろつたつて出来ない相談である。病気で熱の出た時、牛肉を食わなかったから、もう生しょうが涯がいロースの鍋なべへ箸はしを着けちゃならんぞと云う命令はどんな御大名だつて無理だ。咽喉元のどもと過ぐれば熱さを忘れると

云つて、よく、忘れては怪しからんように持ち掛けてくるが、あれは忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘である。こう云うと詭弁ぎべんのように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正しょう直じき銘しょうめいのところを云うのである。いったい人間は、自分を四角張った不変ふへん体たいのように思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置かないで、平押ひらおしに他人を圧おしつけたがる事がだいぶんある。他人なら理窟りくつも立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢あわせて嬉うれしがつてるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとすると、立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎とがめて、万事万端向うがわるいように噪さわぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨にらんで、旗を揚げあげる人達である。御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪にくくつて、困るものだ。自分もあの時駆落かけおちをせずに、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動しじゅういているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変つちや大変だ、罪惡だなどよくよ思つて、年を取つたら——ただ学問をして、月給をもらつて、平和な家庭と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかつたら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見参げんさんしなかつたならば——あらゆる

苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流転るてんと、あらゆる漂泊ひょうはくと、困憊こんばいと、懊惱おうのうと、得喪とくそうと、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもっとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかったなら——ありがたい事に自分はこの至大なる賚たまものを有っている、——すべてこれらがなかったならば、自分はこんな思い切った事を云やしない。いくら思い切った事を云ったつて自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神妙しんびようなものが、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙にならんとは限らない。——抜けそうな足を棒のように立てて聞くと、がんと鳴つてゐる耳の中へ、遠くからさあさあ水音が這入はいつてくる。自分はますます神妙になつた。

この状態でだいぶ来た。何里だか見当けんとうのつかないほど来た。夜道だから平生へいぜいよりは、ただでさえ長く思われる上へ持つてきて、凸凹でこぼこの登りを膨ふくらつ脛ぱきが腫はれて、膝頭ひざがしらの骨と骨が擦すれ合つて、股ももが地面じびたへ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのつて——それでも、生きてる証拠には、どうか、どうか、長蔵さんの尻を五六間と離れずに、やつて来た。これはただ神妙に自己を没却あきらめてした諦の体たらくから生じた結果ではない。五六間以上おく後れると、長蔵さんが、振り返つて五六歩ずつは待合してくるから、仕方なしに追い

つくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずだらだら、ちびちびに自己を奮興ふんこうさせた成行なりゆきに過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後が見えたもんだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突つ切つて、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおむいた時、始めて勘づくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御題目おだいもくのように見詰めて覘ねらいをつけて来たせいで、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだらう。信心くしんの功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違いない。自分はどう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至つては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留とまつてくれる。留まつてくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだった。とうてい素人しろうとにやできない芸である。自分は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだなど、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んで

いるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。
 まるで人形のように活動する男であつた。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛
 布の方が遙はるかに取り扱いやすかつたに違ない。小僧は——例の小僧は消えて無くなつちまつ
 た。始めのうちこそ小僧だから後あとになるんだらうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうく
 らいの了りようけん簡かんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをびしやりびしやりと鳴らしながら凸でこぼ
 凹こ路を飛び跳はねて進行する有様を目撃してから、こりや敵かなわないと覚悟をしたのは、よ
 つぼど前の事である。それでもしばらくの間はぴしやりぴしやりが自分の袖そでと擦すれ擦すれく
 らいになつて、登つて来たが、今じやもう自分の近所には影さえなくなつた。並んで歩く
 うちは、あまり小僧の癖かに活潑かつぱつにあるくんで——活潑かつぱつだけならいいが、活潑かつぱつの上に非常
 に沈黙しんもくなんで——、随分物騒ぶつそうな心持ちだつた。もし笑うなら、極きわめて小さくつて、非常に
 活潑かつぱつで、そうして口を利きかない動物を想像して見ると分る。滅多めったにありやしない。こんな
 動物といつしよに夜山越やまごえをしたとすると、誰だつて物騒ぶつそうな気持になる。自分はこの時こ
 の小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠こうもりのようだと云つたが、全く
 蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたった二人限ふたりぎりだつ
 たら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋しいさむ夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異なる感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、おおいと人を呼ぶ奴は気味がよくない。山路で、黒闇くらやみで、人つ子一人通らなくって、御負おまけに蝙蝠みちづれなんど道伴になつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さんが事ありげに声を揚げたのである。事のあるべきはずでない時で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分を呼んだんなら、何か起つたなとびくんとするだけで済むんだが、五六間後うしろから行く自分の注意を惹くためとは受取れないほど大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違ふ。こつちを向いた声じやない。おおいと右左りに当つたが、立ち木に遮られて、細い道を向うの方へ遠く逃げのびて、遙はるかの先でおおいと云う反響があつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがそ

の時はなかなかとぼけちゃいなかった。自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。先へ行つたと思うのが当り前で、まかり間違つても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よっぽど蝙蝠に祟^{たた}られていたに違ない。この祟^{あした}は翌朝になつて太陽が出たらすっかり消えてしまつて、自分で自分を何^{なん}て馬鹿だろうと思つたくらいだが、実際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈^{はげ}しく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがないもんだから、人魂^{ひとだま}の尻尾^{つぽ}のように、幽^{かす}かに消えて、その反動か、有らん限りの木も山も谷もしんと静まつた時、——何とも返事がない。この反響が心細く継続^{つながら}りながら消えて行く間、消えてから、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と自分と三人が、暗闇^{くらやみ}に鼻を突き合せて黙つて立つていた。あんまり好い心持じやなかった。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云つた。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意気な事ができるはずがないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合つちまつた。定めし変な顔をして受合つたんだろうが、受合つたら急

げても、急げないでもむちやくちやに急いでしまった。この間はどこをどんな具合に通つたか、まあ断然知らないと言つた方が穩当だろう。やがて長蔵さんがびたりと留つたんで、ふと気がついた。すると一つ家の前へ出ている。ランプが点いている。ランプの灯が往来へ映っている。はつと嬉しかった。赤毛布がありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切つて向うの谷へ折れ込んでゐる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけなかったし、その上眼がくらんで、耳が鳴つて、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやつて来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入つて来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだとつくづく感心した。ランプがこんななにかがたかつた事は今日までまだかつてない。後から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛をして、そこで自分達を待つてたんだそうだ。おおいと云う声も小僧やあと云う声も聞えたんだが返事をしなかつたと云う話した。偉い奴だ。

同勢はこれでもやく揃つたが、この先どうなる事だろうと思ひながら、相変らず神妙にしていると、長蔵さんは自分達を路傍に置きつ放しにして、一人で家の中へ這入つて行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じやもつたない。牛さえ

いれば牛小屋で馬さえ嘶けば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかに何にもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉たてである。残る半分は夜つびで明けて置くんじゃないかしら。ことによると、敷居みぞの溝に食い込んだり動かないのかも知れない。屋根は無論藁わら葺ぶきで、その藁が古くなって、雨に腐ふやけたせいとか、崩くずれかかって漠然ばくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分らないほど、ぶくついて見える。その中へ長蔵さんは這入はいって行いった。なんだか穴の中へでも潜もぐり込んで行いったような心持だった。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜はすに差してくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫さんまんなものである。この男はたとい地震がゆつて、梁はりが落ちて来ても、親の死目に逢あうか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違ちがない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こつちを向いて立った股倉またぐらから、ランプの灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間にか低くなつたと見える。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ泊とまって行いこう。みんな這

入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神しんびよう妙が急に破裂して、身体からだがぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明あかす事が、それほどの慰藉いしやを自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、とんと気がつかなかった。やはり神妙ぎよの結果泊る所が見つかつて、泊る気が起らなかったんだろう。こうなると人間ほど御ぎよしやすいものはない。無理でも何でもはいはい畏かしこまって聞いて、そうして少しも不平を起さないのみか大に嬉おおいうれしがる。当時を思い出すたびに、自分もつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなど云う自信ごもなが伴つてくる。兵隊はああでなくつちやいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと言ふ事も悟つた。——

こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくつて解らない。実を云うと、もつとずつとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにむずかしくなつちまつた。例たとえば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見倣みなす事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲むものだと言ふ気がつかずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種きようの境界がいに馴ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺まひ

させた結果としてでき上るもんだから、図に乗ってきゅきゅ押して行くと、人間がみんな馬鹿になっちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德だと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日まで生きていたならば、いかに順良だって、いかに励精だって、馬鹿に違ない。だれの眼から見たって馬鹿以上の不具だろう。人間であるからは、たまには怒るがいい。反抗するがいい。怒るように、反抗するようにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつたりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、反抗させないように、御お膳立ぜんだてをするが至当じやないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい云っていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代り、今のような身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、七日七晩なぬかなばん引つ張りつづけに引つ張つたってちよつとも動きやしない。今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが人間たるところだと思つてゐる。分りやすいように長蔵さんを引合ひきあいに出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間ごとに變つてゐる。變るのが当然で、變るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間

の性格には矛盾が多いと云う意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があつてもなくつても同じ事に帰着する。嘘だうそと思うなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たつて、以上分わつこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云つては濟まない。こんな景氣のいいタンカを切る所存は毛頭なかつたんだが、実を云うとこう云う仔細しさいである。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたんびに苦い顔にがをして謝罪あやまつていた。自分ながら、どうも困つたものだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくっちゃ信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入つたものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやつぱり自分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減つて飯が食いたくなくて、御腹が張ると眠くなつて、窮きゆうして濫らんして、達おこなして道を行つて、惚ほれていっしょになつ

て、愛想^{あいそ}が尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変^{きんきおうへん}の沙汰^{さた}である。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように弁じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の気焰^{きえん}をやめて、再びもとの神妙^{しんびよう}な態度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立つて、往來を向きながら、ここへ泊つて行こうと云い出した時、こんな破屋^{あばらや}でも泊る事が出来るんだつたと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元來^{がんらい}泊るために建ててあるんだなど、ようやく氣がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それでいて身体^{からだ}は蒻^{こん} 蕸^{やく}のように疲れ切つてゐる。平生^{いっしょ}なら泊りたい、泊りたいですべての内臓^{はちき}が張切れそうになるはずなのに、没自我^{ぼつじが}の坑夫^{こうふ}行^{ゆき}、すなわち自滅の前座としての墮落^{あきらく}と諦めをつけた上の疲労だから、いくら身体に泊る必要があつても、身体の方から魂へ宛てて宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下つたんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しがったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さ

んの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、實際この時の心の状態は、たとえこう譬を借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛ゆるんで、立ち切れない足を引き摺ひつて、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布あかげつとはのそのそ這入はいってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履ぞうりの尻が勢よく踵かかとへあたるんで、ぴしやぴしや云う音が飛ぶように思われた。

這入つて見るとぷんと臭におった。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着むとんじやくであつた。土間から上へあがる段になつて、雑巾ぞうきんでもと思つたが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がつちまつた。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺めながめていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころりと転がっている。自分は尻だけおろして、障子しょうじ——障子は二枚あつた——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立ててあるか

ら、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間まから茶と煙草盆たばこぼんを持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶる尋常に聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大変な誤解をしていたんだねと呆れ返あきかえるものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そうして長蔵さんと談話はなしをし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとのからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云つてた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入はいった時に、残らず聞いてしまったんだらう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑氣屋のんきやを銅山やまへ連れて行くんで、自然その行き還りにはこの主人の厄介やっかいになりつけてるから、別段氣にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠いねむりを始めた。いつから始めたか知らない。馬を売うり損そこなって、どうかしたと云うところから、だんだん判然はつきりしくなつて、自然と長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、

破屋^{あばらや}までも消えた時、こくりと眠^{ねむり}が覚^さめた。気がつく^{きがつく}と頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡^{もちや}げるとはなはだ重い。主人はやつぱり馬の話をしている。まだ馬かと思つてゐるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打^う遣^{つちや}つて置くと、忽然^{こつぜん}ぱつと眼があいた。薄暗い部屋の中に、影のような長蔵さんと亭主が膝^{ひざ}を突き合せてゐる。ちやうど、借^{かり}がどうかしてハハハと亭主が笑つたところだつた。この亭主は額^{ひたい}が長くつて、斜^{はす}に頭の天^{てつ}辺^{へん}まで引込^{ひっこ}んでゐるから、横から見ると切^{きり}通^{とお}しの坂^{さか}くらいな勾^{こう}配^{ばい}がある。そうして上になればなるほど毛が生^はえてゐる。その毛は五分^{ごぶ}くらいなのといつすん一寸^{いっすん}くらいなのとが交^{まじ}つて、不規則にしかも疎^{まばら}にもじやもじやしてゐる。自分が居眠^{いねぶ}りからはつと驚いて、急に眼を開けると、第一にこの頭^{かぶ}が眸^{ひとみ}の底に映つた。ランプが煤^{すす}だらけで暗いものだから、この頭も煤だらけになつて映つて来た。その癖距離は近い。だから映つた影は明^{めい}瞭^{りょう}である。自分はこの明瞭^{めいりょう}でかつ朦朧^{もうろう}なる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄^{とつさ}嗟^さにふと見たのである。この時はあまり好い心持ではなかつた。それがため、居眠りもしばらく見合せるような氣になつて、部屋中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れてゐる。こちらの横に茨城県が長く伸びてゐる。毛布^{けつと}の下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開^あいて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど

黒くなつてゐる所へ、油煙とともにランプの灯があたりから、よく見ていると、藁葺の裏側が震えるように思われた。

それからまた眠くなつた。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうつとりして、うつとりの極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足飛に正氣へ立ち戻つたが、三回四回と重なるにつけて、眼だけ開けても氣は判然しない。ぼんやりと世界に歸つて、またぞろすぐと不覺に陥つちまう。それから例のごとく首が落ちる。微に生きてゐるような氣になる。かと思つとまた一切空に這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめつて来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまつたのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覺めた時は、もう居眠りはしていなかつた。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなつてゐた。そうして涎を垂れてゐる。——自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金話を聞いて、また居眠りの続を復習してゐるうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長くなつたぎり、魂の音沙汰を聞かなかつたんだから、眼が覺めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返つてゐるのを見るや否や、眼をあいて涎を垂れて、横になつたまま、じつとしてゐた。自覺があつて死んでたらこんなだろう。生き

てるけれども動く気にならなかった。昨夜の事は一から十までよく覚えている。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくつて、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然と区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が当にならなくなる。要するに人世は夢のようなものだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、ううんと伸をして、寝たまま握り拳を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦つて、腕のありたけ出たところで、勢がゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹んだ頬つぺたをぼりぼり掻き出した。起きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やつぱり眼が覚めていないなと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしんと音がして、根太が抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあつて、むにやむにやをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘の高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたつて際限がないから、起き上った。長蔵さんも

全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布ばかりである。これはまた呑気なもので、依然として毛布から大きな足を出してぐうぐう鼾声をかいて寝ている。それを長蔵さんが起す。――

「御前さん。おい御前さん。もう起きないと御午までに銅山へ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺り始めたんで、やむを得ず、毛布の方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端に立ち上った。これでみんな起きたようなものの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか迷つてると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云つて、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうなると自分も何とか片をつけなくっちゃならないから、一番あとから下駄を突掛けて、長蔵さんと赤毛布が草鞋の紐を結ぶのを、不景氣な懐手をして待つていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯あさめしを食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅ぜいたく沢たくの沙汰さたのように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の結果、必要とまで見倣みなされているものが、急に余計な事になつちまうのはおかしいようだが、その後のちこの顛倒てんとう事件を布衍ふえんして考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやつてゐる事が当然になつて、一人だけでやる事が余計のように思われるんだから、当然になろうと思つたら味方こしらを大勢拵こしらえて、さも当然であるかの容子ようすで不当な事をやるに限る。やつては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布でさえ自分にはこれほどの変化を来したんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたもんだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくても好いだらうね」

飯を食わなくなつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分
はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいような根性こんじょうが幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期に反した起きたなり飯抜きしゅつたつの出立に、自然不平の色が出ていたためだろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつと兩人ふたりにも同じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで五里十里と歩き出すものは宿無やどなしか、または準宿無じゆんしゆくなでなくつちやならぬい。目が醒さめて、夜が明けてるのに、汁の煙けむも、漬物つけものの香においも、いっそう連想に乗つて来ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養くようをする呑氣屋のんきやで、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸さいわいな人間である。自分は十九年来始めて、こう云う人間と一つ所ところに泊とどつて、これからまたいっしよに歩き出すんだなと思つた。赤毛布と小僧の顔色を伺つて見ると少しも朝飯を予期している様子がないので、双方共朝飯を食たつて慣なれていない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先から、もう、坑夫以下に摺ずり落ちていたと云う事が分つた。しかし分つたと云うばかりで別に悲しくもなかつた。涙は無論出なかつた。ただ長蔵さん

が、この朝飯の経験に乏^{とほ}しい人間に向つて、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかつたのを、今では残念に思つてゐる。食つた事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨^{しょう}励^{れい}されて「食いたい」と答えるか。——つまらん事だがどつちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立つて、ちよつと後^{うし}ろを振り返つたが、

「熊^{くま}さん、じや行つてくる。いろいろ御世話様」

と軽く力^{ちから}足^{あし}を二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寝ている。覗^{のぞ}いて見ると、昨^{ゆうべ}夕^{ゆふ}うつつに氣味をわるくした、もじやもじやの頭が布団^{ふとん}の下から出ている。この亭主は敷蒲団^{しきぶたん}を上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじやもじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうして熊さんの顔が出た。この顔は昨夜^{ゆうべ}見たほど妙でもなかつた。しかし額^こがさかに瘡^{かさ}けて、脳天まで長くなつてゐる事は、今朝でも争^あわれない。熊さんは床の中から、「いや、何にも御構^{おかまい}申さなかつた」と云つた。なるほど何にも構^かわらない。自分だけ布団をかけてゐる。

「寒かなかったかね」

とも云った。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後から、熊さんが欠伸交りに、

「じゃ、また帰りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足後れて、小僧と赤毛布の尻を追つ懸けて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中には慣れ切ったものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午までは銅山へ着かなくつちやならないから急ぐんだそうだ。なぜ午までに着かなくつちやならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇気がなかったから、黙って食つついて行つた。するとなるほど登らないが、聞い

て来た。昨夕あれほど登つたつもりなのに、まだ登るんだから嘘のようでもあるが

実際見渡して見ると四方は山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山がある

んだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這入る訳になる。この模様では銅山のある所は、定めし淋

しいだろう。呼吸を急いで登りながらも心細かつた。ここまで来る以上は、都へ帰るのは

大変だと思うと、何の酔興すいきようで来たんだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出奔しゅつぽんしたんだから、おいそれと帰りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目に懸かからなように、朽果くちはててしまうのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼吸を継つぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すこいほど木を被かぶつている上に、雲がかかつて見る間まに、遠くなつてしまふ。遠くなると云より、薄くなると云う方が適當かも知れない。薄くなつた揚句あげくは、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そうかと思うと、雲の方で山の鼻面はなづらを通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲まき返しているうちに、薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなって、木の色が明かになる頃は先刻さつきの雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当けんとうがつかなくなる。立ちながら眺ながめると、木も山も谷もめちやめちやになつて浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届あたりまで落ちかかった。長蔵さんは、

「こりや、雨だね」

と、歩きながら 独^{ひとりごと}言^{こと}を云った。誰も答えたものはない。四^{よつたり}人とも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲^まかれるような、また埋^{うず}められるような有様で登って行つた。自分はこの雲が非常に嬉しかった。この雲のお蔭^{かげ}で自分は世の中から隠したい身体^{からだ}を十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせずにその中を歩いて行ける。手足は自由^とに働いて、閉じ籠^こめられたような窮屈も覚えないう上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬^{ほうぶ}られると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だと、ほつと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全くの氣違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自分が、時と場合によれば、翌^{あす}が日にも、また雲が恋しくならんとも限らない。それを思うと何だか変だ。吾^わが身^みで吾が身が保証出来ないような、また吾が身が身でないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かたまつたり、隔^{へだ}てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入ったりする。茨城の毛布^{けつと}が赤くなつたり白くなつたりする。長蔵さんの、どてらが、わずか五六間の距離で濃くなつたり薄くなつたりする。そうして誰も口を利^きかない。

そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後になり先になり、殖もせず滅もせず、四つのまま、引かれて合うように、弾かれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になったんだから、世の中は自分共にたった四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿無である。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷って歩く連中である。この連中と道伴になって登り一里、降り二里を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になった。時計がないんで何時だから分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過とも云われるし、また夕方と云つても差支ない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微かに見える山の色であった。その色が今までのとは打つて変っている。いつの間にか木が抜けて、空坊主になったり、ところ斑の禿頭と化けちまったんで、丹砂のように赤く見える。今までの雲で自分と世間を一筆に抹殺して、ここまでふらつきながら、手足だけを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒めた気分になった。色彩の刺激が、自分にこう

強く応えようとは思いがけなかった。——実を云うと自分は色盲じやないかと思うくらい、色には無頓着な性質である。——そこでこの赤い山が、比較的烈しく自分の視神経を冒すと同時に、自分はいよいよ銅山に近づいたなと思つた。虫が知らせたと云えば、虫が知らせたとも云えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅を連想したんだろう。とにかく、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世の中で直覺的と云うのは大概このくらいなものだと思うが——いわゆる直覺的に事実を感得した時に、長蔵さんが、

「やつと、着いた」

と自分が言いたいような事を云つた。それから十五分ほどしたら町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦つて視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿とか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔の生えない、新しづくめの上に、白粉をつけた新しい女までいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇もないうちに通り越しちまつた。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立つて、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいなくっちゃ、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっちゃいけないんだか、ちつとも分らなかつたから、黙って橋の上へ立つて、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家が見える。やつぱり木造の色が新しい。中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古ぼけて禿げてるのは山ばかりだった。何だかまた現実世界に引き摺り込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙って橋の向を覗き込んでるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭に答えたが、内心あまり好くはなかつた。なぜだか知らないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念がある様子であつた。赤毛布と小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭からこの兩人は過去の因果で、坑夫になって、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色がありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危ないかと睨まれていたのかも知れない。好い面の皮だ。

それから四人揃そろつて、橋を渡つて行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中で一番いかめしい奴やつを指さして、あれが所長うちの家だと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こつちがシキだよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシキと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よつほど聞き返そうかと思つたが、大方これがシキなんだろうと思つて黙つていた。あとから自分もこのシキと云う言葉を明めい瞭りょうに理解しなければならぬ身分になつたが、やつぱり始めにぼんやり考へついた定義とさした違もなかつた。そのうち左へ折れていよいよシキの方へ這入はいる事になつた。鉄軌レールについてだんだん上のぼつて行くと、そこここに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思つたが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまたで、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限つて貸してくれる規定であるから、自分のような一人ものは這入りたくたつて這入れないんだつた。こう云う小屋の間を縫あつて、飽あきずのぼに上つて行くと、今度は石崖いしがけの下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続

々あらわれて来た。大きさも長さも似たもので、みんな崖^{がけ}下^{した}にあるんだから位地にも変りはないが、向^むだけは各々^{めいめい}違^{ちが}つてる。山坂を利用して、なけなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅^{ぜい}沢^{たく}は言^いつていられない。やつとの思いで、ならした地面へ否^{いな}応^{おう}なしに、方角のお構^{かま}なく建^たててしまったんだから不規則なものだ。それに、第一、登^{のぼ}つて行く道^{みち}がくねつてる。あの長屋の右を歩いてるなと思うと、いつの間^まにかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭の上だがと心待ちに待っていると、急に路^{みち}が外^それて遠くへ持^もつてかれてしまう。まるで見^{けん}当^{とう}がつかない。その上この細長い家から顔が出ている。家から顔が出ているのが珍らしい事もないんだが、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がまた、尋常でない。青くつて、黒くつて、しかも茶色で、とうてい都会にいては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りながら、始めてこの顔を見た時は、シキと云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシキだなと感じた。しかしいくらシキでも、こう云う顔はたくさんあるまいと思つて、登^{のぼ}つて行くと、長屋を通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しまいにはシキとは恐ろしい所だと思ふまで、いやな顔をたくさん見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋から出ている顔はきつ

と自分らを見ていた。一種癡惡な眼つきで見えていた。——とうとう午後の一時に飯場へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚き出しをするから、そう云う名をつけたものかも知れない。自分はその後飯場の意味をある坑夫に尋ねて、篋棒め、飯場たあ飯場でえ、何を云つてゐるんでえ、とひどく剣突を食つた事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用しているんだから、滅多に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となつてゐるんだから至極簡単でかつ全く實際的なものである。

そう云う訳で飯場の意味は今もつて分らないが、とにかく崖の下に散在している長屋を指すものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布と小僧を連れてほかの飯場へ出て行つてしまった。それで二人はほかの飯場の飯を食うようになったんだなと後から気がついた。二人の消息はその後いつこう聞かなかった。銅山のなかでもついぞ顔を合せた事がない。考

えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布と、夕方の山から降つて来た小僧と落ち合つて、夏の夜を後になり先になつて、崩れそうな藁屋根の下でいっしょに寝た明日は、雲の中を半日かかつて、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなつちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏まりそうで、纏らない、云わばでき損いの小説めいた事がだいぶある。長い年月を隔てて振り返つて見ると、かえつてこのだらしく尾を蒼穹の奥に隠してしまつた経歴の方が興味の多いように思われる。振り返つて思い出すほどの過去は、みんな夢で、その夢らしいところに追懷の趣があるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧な点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがって十分に発展して来て因果の予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密の中に流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半日の画の方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭なくなつて好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神さんもそうである。もつと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵えたものじゃないから、小説のように面白くはない。

その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事實は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいつしよであつた。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極めて簡単なものであつた。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使つてくれと云つたばかりである。自分の姓名も出生地も身元も履歴も何にも話さなかつた。もちろん話したくつたつて、知らないんだから、話せようもないんだが、こうまで手つ取り早く片づける了簡とは思わなかつた。自分は中学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だつて、それ相應の手續がなくつちや採用されないもんだとばかり思つていた。大方身元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺すんだらう、その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをして考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場頭は——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかつた。眉毛の太くつて蒼髯の痕の濃い逞しい四十恰好の男だつた。——その男が長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無難作に云つちまつた。ちようど炭屋が土釜を台所へ担ぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々山越をして坑夫になりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹の中でこの飯場頭を恨んだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直に分る。

飯場頭と云うのは一の飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡しだいでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間に談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云つたなり、赤毛布と小僧を連れて出て行つた。また帰ってくる事と思つたが、その後いつこう影も形も見せないんで、全く、置去にされたと云う事が分つた。考えるとひどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶もしない。それにしてもぼん引の手数料はいつ何時どこで取つたものか、これは今もつて分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛げ込まれる。少しも人間らしい心持がしないんで、大いに悄然としてゐると、出て行く三人の後姿を見送つた飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが變つて

いる。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩出逢う、万事を心得た苦労人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

飯場掛^{はんばがかり}

の言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きたくなった。さんざつぱらお前さ

んで、厭^{いや}になるほどやられた揚句^{あげく}の果^{はて}、もうとうてい御前さん以上には浮ばれないものと

覚悟をしていた矢先に、突然あなたの昔に帰ったから、思いがけない所で自己を認められ

た嬉しさと、なつかしさと、それから過去の記憶——自分はいつ一昨日^{おととい}までは立派にあな

たで通つて来た——それやこれやが寄つて、たかつて胸の中へ込み上げて来た上に、相手

の調子がいかに鄭寧^{ていねい}で親切だから——つい泣きたなくなった。自分はその後^ごいろいろな

目に逢^あつて、幾度となく泣きたなくなった事はあるが、擦^すれ枯^{から}しの今日^{こんにち}から見れば、大抵は

泣くに当らない事が多い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目に

なれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜^{くちお}しい、心細い涙は経験で消す事が出来

る。ありがた涙もこぼさずに済む。ただ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他^{ひと}

から認識された時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前^{てまえ}勘

の強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置

いて、書生のために置いてやったような心持になると同じ事じやないかしら。

こう云う訳で、飯場掛りの言葉を行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかった。悄然とはしていたが、氣は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が

出て来た。ただ思うように口が利けないから、黙つて向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。――

「……まあどうして、こんな所へ御出なすつたんだか、今の男が連れて来るくらいだから大概私にも様子は知れてはいるが――どうです、もう一遍考えて見ちやあ。きつと取ツ附坑夫になれて、金がうんと儲かるてえような旨い話でもしたんでしょう。それがさ、實際やつて見るとどうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に来る仕事じやない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたつて勤まりつこありませんよ。……」

飯場頭はここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくっちゃならない。幸いこの時はもう泣きたいところを通り越して、口が利けるようになっていた。そこで自分
はこう云つた。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲しくないです。何も儲けるためにやって来た訳じ

やないんですから、——そりや知ってるです、僕だつて知ってるです……」

と、この時知ってるですを二遍繰り返した事を今だに記憶している。はなはだ穩かならぬ生意氣な、ものの云いようだった。若いうちは、たつた今まで悄氣しよげでいても、相手しだいですぐつけ上つちまう。まことに赤面の至りである。しかもその知ってるですが、何を知ってるのかと思うと、今自分を連れて来た男、すなわち長蔵さんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹ほらふきであると云う真相をよく自覺していると云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志願などと説明して見たつて今更いまさらどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚榮心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家か業ぎよに似合あわぬ篤とく実じつな男で、かつ自分の不經驗を氣の毒に思うのあまり、この生意氣を生意氣と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まことにありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭かしらの勢力の広大なるに驚くにつれて、僕は知ってるですを思い出しては独ひとり赧あかい顔をしていた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉はらこまきちである。今もつて自分は好い名だと思つてる。

原さんは別に厭な顔つきもせず、黙って自分の言訳を聞いていたが、やがて頭を振り出した。その頭は大きな五分刈で額の所が面摺のように抜き上がっている。

「そりや物数奇と云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるつたて、何も家を出る時から坑夫になると思いつめた訳でもないんでしよう。云わば一時の出来心なんだからね。やつて見りや、すぐ厭になつちまうな眼に見えてるんだから、廃すが好うがしよう。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したものあ、有りやしませんぜ。え？ そりや来る。幾人も来る。来る事は来るが、みんな驚いて逃げ出しちまいますあ。全く普通のものの出来る業じゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑夫をしなくつたて、口過だけなら骨は折れませんかあ」

原さんはここに至つて、胡坐を崩して尻を宙に上げかけた。自分はどうしても落第しそうな按排である。大いに困った。困った結果、坑夫と云う事から気を離して、自分だけを検査して見ると、——何だか急に寒くなった。袷はさつきの雨で濡れている。洋袴下は穿いていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の気候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは気が張っていたから、好かつた。しかし飯場へ来て休息した上に、坑夫になる見込がほとんど切れた

となると、情^{なさけ}ないのが寒いのと合併して急に顫^{ふる}え出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪^たえんほど醜^{みにく}いもんだつたろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置^{おきざり}去^さにして、挨拶^{あいさつ}もしずに出て行つた長蔵さんが恋しくなつた。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれるまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓^{がまぐち}口^{くち}を長蔵さんに取られてから、懷^{ふところ}中には一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減つて山の中で行^{ゆきだ}倒^{おれ}になるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢^あえない事もないだろう。逢つてこれこれだと泣きついたら、今までの交^{つき}際^{あい}もある事だから、好い智慧^{ちえ}を貸してくれまいものでもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよつとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑^{ひま}な事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好^{すき}な原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなくなつた長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理^{わけ}由^ゆだろう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板^{はん}行^{こう}で押したように考えないで、敵のうちに味方を探したり、味方のうちで敵を見露^{みあら}わしたり、片^{かた}方^{つぽ}づかないように心を自由に活動させなくつてはい

けない。

弱^{じやくはい}輩^{はい}な自分にはこの機^き合^{あひ}がまだ呑^のみ込めなかつたもんだから、原さんの前に立つて
顫えながら、へどもどしていると、原さんも氣の毒になったと見えて、

「あなたさえ帰る氣なら、及ばずながら相談になろうじやありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切つて出られた時に、自分ははつとありがたく感じた。
ばかりなら当り前だがはつと氣がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこ
の原さんを除いて、ほかにないんだと氣がついた。氣がつくと同時にまた口が利^きけなくな
った。是非坑夫にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やつぱり立
ちすくんでいた。氣がついても何にもならない、ただ右の手で拳^{げんこつ}骨^{こしち}を拵^{こしら}えて寒い鼻の下
を擦^{こす}つたように記憶している。自分はその前寄席^{よせ}へ行つて、よく噺^{はなし}家がこんな手真似^{てつき}を
するのを見た事があるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手
真似を見ていた原さんが、今度はこう云つた。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」
旅費は無論ない。一厘たりとも金氣^{かねけ}は肌に着いていない。のたれ死^{じに}を覚悟の前でも、金
は持つてゐる方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の

草鞋錢わらしせんでも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地に摺すりつけても、原さんから旅費を恵んで貰もらつたろう。實際こうなると廉恥れんちも品格もあつたもんじやない。どんな不体裁ふていさいな貰もらい方でもする。——大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。——しかしけつして褒められた始末じやない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違ちがう。人間の生地きじはこれだから、これで差支さしつかえないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地は小豆だから、羊羹の代りに生小豆なまを嚙かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもない料簡りようけんになつたものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遙はるかに高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らないで、生涯しょうがい練羊羹ばかり味わつて結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭はんばがしらからわずかの合力ごうりきを仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せっかくの好意で調ととのえてくれる金も、二三日木賃宿にさんちきちんやどで夜露を凌しのげば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途あてどもななく流れ出さなければならぬと、冥々めいめいのうちに自覚したからである。自分は屑いさぎよく涙なみだ

金を断つた。断つた表向は律義にも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索すると、慾の天秤に懸けた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助を断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使つて下さい。せつかく来たんだから、僕はどうしてもやつて見る気なんですから」

「随分酔興ですな」

と原さんは首を傾げて、自分を見つめていたが、やがて溜息のような声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」

と云つた。

「帰るつたつて、帰る所がないんです」

「だつて……」

「家なんかありません。坑夫になれば乞食でもするより仕方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利くのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出にくいと知りながら、我慢して使つた結果、おのずと拍子に乗つて来た勢いに違ないんだから、まあ器械的变化と見做しても、差支なからうが、

妙なもので、その器械的の変化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口を出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌^{しゃべ}る。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分はだんだん大胆になって来た。

いや、大胆になったから饒舌^{しゃべ}れたんだろう、君の云う事は顛倒^{あべこべ}じゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐^{ちんぷ}でかつ時々嘘^{うそ}になる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもっとも首肯^{うなず}くだろう。

自分は大胆になった。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌^{まぎわ}つておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覚して来た。一昨日^{おととい}家を飛び出す間際^{まぎわ}までは、夢にも坑夫になろうと云う分別は出なかった。ばかりではない、坑夫になるための駆落^{かけおち}と事がきまっていたならば、何となく恥^{はにか}ずかしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔^{しゅつぽん}の時期を曖昧^{あいまい}に延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊^{つちくれ}だか分らない坑掘^{あなほり}になり下^{さが}る目的の逃亡とは、何不足^{そだ}なく生育^{そだ}つた自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯^{おくは}を噛^かみしめながら、しよう事なしの押問答^{おしもんた}をしているうちに、自分はどうあつても坑夫にな

るべき運命、否いな天職を帯びてゐるような気がし出した。この山とこの雲とこの雨を凌しのいで来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目まじめに書いてゐるんだから、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、負まけ惜おしみだか、それとも行倒れになるのが怖こわくつて、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もっとも熱心な語調で原さんを口説くどいた。

「……そう云わずに使つて下さい。實際僕が不適當なら仕方がないが、まだやつて見ない事なんだから——せつかく山を越して遠方をわざわざ来た甲斐かいに、一日いちにちでも二日ふつかでもいいですから、まあ試しだと思つて使つて下さい。その上で、とうてい役に立たないと事がきまれば帰ります。きつと帰ります。僕だって、それだけの仕事が出来ないのに、押おしを強く御厄介ごやっかいになつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」

と昨日茶店の神さんかみが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立てた。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴ふいちようする文句ではなかった。そこ

で原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗くように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだらう。自分も原さんといつしよに山の方へ眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の空合だ。この一瞬時に、自分の願が叶って、自分はまづ山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云った原さんの言葉が、妙に氣に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻下の志を遂げると、すぐ反動が来て、かえって志を遂げた事が急に恨めしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取った時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日の朝シキへ這入って御覧なさい。案内を一人つけて上げるから。——それから——そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりませんかね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のように思われましようが、なかなか外で聞いているような生容易い業じゃないんで。まあ取っつけから坑夫になるなあ」と云って自分の顔を眺めていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちつとむずかしいかも知れませんか。坑夫でなくつても、好^ようがすかい」と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくっちゃならないと云う事がここで始めて分つた。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはずだ。

「坑夫のほかは何かあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅^{やま}山にはね、一万人も這入つててね。それが掘^{ほりこ}子に、シチュウに、山^{やまいち}市に、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘^{ほりこ}子つてえな、一人前の坑夫に使えねえ奴^{なか}がなるんで、まあ坑夫の下^{したばたうち}、働^{はたら}です。シチュウは早く云うとシキ^{なか}の内^{うち}の^{なか}大工見たようなものかね。それから山^{やまいち}市^{いち}だが、こいつは、ただ石^{いし}塊^{くわい}をこつこつ欠^くいてるだけで、おもに子供——さつきも一人来たでしょう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざつと、こんなものですよ。それで坑夫となると請^{うけおい}負^お仕事だから、間^まが好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘^{ほりこ}子は日当^{ねん}で年^{ねん}が年^{ねん}中^{じゅう}三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分は親^{ごぶ}方が取^とつちまつて、病氣でもしようもんなら手当が半分だから十七

錢五厘ですね。それで蒲団ふとんの損料が一枚三錢——寒いときは是非二枚要るから、都合で六錢と、それに飯代が一日十四錢五厘、御菜おさいは別ですよ。——どうです。もし坑夫にいけなかつたら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかったが、ここまで来れば、今更いまさらどうしたつて否いやだと断られた義理のもんじやない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なりません」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘠我慢やせがまんのつけ景氣げいきのごとく響いたか、その辺へんは確しかと分らないが、何しろこの一言いちごんを聞いた原さんは、機嫌よく、

「じやまあ、御上おあがんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入つて御覽なさるがいい。何しろ一万人もいて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かつてると、毎日毎日何だかだつて、うるさい事ばかりだね。せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——一日いちんちに二三人はきつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思うと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬もたらいばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあや

る気なら本氣にやつて御覽なさい。腰を掛けてちや、足が草臥れるだろう。こつちへ御上り」

この逐ちくいち一を聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいちだろうが一生懸命に働かなくつちやあ、原さんに対して済まない仕儀になつて来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけつしてしまひときめた。何しろ年が十九だから正直なものだつた。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出おいでなさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後から尾おいて行つた。小作こづくりな婆さんで、後姿の華奢きやしやな割合には、ぴんぴん跳ねるように活潑かつぱつな歩き方をする。幅の狭い茶色の帯をちよつきり結むすびにむすんで、なけなしの髪を頸窩ぼんのくぼへ片づけてその心棒しんぼうに鉛色かんざしの簪を刺している。そうして襷たすきがけ掛であつた。何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、

用事の真つ最中に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだらう。それとも山育やまそだちだからかしら。いや、飯場はんばだから優長ゆうちようにしちやいられないせいだろ

う。して見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だつて安閑としちやいられない。万事この婆さんの型で行かなくつちやなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満して、頭と胸の組織がちよつと變つたような気分になつた。その勢いで広い階子段^{はしごだん}を、案内に應じて、すとなすとなと景氣よく登つて行つた。が自分の頭が階子段から、ぬつと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避^{たいひ}いだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。暈^{たま}数は何十枚だか知らないが遙^{はるか}の突き当りまで敷き詰めてあつて、その間には一重^{ひとえ}の仕切りさえ見えない。ちやうど柔道の道場か、浪花節^{なにわぶし}の席亭のような恰好^{かっこう}で、しかも広さは倍も三倍もある。だから、ただ駄々^{だだ}広い感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ出たときやあ思えない。それだけでも驚く価値^{ねうち}は十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏^{いろり}が二つ切つてある、そこへ人間が約十四五人ずつかたまつてゐる。自分の決心が退避^{ひきよう}いだと云うのは、卑怯^{じやくはい}な話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩^{わくはい}の事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多^{めった}に首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒^{いけど}られたんだから、この黒

い塊かたまりを見るが早い、いささか辟易ひるんじまった。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。——ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差さ支つかない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合せたように、こつちを向いた。その顔が——実はその顔で全く畏縮いしゆくしてしまつた。と云うのはその顔がただの顔じゃない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ると云うなら、ざつと話すが、——頬骨ほおぼねがだんだん高く聳そびえてくる。顎あごが競せり出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺つぼのように引ッ込んで、眼球めだまを遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う骨がことごとく呐喊とつかん展開するとでも評したら好かろう。顔の骨だか、骨の顔だか分らないくらいに、稜りよう々りようたるものである。劇はげしい労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取つたつて、ああなるもんじやない。丸味とか、温あたたか味しみとか、優やさ味しみとか云うものは薬にしたくつても、探し出せない。まあ一口に云うと獐どう猛もうだ。不思議にもこの獐猛そうもうな相そうが一列一体の共有性になつていると見えて、囲炉裏いろりの傍はたの黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間に獐猛そうもうな顔が

十四五揃そろった。向うの囲炉裏を取捲とりまいてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がつてくるとき、長屋の窓から自分を見下みおろしていた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでいる総勢一万人の顔はことごとく寧猛めいじうなんだろう。自分は全く退避ひるんだ。

この時婆さんが後うしろを振り返つて、

「こつちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸すを据えて、寧猛の方へ近づいて行つた。ようやく囲炉裏はたの傍まで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐おすわんなさい」

と差さしずをしたが、ただ好加減いかげんな所へ坐れと云うだけで、別に設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊かたまりを避さけて、たつた一人畳の上へ坐つた。この間寧猛な眼は、始終しじゆう自分に喰くつっている。遠慮も何もありやしない。そうして誰も口を利きくものがない。取とりつきは附端みいだを見出すまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、ぽつねんと独ひとりぼつちで離れているのは、寧猛の目標めじるしとなるばかりだし、大いに困つた。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、器械的に「ここへ坐れ」と云つたなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てて階はしご子段だんを降りて行つてしまった。広い寄席よせの真中にたつた一人取り残されて、樂屋の出方でかた

一同から、冷かされてるようなものだ、手持無沙汰は無論である。ことさらに今の自分に取っては心細い。のみならず拾あわせ一枚ではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんかん炭を焼たいて寧猛共が囲いろり炉裏へあたつてゐるんでも分る。自分は仕方がないからてれ隠かくしに襯シ衣ヤツボタンの釦をはずして腋わきの下へ手を入れたり、膝ひざを立てて、足の親指を抓つかつて見たり、あるいは腿ももの所を両手で揉もんで見たり、いろいろやっていた。こう云う時に、落ついた顔をして――顔ばかりじゃいけない、心しんから落ちついて、平気で坐つてゐる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではどうてい覚おぼつか束おぼつかない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な真似まねをしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちようど下を向いて鳴海絞なるみしぼりの兵児帯へこおびを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣かおぞろいつた。見るとさっきの顔かおぞろい揃そろで、眼がみんなこつちを向いて、光つてゐる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も寧猛どうもうで、よく見るとその寧猛のうちに、軽侮あなどりと、嘲弄あざけりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端とたんに発明した事実で、発明するや否や、非常に不愉快に感じた事実であ

る。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の声がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒かつたか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢におつたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云つたものがある。この声はさつきの「おい」よりも少し皺しやが枯れていたから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たちの言葉でないから——字で書くと普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を俱利伽羅流に崩くずしたんだから、はなはだ下等である。——それでやつぱり黙つてた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思つたよりも叮嚀ていねいであつた。ところが原さんは飯場頭はんばがしらである。頭かしらですらこれだから、平の坑夫は無ぞんざい論ざいそう野卑ぞんざいじゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくぐちが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退避ひるむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいつその事毒突返どくづきかえしたなら、袋叩ふくろたたきに逢あうか、または平等の交際が出来るか、どつちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかった。もともと東京生れだから、この際何とか受けるくらいは心得ていたんだらう。それにもかかわらず、兄あにいに類似した言

語は無論、尋常の竹篋返しさえ控えたのは、——相手にならないと先方を輕蔑したためだろうか——あるいは怖くつて何とも云う度胸がなかったんだろうか。自分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後の方らしい。とにかくも両方交つてたと云うのが一番穩おだやかのように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖いものが沢山もある。矛盾にやならない。

それはどつちにしたつて構わないが、自分がこの惡口を聞いたなり、おとなしく聞き流す料簡りようけんと見て取つた坑夫共は、面白そうにどつと笑つた。こつちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸いと嘲弄するのである。自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨みを、吾身一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入るまでは、自分こそ社会に立てない身体だと思ひ詰めていた。そこで飯場はんばへ上つて見ると、自分のような人間は仲間にしてやらないと云わんばかりの取扱ひである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立つて、立派に板挟みとなつた。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰てもちぶさたと云うよりは、情ないほど不人情な奴が揃つてと思

った。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だつて、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否や、畜生奴くしやうめと思つた。俗語に云う怒つた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離がだいぶん詰つてゐるから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使つていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切せつなかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿くるに包んで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意に充みちた笑がようやく下火になると、

「御前おめえはどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い所に坐つていたから、声の出所でどころは判然はつきり分つた。浅黄色あさぎいろの手拭染てぬぐいじみた三尺帯を腰骨の上へ引き廻して、後うしろ向きの胡坐あぐらのまま、斜はすに顔だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、おまけに結膜けつまくが一面に充血している。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹^{へこ}まして、愚弄^{ぐろう}の笑いを洩^もらしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎^{あご}でしゃくつた。するとこの相図を受けた、願人坊主^{がんじんぼうず}が、入れ替つてこんな事を云つた、

「僕だなんて——書生^{しよせ}ツ坊^ぼだな。大方^{おおかた}女郎買^{おんなかひ}でもしてしくじったんだろう。太え奴だ。全体^{ぜんてい}この頃の書生ツ坊の風儀が悪くつていけねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く^け帰れ。そんな瘡^{やせ}つこけた腕でできる稼業^{かぎよう}じゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張合^{はりあい}が抜けたせいか、わいわい冷かすのが少し静まった。その時一人の坑夫——これは尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらいに眼鼻立^{しどの}が調つていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒い塊^{かたまり}を見るたびに、人数^{にんず}やら、着物やら、獐^{どう}猛^{もう}の度合やらをだんだん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼でできた上に獣慾^{あぶら}の脂が浮いているところばかり眼に着いて、どれも、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけて、五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫だけが一際^{ひととき}目立って見えるようになった。年はまだ三十にはなるまい。体格は倔強^{くつきよう}である。眉毛^{まみえ}と鼻の根と落ち合う所が、一段

奥へ引つ込んで、始終しじゆう鼻眼鏡でお圧しつけてるように見える。そこに疳癩かんしゃくが拘泥こうでいしていそうだが、これがために獐猛の度はかえつて減ずると云つても好いような特徴であつた。——この坑夫が始めてこの時口を利きいた。——

「なぜこんな所へ来た。来たつて仕方がないぜ。儲もうかる所じやない。ここにゐる奴あ、みんな食く詰つめものばかりだ。早く帰るが好かろう。帰つて新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通かよつたもんだが、放蕩の結果とうとう、シキの飯を食うようになつちまつた。おれのようになつたが最後もう駄目だ。帰ろうたつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ歸つて新聞配達をしろ。書生はとて一ひと月と辛抱は出来ないよ。悪い事は云わねえから歸れ。分つたろう」

これは比較的眞面目まじめな忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの獐惡派どうあくはもおとなしく交まぜつ返しもせず聞いていた。その情性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だつた。この坑夫だつて、ほかの坑夫だつて、人相にこそ少しの変化はあれ、やつぱり一つ穴でこつこつ鉋塊あらがねを欠いている分の事だろう。そう芸に巧拙こうせつのあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、

物が解つて、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ひない。自分は今こんな
に馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされない人非人にんびにんとして、多勢たぜいの
侮辱を受けている。しかし一度この社会に首を突つ込んで、寧猛組どうもうぐみの一人となりすました
ら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらの勢力を得る事はできるかも知れない。
できるだろう。できるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰る
まい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。——随分思い切つてつまら
ない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなつてゐるようだ。そこでこの
坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では帰りましようと言
う返事もしなかつた。そのうちいつたん静まりかけた愚弄ぐろうの舌がまた動うき出した。
「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑み込んで置かなくつちや
迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょうでえぶんもあるじゃねえか」

と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙つていようかしらんとも思つたけれども、万一掟を破つて、あとで苛い目に逢うのが怖いから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫が、すぐ、返事をした。

「しようのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知らねえで、坑夫になろうなんて料簡^{りようけん}違えだ。早く帰れ^{けえ}」

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲け^{もう}ようたつて、そう旨^{うま}かあ行かねえ。帰れ」

「儲かるもんか帰る^{けえ}が好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも実際自分のためを思つて帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うのである。さぞ儲け^{もう}たいだろうが、そうは問屋で卸^{おろ}さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦^{あきら}めて早く帰れと云うのである。したがつてどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うんで

ある。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの囲炉裏の周囲ばかりにやいない。さつきちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になって、黒く塊かたまりっている。こつちの団体だけですら持ち扱っているところへ、あつちの群勢ぐんせいが加勢したら大事だいじである。自分は愚弄ぐろうされながらも、時々横目を使って、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまう。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように自分の心が、左右前後と離れ離れになって、しかも独立ができないものだから、物の後を追掛け、追ん廻わしているほど辛い事はない。なんでも敵に逢あつたら敵を呑むに限る。呑む事ができなければ吞まれてしまうが好い。もし両方共困難ならぶつりと縁を截きつて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持ってく事も出来ず、しかも敵の尻を嗅かがなければならなくなると、はなはだしき損となる。したがってもつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦しやかの空説法からげっぽうである。もし講釈をしないでも知れ切つて陳説ちんせつなら、なおさら言うだけが野暮やばになる。

どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がなくなつて困る。

自分が四方八方に気を配つて、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、

「御膳ごぜんを御上ごせんがんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間に婆さんが上がつて来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなつて、萎縮いしゆくした真最中まだったから、御膳ごぜんの聲が耳に入るまではまるで気がつかなくつた。見ると剥はげた御膳ごぜんの上に縁ふちの欠けた茶碗が伏せてある。小さい飯櫃めしびつも乗っている。箸はしは赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆うるしが半分ほど落ちて木地きじが全く出ている。御菜ごさいには糸蒔いとごんにやく蒔まが一皿ついていた。自分は伏目になつてこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝けさから水一滴も口へ入れていない。胃は全く空である。もし空でなければ、昨日食きのうつた揚饅頭あげまんじゅうと薩摩芋さつまいもがあるばかりである。飯けの気を離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御櫃おはちの影を見るや否や食欲は猛然として咽喉元のどもとまで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交ぜま返しも気に掛ける暇いとまなく、見栄みえも糸瓜へちまも棒に振つて、いきなり、お櫃はちからしやくつて茶碗へ一杯盛り上げた。その手数てかずさえ面倒なくらい待ち遠しいほどであったが、例の剥はげ箸ばしを取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。ちつともす

くえない。指の股またに力を入れて箸をうんと底まで突つ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けっして茶碗の縁ふちを離れようとしなない。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損しくじりを二三度繰り返して見た上で、はてなと箸はしを休めて考えた。おそらく狐つまに撮まれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢つやのない飯を一口掻かき込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿つたと思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液つばきに和とけて、口いっぱいに広がつた時の心持は云うに云われなかつた。

「面つらあ見ろ。いい様さまだ」

と一人が云うと、

「御祭日おさいじつでもねえのに、銀米ぎんまいの氣でいやがらあ。だから帰けえれって教おせえてやるのに」と他ほかのものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りようけんっから料簡ちんげえ違ちがえだ」
とまた一人が云つた。

自分は嘲弄^{ちようろう}のうちに、術^{じゆつ}なくこの南京米^{ナンキンまい}を呑み下した。一口でやめようと思ったが、せっかく盛り込んだものを、食^きつてしまわないと、また冷かされるから、熊^いの胆^いを呑む氣になつて、茶碗に盛^きつただけは奇麗^{きれい}に腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日^{きのう}食つた揚饅頭^{あげまんじゅう}や、ふかし芋^{いも}の方が、どのくらい御馳走^{ごちそう}であつたか知れない。自分が南京米の味を知つたのは、生れてこれが始めてである。

茶碗に盛^{よそ}つただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛^{よそ}う氣にならなかつたから、糸薺^{いとごんにやく}だけ^いを食^いつて箸^しを置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭^{いや}なものを口に入れてさえ、箸^しを置くや否や散々に嘲弄^{ちようろう}された。その時は随分つらい事と思つたが、その後日^ごに三度ずつは、必ずこの南京米^{まい}に対^{むか}わなくつちやならない身分となつたんで、さすがの壁土^なも慣^なれるに連^つれて、いわゆる銀米と同じく、人類^{じんるい}の食^しい得^いべきもの、否食^ひつてしかるべき滋味^しと心得^{こころえ}るようになってからは、剥膳^{はげぜん}に向^むつて逡巡^{しゆんじゆん}した当時^{りごみ}がかえつて恥^はずかしい氣持^{きもち}になつた。坑夫^{こうふ}共^{ども}の冷^{ひや}かしたのも万^{まん}更^{さら}無理^{むり}ではない。今となると、こんな無經驗^{むけん}な貴族^{きぞく}的^{てき}の坑夫^{こうふ}が一杯^{いぱい}の南京米^{まい}を苦^くに病^やむところに廻^{めぐ}り合^あわせて、現状^{げんじょう}を目撃^{めく}したら、ことに因^よると、自分^{自分}でさえ、笑^{わら}うかも知れない。冷^{ひや}かさな^いまでも、善意^{ぜんい}に笑^{わら}うだけの価値^{ねち}は十分^{じふぶん}あると思う。人^{ひと}はいろいろに變化^{へんが}するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、この時自分の失敗しくじりに対する冷評は、自然のままにして抛ほうつて置いたなら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金かなだら鹽いを叩たたき合せるような音がした。一度ではない。二度三度と聞いているうちに、じゃじゃん、じゃらんと時を句切くぎつて、拍子ひょうしを取りながら叩き立てて来る。すると今度は木唄きやりの声が聞え出した。純粹の木唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空気に、じゃじゃん、じゃららんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジャンボーだ」

と一人が膝頭ひざがしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジャンボーだ。ジャンボーだ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになって、窓の方へ立って行った。自分は何がジャンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急のんびり暢達したせい、自分もジャンボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元氣も出来た。つくづく考えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押し

て行く。始終手を出さない相撲をとつて暮らしていると云つても、差支なかるう。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立つた。そうしてやっぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がつている上から背伸をして見下すと、斜に曲つて向の石垣の角から、紺の筒袖を着た男が二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盃を圧しつぶして薄っ片にしたようなものを両手に一枚ずつ持つてゐる。ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃんと打ち合わせた。その不調和な音が切つ立つた石垣に突き当つて、後の禿山に響いて、まだやまないうちに、じゃらんとまた一組が後から鳴らし立てて現れた。たと思うとまた現れる。今度は金盃を持つていない。その代り木唄——さつきは木唄と云つた。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節で咄喊するような稀代な調子であつた。

「おい金公はいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴つた。後向だから顔は見えない。すると、

「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覺悟して仕方なしに、今までの態度で立つ

ていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がある事かと、自分も後を追つ懸けて、首を捻じ向けると、――寝ている。薄い布団ふとんをかけて一人寝ている。

「おい 金州きんしゅう」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

と怒鳴どなりつけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎むかえに出掛けた。被かぶつてゐる布団ふとんを手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろつてば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支えられて立ち上つた。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那せつな、その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄ぞつとした。これはただ保養に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで起居たちいのできないような重体の病人である。年は五十に近い。髯ひげは幾日も剃そらないと見えてぼうぼうと延びたままである。いかな癡どうもう猛も、こう憔悴やつれると憐あわれになる。憐れになり過ぎて、逆にまた怖こわくなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れの極きよく全く怖こわかった。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利^きかない足を運ばして、窓の方へ近寄ってくる。この有様を見ていた、窓際の多^た人数^{にんず}は、さも面白^はそうに囃^はし立てる。

「よう、金^{きん}しゆう早く来いよ。今ジャンボーが通るところだ。早く来て見ろよ」

「己^{おら}あジャンボーなんか見たかねえよ」

と病人は、無^む体^{たい}に引き摺^ずられながら、氣のない声で返事をするうちに、見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障^{しょう}子^じの角^{かく}まで圧^おしつけられてしまった。

じやじやん、じやらんとジャンボーは知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延^{せい}びをして見下^{みおろ}した時、自分は再び慄とした。金^{かな}盥^{だら}と金盥^いの間に、四角な早桶^{はやおけ}が挟^{はさ}まって、山道を宙に釣られて行く。上は白金^{しろかなきん}巾で包んで、細い杉丸太を通した両^{りょう}端^{たん}を、水でも一荷^{いっか}頼まれたように、容赦なく担^{かつ}いでいるものまでも、こっちから見ると、例の唄^{うた}を陽氣にうたつてるように思われる。――

自分はこの時始めてジャンボーの意味を理解した。生^{しょう}涯^{がい}いかなる事があつても、けつして忘れられないほど痛切に理解した。ジャンボーは葬式である。坑夫、シチュウ、掘^{ほり}子^こ、山^{やま}市^{まいち}に限って執行される、また執行されなければならない一種の葬式である。御経の文句を浪花節^{ななわぶし}に唄^{うた}つて、金盥^{きんづぶ}の潰^{つぶ}れるほどに音楽を入れて、一荷^{いっか}の水と同じように棺桶^{かんおけ}

をぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪氣きよくの極きよくである。

「金しゆう、どうだ、見えたか、面白いだろう」

と云つて。病人は、

「うん、見えたから、床とこん所まで連れてつて、寝かしてくれよ。後ご生しやうだから」と頼たのんでいる。さっきの二人は再び病人を中へ挟くんで、

「よつしよいよつしよい」

と云いながら、刻きざみ足あしに、布団ふとんの敷ふいてある所まで連れて行つた。

この時曇つた空が、粉こなになつて落ちて来たかと思おもわれるような雨が降り出した。ジャンボ―はこの雨の中なかを敲たたき立てて町の方くたへ下くだつて行く。大勢おほしやうは

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々めいめい囲炉裏いろりの傍はたへ帰る。この混雑ごんざつ紛まぎれに自分もいつの間にか獐どう猛もうの仲間入なりをして、火の近所まで寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意しよぎの所作しよさくでもあつた。と云うものは火の氣がなくなつてははなはだ寒あい。拾あ一わせ

枚ではとても凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出した。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微かな粒であるが、四方の禿山を罩め尽した上に、筒抜けの空を塗り潰して、しとどと落ちて来るんだから、家の中に坐つていてさえ、糠より小さい湿り気が、毛穴から腹の底へ沁み込むような心持である。火の気がなくなつてはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも調戲われずに済んだ。これはこつちから進んで獰猛の仲間入りをしたため、向うでも普通の獰猛として取扱うべき奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻のジャンボーで不意に気が変つた成行として、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑の種が尽きたか、あるいは毒突くのに飽きたんだか、——何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的楽になった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャンボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。――

「あのジャンボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たつて御ジャンボーだ」

「ことによると黒市組かも知れねえ。見当がそうだ」

「ぜんでえ全体ジャンボーになったらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺てらぎり限で留りつこねえ訳だ。どつかへ行くに違えねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所ところだろうてえんだ。やつぱしこんな所ところかしら」

「そりや、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」

「おれ己もそう思つてる。行くとなりや、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だつて極ごく楽だつて、やつぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざつと、こんな談話だから、聞いているとめちやめちやである。それで始めのうちは冗じ談ようだんだと思つた。笑つても差さ支つかえないものと心得て、口の端はたをむずつかせながら、ち

よつと様子を見渡したくらいであつた。ところが笑いたいの自分だけで、囲炉裏を取り捲まいてゐる顔はいずれも、彫りつけたように堅くなつてゐる。彼らは真剣の真面目で未来と云う大問題を論じていたのである。実に嘘うそとしか受け取れないほどの熱心が、各々の眉まゆ

の間に見えた。自分はこの時、この有様をいちべつ一瞥して、さっきの笑いたかった念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カンテラをさ提げて、シキの中へ下りれば、もう二度と目の目を見ない料りようけん簡でいる人間が——人間の器械で、器械けだものの獣とも云うべきこの獐どうもうぐみ猛組が、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用いりようのはずだ。実際自分が眼を上げて、囲いろり炉裏のぐるりに胡坐あぐらをかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮に畏縮いしゆくが手伝つて、七分方しちぶがたでき上つた笑いを急に崩くずしたと云う自覚は無論なかつた。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先に毘沙門びしゃもん様が、大勢いで、これはと威儀を正さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獣半人の前にも嚴格の念を起したんだろう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持つていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんと唸りうな出した。その唸り声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過ぎんだが、ジャンボの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のように思われたんだろう。みんな眼と眼を見合した。

「金きんこう公苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸つてゐるのか、返事をしてゐるのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなに嘔かかあの事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。今更いまさら唸つたつてど

うなるもんか。質に入れた嘔だ。受出さなけりや流れるなあ当り前だ」

と、やつぱり圀炉裏そぼの傍へ坐つたまま、大きな声で慰なぐさめてゐる。慰めてゐるんだか、悪あくたい口

を吐ついてゐるんだか疑わしいくらいである。坑夫から云うと、どつちも同じ事なんだろう。

病人はただうんと挨あい拶さつ——挨拶にもならない声を微かすかに出すばかりであつた。そこで

大勢は懸かけあい合あいにならない慰藉いしやをやめて、圀炉裏の周围まわりだけで舌したの用を弁じていた。しかし

話題はまだ金さんを離れない。

「なあに、病氣せえしなけりや、金公だつて嘔を取られずに済むんだあな。元を云やあ、

やつぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、その金が返せねえから、嘔を抵当に取られちま

ったんだから、正直のところ文句もんくの附けようがねえ」

と賛成したものがある。

「若干で抵当に入れたんだ」

と聞くと、向側から、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市の野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハハハ」

自分は囲炉裏の側に坐つてるのが苦痛であつた。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋の下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒つて、鼻を受け出したら好かろう」

「また、市と入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼いで、もつと価に踏める抵当でも取った方が、気が利いてらあ」
「違ねえ」

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑った。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝を並べて畏まつていた。馬鹿らしいと気がついて、胡坐に組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐をかくほど悠

長^うではなかった。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじやない、天氣の具合と、山が囲^{かこ}んでるせいで早く暗くなる。黙^{もく}つて聞^きいていると、雨^{あまだれ}垂^たの音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇^やんだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やっぱり降^ふつてると云う方が当^{あた}るだろう。窓^{もとよ}は固^{かた}り締め切^きつてある。戸^{そと}外の模様は分^わりようがない。しかし暗^くつて湿^{しめ}っぽい空氣が障^{しょうじ}子の紙^しを透^こして、一面に囲^{いろり}炉^ろ裏^{まわり}の周^{おそ}圍^をを襲^{おそ}つて來た。並^{なら}んでゐる十四五人の顔^{かほ}がしだいしだいに漠^{ぼんやり}然^{なり}する。同時に囲^{いろり}炉^ろ裏^{まわり}の真^{まんなか}中^{なか}に山^{やま}のよう^{よう}にくべた炭^{すす}の色^{いろ}が、ほてり返^{かへ}つて、少しづつ赤^{あか}く浮^うき出^ですように思^{おも}われた。まるで、自分^{おのれ}は坑^{あな}の底^{そこ}へ滅^{めい}入^{いりこ}んで行く、火^かはこれに反^{かへ}して坑^{あな}からだんだん競^せり上^あがつて來る、——ざつと、そんな氣^き分^{ぶん}がした。時^{とき}にぱつと部屋^{へや}中^{なか}が明^あるくなつた。見^みると電氣^{でんき}灯^{とう}が点^ついた。

「飯^いでも食^くうべえ」

と一人^{ひとり}が云^いうと、みんな忘れ^{わす}れものを思^{おも}ひ出^でしたように、

「飯^いを食^くつて、また交^か替^かか」

「今日^{けふ}は少^{すこ}し寒^さいぞ」

「雨^{あめ}はまだ降^ふつてゐるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおむいて見な」

などと、口々に罵ののりながら、立つて、階下段はしこだんを下りて行つた。自分は広い部屋にたつた

一人残された。自分のほかにいるものは病人の金さんばかりである。この金さんがやつぱ

り微かすかな声を出して唸うなつてゐるようだ。自分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を組みながら、横

を向いて、金さんの方を見た。頭は出ていない。足も引つ込ましている。金さんの身体からだは

一枚の布団ふとんの中で、小さく平つたくなっている。気の毒なほど小さく平つたく見えた。そ

の内唸うちなり声も、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向むきを易かえて、囲炉裏の中

を見詰めた。ところがなんだか金さんが氣に掛かつてたまらないから、また横を向いた。

すると金さんはやつぱり一枚の布団の中で、小さく平つたくなっている。そうして、森しんと

している。生きてゐるのか、死んでゐるのか、ただ森としている。唸られるのも、あんまり氣

味の好いもんじやないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配きよくこわの極は怖くな

つて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじやないと、

度胸すを据すえてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段はしこだんを上あがって來た。もう飯を済ましたんだろ

うか、それにしては非常に早いかと、心持上ながり段の方を眺ながめていると、思も寄らないも

のが、現れた。――黒か紺か色の判然しない筒服を着ている。足は職人の穿くような細い股引で、色はやはり同じ紺である。それでカンテラを提げている。のみならず二人とも泥だらけになって、濡れてる。そうして、口を利かない。突つ立つたまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗とききやあ思えない。やがて、カンテラを抛り出すと、鈕を外して、筒袖を脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖を、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やつぱり無言のまま、二人してずしりずしりと降りて行つた。するとまた上がつて来た。今度のも濡れている。泥だらけである。カンテラを抛り出す。着物を着換える。ずしんずしんと降りて行く。とまた上がつて来る。こう云う風に入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼球を光らして、一遍だけはきつと自分を見た。中には、

「手前は新前だな」

と云つたものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。幸い今度はさっきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難に済んだ。上がつて来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戲う暇がなかつ

たんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、上がつて来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなつたのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まとまりようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰ていると、炭の中にそう云う妄想もうそうがちらちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火氣かつきに煽あおられながら、むやみに踊をおどつてるような変な心持になつた時に、突然、「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さつきの婆さんが、立っている。やつぱり襷たすきがけ掛のままである。いつの間まに上がつて来たものか、ちつとも気がつかなかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻つて、艶子つやこさんになつたり、澄江すみえさんになつたり、親爺おやじになつたり、金さんになつたり、――被布ひふやら、廂ひさしがみ髪あかげつとやら、赤毛布あけまんじゅうやら、揚鰻頭あげまんじゅうやら、華嚴けげんの滝やら――幾多無数の幻影まぼろしが、囲炉裏の中に躍り狂つて、立ち騰のぼる火の氣の裏うちに追いつ追われつ、日向ひなたに浮かぶ塵ちりと思われるまで夥おびただしく出て来た最中に、はつと気がついたんだから、眼の前にいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし寝ると云う注意だけは明かに

耳に聞えたに違ないから、自分はただ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布団ふとんは、あすこに這入はいつてゐるから、独ひとりで出して御掛けなさい。一枚三錢ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたら、婆さんは、それ限何ぎりにも云わずに、降りて行つた。これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になつても剣突けんつくを食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図さしずど通り戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかしいづれも薄汚いものばかりである。自宅うちで敷いていたのとはまるで比較にならない。自分が一番上に乗つてゐるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地じは浅黄あさぎである。模様は白である。その上に垢あかが一面に塗りつけてあるから、六分方色ろくぶがた変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗つき立ての伸し餅もちを、金巾かなきんに包んだように、綿は綿でかたまつて、表布かわとはまるで縁故

がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平く敷いた。それから残る一枚を平く掛けた。そうして、襦シ衣ヤツだけになって、その間に潜もぐり込んだ。湿しめっぽい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵かかとが畳の上へ出たから、また心持引つ込みました。延ばす時も曲げる時も、不断のように軽くしなやかには行かない。みしりと音がするほど、関節が窮屈に硬張こわばって、動きたがらない。じつとして、布団の中に膝ひざ頭がしらを横たえていると、倦怠だういのを通り越して重い。腿ももから下を切り取って、その代りに筋金入りの義足をつけられたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくって重たい足を苦くに病やんで、頭を布団の中に突っ込んだ。せめて頭だけでも暖あつたかにしたら、足の方でも折れ合ってくれるだろうとの、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭においよりも、煩悶はんもんよりも、厭世えんせよりも——疲れている。実に死ぬ方が楽らくなほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——畳から足を引つ込みして、頭を布団に入れるだけの所作しよさを仕遂しとげたと思うが早いか、眠ねてしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらどうい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧であつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺だろうが、頓着はなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺り込んで、夢の中の刺を前後不覚の床の下に埋めてしまう分の事である。ところがそうは行かなかつた。と云うものは、刺されたなと思ひながらも、針の事を忘れるほどにうつとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。今度は大きな眼を開いた。ところへまたちくりと来た。おやと驚く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとうやく気がつきがけに、飛び上るほど劇しく股の辺をやられた。自分はこの時始めて、普通の人間に歸つた。そうして身体中至る所がちくちくしているのを発見した。そこでそつと襯衣の間から手を入れて、背中を撫でて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れた時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹つたんだと思つた。ところが指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲炉裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫を見た事がないんだから、はたしてこれがそうだと断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑た所に直覺の二字

を濫^{らん}用^{よう}しては済まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使った。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪^{にく}らしくなつて来た。囲炉裏の縁^{ふち}へ乗せて、ぴちりと親指の爪で押し潰^{つぶ}したら、云うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭い臭氣^{におい}を嗅^かぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜^{みにく}い事を真面目^{まじめ}にかかねばならぬほど狂^{きやう}違^{がひ}染^じみていた。実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨^{うらみ}を霽^はらしたような気がしなかつたのである。それだから捕^とつては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがつて嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰^なつて来た。今にも涙が出そうになる。非常に情^{なさけ}ない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で大勢が一度にどつと笑う声があった。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつて静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほかにたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかつた。向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆布^{ほも}綿^{めん}のようなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だか氣味が悪かつた。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜^{はす}に出ている。そうしてそれが人間の毬栗^{いぐりあ}頭^まであつた。——広い部屋には、自分とこの二人を除^{のぞ}いて、誰もいない。ただ電気灯がかんかん点^ついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと笑つた。さっきの連中か、

または作業を済まして帰つて来たものが、大勢寄つてふざけ散らしているに違ない。自分はぼんやりして布団のある所まで帰つて来た。そうして裸体^{はだか}になつて、襦衣^{じい}を振るつて、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮^{てい}嚙^{ねい}に畳んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時^{なんじ}だか、夜^よはどうていまだ明けそうにしない。腕組をして立つて考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪^{こら}え切れずに、

「えつ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦^{こす}つて、左の足の甲で右の上を擦^{こす}つて、これでもかと齒^{はぎ}軋^{しり}をした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云つて、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固^{もと}りない。さつき毒^{どく}突^つかれた事を思い出すと、南京虫よりよっぽど厭^{いや}だ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思ひながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚^よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずるの目を滑^{すべ}つてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直^{まっすぐ}に立つ。またずるずる滑^{すべ}る。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫^{ナンキンむし}は

出て来なかった。下では時々どつと笑う。

いても立つてもと云うのは喩^{たとえ}だが、そのいても立つてもを、実際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方^{かた}のつかない運動をして、中途半端に紛^{まぎ}らかしていた。ところがその運動をいつまで根氣^{こんき}にやったものか覚えていない。いとど疲れている上に、なお手足を疲らして、いかな南京虫でも応^{こた}えないほど疲れ切ったんで、始めて寝たもうろう。夜が明けたら、自分が摺^すり落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲^{うずくま}踞^まつていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過^たつにつれて、だんだん痛くなくなったのは妙である。その実、一箇月ばかりしたら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ転^{ひかず}がつてくるくらいに思つて、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。もつとも南京虫の方でも日数^{ひかず}を積むに従つて遠慮してくるそうである。その証拠には新来^{きたて}のお客には、ベた一面にたかつて、夜通し苛^{いじ}めるが、少し辛抱していると、向うから、愛想^{あいそ}をつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食つてゐる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方にそれだけの品格が出来て、シキ臭くなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものがあつた。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質^{たち}がよく

似ている。おそらく坑夫ばかりじゃあるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてるんだろう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括^{がいかつ}するところに面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の考えを云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼^{きがね}をしたり、贅^{ぜい}沢^{たく}を云つたりするんじゃないやなくて、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだろうと思う。虫は依然として食つてゐるが、食われても平気でいるに違ない、もつとも食われて感じないのも、食われなくて感じないのも、趣^{おもむき}こそ違え、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていて。下ではもうがやがや云つてゐる。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もつとも判^{はつきり}然^{ぜん}とは降つていない。雲の濃いのが糸になり損^{そく}なつて、なつただけが、細く地へ落ちる気色^{けしき}だ。だからむやみに濛^{もう}々^{もう}とはしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透^すいて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至^{とほ}つて乏^{うるおい}しい、潤^{うるおい}のない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思われるほど赤く禿^はげてぐるりと自分を取り捲^まいてゐる。そう

して残らず雨に濡ぬれている。潤い気けのないものが、濡れているんだから、土器かわらけに霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その癖寒い気持がする。それで自分は首を引つ込めようとしたら、ちよつと眼についた。――手拭てぬぐいを被かぶつて、藁わらを腰に当てて、筒つつ服ぼうふくを着た男が二三人、向うの石垣の下にあらわれた。ちやうど昨日ジャンボーの通つた路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼしよぼして気の毒なほど憐れである。自分も今朝からあなるんだなど、ふと気がついて見ると、人事ひとこととは思われないほど、向むへ行く手拭てぬぐいの影――雨に濡れた手拭の影が情なさけなかつた。すると雨の間からまた古帽子が出て来た。その後あとからまた筒袖つつそで姿があらわれた。何でも朝の番に當つた坑夫がシキへ這入はいる時間に相違ない。自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一度にどやどやと階下段はしごだんを上あつて来る。来たなと思つたが仕方がないから懷手ふところをして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとからまた上がつてくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちやいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あま

り手持無沙汰過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落つちやいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、これより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子である。下りて見ると例の婆さんが、襷がけをして、草鞋を一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢つた。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あつち」

と云い捨てて門口の方へ行つた。まるで相手にしちやいない。自分にはあつちの見当がわからなかつたが、とにかく婆さんの出て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中に四斗樽を輪切にしたようなお櫃が据えてある。あの中に南京米の炊いたのがいっぱい詰つてるのかと思つたら、——何しろ自分が三度三度一箇月食つても食い切れないほどの南京米なんだから、食わない前からうんざりしちまつた。

——顔を洗う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立つて、冷たい水で、申し訳のため頬を撫でて置いた。こうなると叮嚀に顔なんか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。こ

れが一步進むと、顔は洗わなくつても宜いものと度胸が坐ってくるんだろう。昨日の赤毛布毛布や小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ない。

顔はようやく自力で洗った。飯はどうなる事かと、またのそのそ台所へ上った。ところへ幸い婆さんが表から帰つて来て膳立てぜんだてをしてくれた。ありがたい事に味噌汁みそじるがついていたんで、こいつを南京米の上から、ざつと掛けて、ざくざくと掻き込んだんで、今度は壁土の味を噛み分かわけないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯おまんまが済んだら、初はつさんがシキへ連れて行くつて待つてゐるから、早くおいでなさい」と、箸はしも置かない先から急せき立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体からだが持つまいと思つてたところだが、こう催促されて見ると、無論御代りなんか盛よそう必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上あかり口くちに一人掛けてゐる。自分の顔を見て、

「御前おめえか、シキへ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたたら、

「じゃ、いつしよに来ねえ」

と云う。

「この服装なりでも好いんですか」

と町嚙ていねいに聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這へ入れるもんか。ここへ親分と一いちめえ枚借りて来てやったから、此服こいつを着るがいい」

と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引なを抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。所々に泥が着いている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御仕着おしきせを着る始末になつたんだなと思ひながら、緋かすりを脱いで上下うへしたとも紺揃こんぞろいになつた。ちよつと見ると内閣の小使はるかのようだが、心持から云うと、小使を拝命した時よりも遙に不景氣であつた。これで支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待った」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当てるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらぼつちのような藁布団わらぶとんに紐ひもをつけた変へんてなものだ。自分は初さんの云う通り、これを臀部でんぶへ縛しばりつけた。

「それが、アテシコだ。好よしか。それから鑿のみだ。こいつを腰こし所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあらうと云う鉄の棒で、先が少し尖とがっている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しっかり受け取らねえと怪我をする」
なるほど重い。こんな槌つちを差してよく坑あなの中が歩けるもんだと思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提さげるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待ったり。カンテラの前に一つ草鞋わらじを穿はいちまいねえ」

草鞋わらじの新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ぶら下げたのは、大方これだろう。

自分は素足すあしの上へ草鞋わらじを穿はいた。緒おを踵かかとへ通してぐつと引くと、
「驚癡どじだなあ。そんなに締める奴があるかい。もつと指いびの股こを寛ゆるめろい」
と叱しられた。叱しられながら、どうにか、こうにか穿はいてしまう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初さんは饅頭笠まんじゅうがさとカンテラを渡した。饅頭笠と云うのか筍笠たけのこがさというのか知らないが、何でも懲役人の被かぶるような笠であつた。その笠を神妙しんびように被かる。それからカンテラを提さげる。このカンテラは提さげるようにできている。恰好かつこうは二合入りの石油缶せきゆかんとも云うべきもので、そこへ油を注さす口と、心しんを出す孔あなが開あいてる上に、細長い管くだが食くつついて、その管の先がちよつと横へ曲まがると、すぐ膨ふくらんだカップになる。このカップへ親指を突つつ込んで、その親指の力で提さげるんだから、指五本の代りに一本で事を済すますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿はめるんだ」

と初さんが、勝栗かちぐりのような親指を、カンテラの孔の中へ突つ込んだ。旨うまい具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振ふつて見せた。なかなか

落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとって揺うごして見たがやっぱり落ちなかった。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好よごさんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠かさへあたった。仰向あおもむいて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぽつぽつとあたった。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸むし返される。しかし雨の方が寒いんで、身体のほとぼりがだんだん冷めて行くような心持であつたが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡ぬれながらも、毛穴から、雨を弾はじき出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。

入口はまず汽車の隧トンネル道の大きいものと云つて宜よろしい。蒲鉾かまぼこ形の天辺てつべんは二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧トンネル道に似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立つて、奥の方を透すかして見た。奥は暗かつた。

「どうだここが地獄の入口だ。這はい入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄ちやうろうの語気を帯びている。さつき飯場はんばを出て、ここまで来る途

中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののつていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込められて物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥底にはきつと愚弄ぐろうの意味がある。これを布衍ふえんして云うと、一つには貴様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見ろと云う事になる。もう一つは御氣の毒だが来たつて駄目だよ。そんな脂やにっこい身体からだで何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日きのうのだ」「新来しんきだ」と騒ぐうちには、自分が彼らと同様の苦痛を嘗なめなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪たえがたい奴だとの輕蔑けいべつさえ加わっている。彼らは他人ひとを彼らと同程度に引き摺ずり落して喝かつ采さいするのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足いっぺんの下まで蹴落けおして、墮落は同程度だが、墮落に堪たえる力は彼らの方がかえって上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上みちみち「昨日きのうのだ」と聞きたんびに、懲役笠ちやうえきがさで顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄ぐろうしたんだから、自分自分は少しむつとして、

「這はい入れますとも。電車さえ通かよつてゐるじゃありませんか」

と答えた。すると初さんが、

「なに這入はいれる？ 豪義ごうぎな事を云うない」

と云つた。ここで「這入はいれません」と恐れ入つたら、「それ見ろ」と直すぐこなされるにきまつてゐる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかつた。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入はいつた。這入はいつて見ると、思つたよりも急に暗くなる。何だか足元がおつかなくなり出したには降参した。雨が降つていても外は明かいものだ。その上軌道レールの上はとにかく、両側はすこぶる泥ぬかつてゐる。それなのに初ちゆうさんは中ちゆうつ腹はらでずんずん行く。自分も負けない氣でずんずん行く。

「シキの中でおとなしくしねえと、すのこの中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくつちやあ
いけねえ」

と云いながら初さんは突然暗い中で立ち留どまつた。初さんの腰には鑿のみがある。五斤ごしんの槌つちがある。自分は暗い中で小さくなつて、

「はい」

と返事をした。

「よし、分ったか。生きて出る料簡なら生意気にシキなんかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は独り言のように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑の中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんわんと自分の耳へ跳ね返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入ったものだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になろうと云う氣も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖い商売なら——殺されるんなら——すのこの中へ抛げ込まれるなら——すのことは全体どんなもんだらうと思ひ出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後を振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。——あらがねほう鉋を抛り込んで、纏めて下へ降げる穴だ。鉋といっしよに抛り込まれて見

ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留つた。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這入るときは、これがシキならと思つた。聞いたほどでもないと思つた。ところが初さんに威嚇かされてから、いかな平凡な隧道も、大いに容子が變つて来た。懲役笠をたたたく冷たい雨が恋しくなつた。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入つたなど、振り返つて始めて気がついた。いくら曇つていてもやっぱり外が懐かしい。真黒な天井が上から抑えつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて来るように感ぜられる。と思うと、軌道を横へ切れて、右へ曲つた。だから坂の下りになる。もう入口は見えない。振返つても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしやりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁へ触つて見ると、雨が降つたように濡れている。

「どうだ、尾いて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云つたなり、また二人とも無言になった。この時行く手の方^{かた}に一点の灯^{あかり}が見えた。暗^{くらや}闇^みの中の黒猫の片眼のように光つてゐる。カンテラの灯^ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直^{まっすぐ}じゃないが、とにかく見える。もし坑^{あな}の中が一本道だとすれば、この灯を目懸^{めが}けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかつたが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思つて、這入つて行つた。すると、だらだら坂がようやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯^ひが点^ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦^{すれすれ}々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑^{あな}が四五畳ほどの大^{おおき}さに広がつて、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電気灯が点いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子^{テーブル}の対^{むか}い合せに洋卓を隔てて腰を掛けていた。表^{おもて}には第一見張所とあつた。これは坑夫^{でいり}の出入だの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、その当時

には何のための設備だか知らなかったもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃えて無言のまま、見張所の前に立っていたのを不審に思った。これは時間を待ち合わせて交替するためである。自分は腰に鑿のみと槌つちを差してカンテラさえ提さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合わす必要もないものと見えて、すぐこの溜たまりを通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓ガラスまどへ首を突っ込んで、ちよいと役人に断ことわつたが、役人は別に自分の方を見向もしなかった。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚はばつてだろう、全く一言も口を利きいたものはなかった。

溜あなを出るや否や坑の様子が突然変った。今までは立つてあるいても、背延せいびをしても届きそうにもしなかった天井が急に落ちて来て、真直まつすぐに歩くと時々頭さわへ触るような気持がする。これがものの二寸も低かろうものなら、岩へぶつかって眉間みけんから血が出るに違いないと思うと、松原をあるくように、ありったけの背で、野風のふうぞう雑にややつて行けない。おっかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食くつついて行つた。もつともカンテラはさつき点つけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四よつん這ばいになった。おや、滑すべつて転んだ。と思

つて、後から突つ掛かりそうなところを、ぐつと足を踏ん張った。このくらいにして喰い留めないと、坂だから、前へのめる恐^{おそれ}がある。心持腰から上を反^そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合^あわしていると、初さんはなかなか起きない。やっぱり這^はっている。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さんはこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまう。その声で自分は不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜^{もぐ}ってしまう。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖^{あいまい}昧になる。こりやただ事じやないと気がついたから、透^{すか}して見るとようやく分った。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭^{せま}くなつて、這わなくつちや抜けられなくなっている。その狭い

入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四つん這いにならなくつちや仕方がないと諦めあきらをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけつして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカンテラを提さげている。左の手の平ひらだけを惜気おしげもなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしやりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような氣持がした。それでカンテラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになって、はなはだ不便である。どうしたもんだろうと、この姿勢のままじっとしていた。そうして、右の手で宙に釣ひつているカンテラを見た。ところへぼたりと天てん井じょうからしずくが垂れた。カンテラの灯ひがじいと鳴った。油煙あぶが顎あごから頬へかかる。眼へも這入はいった。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当けんとうにあたるんだか、いっこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だが、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行ってしまった。頼たよりはカンテラ一つである。そのカンテラがじいと鳴つ

て水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかったと安心する時に、またぼたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終しじゅう垂れていたんだが、灯ひが腰から下にあるんで、いつこう気がつかなくなつたんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起つて来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いちやいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云つた。

自分は這いながら、咽喉のどほとけ仏の角かじを尖らすほどに顎あごを突き出して、初さんの方を見た。

すると一いつけん間ばかり向うに熊の穴見たようなものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが出ている。自分があまり手間取るんで、初さんが屈こつこんでこつちを覗のぞき込んでるところであつた。この一間をどうして抜け出したか、今じや善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引つ込まして穴の外に立っている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉うれしやと狭い所を潜くぐり抜け

た。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちや、シキへは一足だつて踏ん込めっこはねえ。陸のように地面はねえ所ところだくらいは、どんな頓珍漢とんちんかんだつて知つてゐるはずだ」

初さんはたしかに坑あなの中は陸のように地面のない所だと云つた。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにただし書がきをつけて、その確実な事を保証して置くのである。自分は何か云い訳をするたんびに、初さんから容赦なくやつつけられるんで、大抵は黙つていたが、この時はつい、

「でもカンテラが消えそうで、心配したもんですから」

と云つちまつた。すると初さんは、自分の鼻の先へカンテラを差しつけて、徐おもむろに自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好きから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚^{びつくり}して稀有^{けう}な顔をしていた。

「冗談^{じようだん}じゃねえ。何が這入^{へっ}てると思う。

種油^{たねあぶら}だよ、しずくぐらいで消^{けえ}てたまるも

んか」

自分はこれでやっと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑^{あな}の中がみんな響き出す。その響が収ま

ると前よりも倍静かになる。ところへかあん、かあんどこかで鑿^{のみ}と槌^{つち}を使つてゐる音が伝

わつて来る。

「聞えるか」

と、初さんが顫^{あざ}で相図をした。

「聞えます」

と耳を峙^{そばだ}てていると、たちまち催促を受けた。

「さあ行こう。今度^{こんだ}あ後^{おく}れないように跟^ついて来な」

初さんはなかなか機嫌がいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられているせいだろうと思った。いくら手苛てひどくきめつけられても、初さんの機嫌がいろいろうちは結構であつた。こうなると得になる事がすなわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落して、おめおめ初さんの尻を嗅かいで行つたら、路が左の方に曲り込んでまた峻けわしい坂になつた。

「おい下りるよ」

と初さんが、後うしろも向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかつた。が初さんはそれとも気がつかず下り出おした。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になつてゐる。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕たごさま様の高さぐらゐはあるだろう。これは一生懸命になつて、いっしよに降りた。降りた時にほつと息を吐つくと、その息が何となく苦しかつた。しかしこれは深い坑あなのなかで、空氣の流通が悪いからとばかり考へた。実はこの時すでに身体からだも冒おかされていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が變つた。

今度は初さんが仰向あむむけに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまつて来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云つたと思つたら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなつた。さすが熟練の功はえらいもんだと思いながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に浮いてるようで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がつくり落おちか、それでなくても、よほど勾配こうばいの急な坂に違ないと見当けんとうをつけた。だから頭から先へ突つ込めばのめつて怪我をするばかり、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後うしろへ手を突いた。ところがこの所作しよさがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべつたり突いてしまつた。ぴちやりと云つた。アテシコを伝わつて臀部でんぶへ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分はしまつたと思ひながらも直すく両足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ぶ下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗つた。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや足の裏で敲たたいて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡りょうけんであつた。

「何で足ばかり、ばたばたやつてるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張つて立ちねえな。意久地いくじのねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立った。

「まるで傘の化物のようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかったから、別に笑う気にもならなかった。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かったと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が變つて、前よりは幾分か親切になった。偶然の事がどんな拍子で他の氣に入らないとも限らない。かえつて、氣に入つてやろうと思つて仕出かす芸術は大抵駄目なようだ。天巧を奪うような御世辞使はいまだかつて見た事がない。自分も我が身が可愛さに、その後いろいろ人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨い結果が出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖いもんだ。用意をして置いた挨拶で、この傘の化物に対する返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折つて失敗するのは愚だと悟つたから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をしている。ただ困るのは演舌と文章である。あいつは骨を折つて準備をしないと失敗する。

その代りいくら骨を折つてもやつぱり失敗する。つまりは同じ事なんだが、骨を折つた失敗は、人の氣に入らないでも、自分の弱点ぼろが出ないから、まあ準備をしてからやる事になっている。いつかは初さんの氣に入つたような演説をしたり、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけないから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だから、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向つて、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短えやみじけな」

と云つた。坑あなの中でカンテラを点つけた、初さんはたしかに日は短えやなど云つた。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてゐる所まで行くと、初さんは、右へ曲つた。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を——さあ何なんち町よう降りたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく段々を降り切つて、だいぶ浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすばまつて、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかめの中へでも落込んだ有様である。あとか

ら分つた話だが、これは作事場さくじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉾脈ひらがあるとなると、そこを掘りひろ抜けて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負うけおい仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五日くらいと踏んだ作事に半月以上食い込む事もある。こう云う訳で、シキのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御構おかまいなくそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、また一条ひとすじでもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも条路えだみちができて、方々に作事場が建つ。その作事をしようと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちようど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書のむし蠹が本を食くらうと見立てても差し支さつかえない。つまり人間が土の中で、銅あかがねを食って、食い尽すと、また銅を探し出して食いにゆくんでむやみに路がたくさんできてしまったのである。だから、いくらシキの中を通つても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑夫には逢あわない。かあなかあんという音はするが、音だけでは極きわめて淋さみしいものである。自分は初さんに連れられて、シキへ這入はいつたが、ただシキの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、

この段々の下へ来て、初めて見た。——稲妻形いなずまがたに段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人つ子一人に逢あわないものだから、はなはだ心細かったが、はじめて作事場へ出て、人間に逢あつたら、大いに嬉しかった。

見ると丸太まるたの上に腰をかけている。数は三人だった。丸太は四つよや丸太まるたで、軌道レールの枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかどうてい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シチュウが必要な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰ふたありを掛けて、残る一人が屈しゃがんで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺つぼがある。伏せてある。一人がこの壺を上から抑おさえている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙あげた。下から賽さいが出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが土の壁に突き刺してある。暗い灯ひが、ぎろりと光る三人の眼球めだまを照らした。光ったものは實際眼球だけである。坑は固もとより暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙けぶりを吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そうして動い

ている。

カンテラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも集っていたから、なおさら変であつたが、自分が這入るや否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺が見えたのである。壺の下から賽が見えたのである。壺と、賽と、三人の異な叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たのである。よくはわからない顔であつた。一人の男は頬骨の一点と、小鼻の片傍だけが、灯に映つた。次の男は額と眉の半分に光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持つていた、カンテラを四五尺手前から真向に浴びただけである。——三人はこの姿勢で、ぎろりと眼を据えた。自分の方に。

ようやく人間に逢つて、やれ嬉しやと思つた自分は、この三対の眼球を見るや否や、思わずびたりと立ち留つた。

「手前は……」

と云い掛けて、一人が言葉を切つた。残る二人はまだ口を開かない。自分も立ち留まつたなり、答えなかつた。——答えられなかつた。すると

「新^{しん}めえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍^{そば}にいる事も忘れて、ただおやつと思つた。立ちすくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬^{かた}くこわ張り掛けたところへ「新めえだ」と云う声がした。この声が自分の左の耳の、つい後^{うしろ}から出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついてたなと思ひ出した。それがため、こわ張りかけた手足も、中途でもとへ引き返した。自分は一步^{わき}傍へ退^のいた。初さんに前へ出てもらうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてゐるな」

とカンテラを提^さげたまま、上から三人の真中に転がつてゐる、壺と賽^なを眺めた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合ひなかつた。やがて、四^よつや丸^{まる}太^たの上へうんとこしよと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉しくなつて元氣が出て来

た。初さんの側へ腰をおろす。アテシコの利目は、ここで始めて分った。旨い具合に尻が乗って、柔らかに局部へ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさっきから、眼が少し眩らんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかったが、こう尻を掛けて落ちつくと、大きに楽になる。四人がいろいろな話をしている。

「広本へは新しい玉が来たが知ってるか」

「うん、知ってる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前は」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑った。これは這入って来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑っても笑わなくつても、顔の輪廓がほとんど同じである。

「随分手廻しいいな」

と初さんもしささか笑っている。

「シキへ這入ると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだって、そうだろう」

と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云つた。その語調には妙に咏嘆の意が寓してあつた。自分はあまり突然のよう
に感じた。

そうしているうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しかけた。

「御前はどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他のが、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞
かせられて驚いたが、飯場へ着くが早いのか、今度は反対に、儲からない儲からないで立て
つづけに責められるので、大いに辟易した。しかし地の底ではよもやそんな話も出まい
と思つてここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬
鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多な事を云えば擲りつけられるだ
けだから、まあやめにして置いた。さればと云つて返事をしなければまたやりつけられる。
そこで、こう云つた。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山やまには神様がいます。いくら金を蓄ためて出ようとしたって駄目だ。金は必ず戻かえってくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だるまだ」

と云つて、四人よつたりながら面白そうに笑つた。自分は黙もくっていた。すると四人は自分を措おいてしきりに達磨の話始めた。約十分余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑あなのなかに屈しゃがんでるところを、艶子つやこさんと澄江すみえさんに見せたらばと云う問題であつた。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさまいと云つて愛想あいそを尽かすだろうかと疑つて見たが、これは難なく気の毒がつて、泣くに違ちがひないと結論してしまつた。それで一目ひとめくらいはこの姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜ゆうべ囲炉裏いろりの傍そばでさんざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。ところが今度は正反対で、二人共傍そばにいてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、

意気地のない、大いに苛められている自分の風体と、ハイカラの女を二人描き出したら、はなはだ気恥ずかしくなつて腋の下から汗が出そうになつた。これで見ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみか、少しは得意の気味で、ただ坑夫になつたての幅の利かないところだけを、女に見せたくないかつた訳になる。自分の器量を下げるところは、誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量のある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合でも、時々芝居気を出す。自分がアテシコを臀に敷いて、深い坑のなかで、カンテラを提げたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものと思う。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がつていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらい大きな音がした。その音は自分の足の下で起つたのか、頭の上で起つたのか、尻を懸けた丸太も、黒い天井も一度に躍り上つたから、分からない。自分の頸と手と足が一度に動いた。縁側に脛をぶらさげて、膝頭を丁と叩くと、膝から下がぴくんと跳ねる事がある。この時自分の身体の動き方は

全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に來たような気がした。身体ばかりじやない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打って、たちまち我れに歸った。音はまだつづいてゐる。落雷を、土中に埋めて、自由の響きを束縛したように、洩つて、焦つて、陰に籠つて、抑えられて、岩にあたつて、包まれて、激して、跳ね返されて、出端を失つて、ごうと吼えてゐる。

「驚いちやいけねえ」

と初さんが云つた。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やつちまうかな」

と、鑿を取り上げた。初さんと自分は作事場を出る。ところへ煙が來た。煙硝の臭が、眼へも鼻へも口へも這入った。噓せつぼくつて苦しいから、後を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳に応えた時、こりや坑内で大破裂が起つたに違ないから、逃げないと生命が危ないとまで思い詰めたくらいなのに、初さ

んはますます深く這入る気色けしきだから、気味が悪いとは思ったが、何しろ自由行動のとれる身体ではなし、精神は無論独立の気象きしょうを具そなえていないんだから、いかに先輩だって逃げたい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後あとをつけて出ると、むっとするほどの煙けむが向うから吹いて来たんで、こりや迂濶うっかり深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後うしろを向く途端とたんに、さっきの連中がもう、煙の中にかあん、かあん、鉦あらがねを叩たたいているのが聞えたんで、それじゃやつぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問を起して見たんである。すると初さんは、煙の中で、咳せきを二つ三つしながら、

「驚かなくつてもいい。ダイナマイトだ」

と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シキへ這入はいった以上、仕方がねえ。ダイナマイトが恐ろしくつちや一日だって、シキへは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜くぐって行く。満更苦まんざらしくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思った。それとも煙は坑あなから坑へ抜け切つて、陸おかの上なら、大抵晴れ渡った時分なのに、

路が暗いんでいつまでも煙が這つてるように感じたり噎せつぽく思ったのかも知れない。そうすると自分の方が悪くなる。

いずれにしても苦いところを我慢して尾いて行つた。また胎内潜りのような穴を抜けて、三四間ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股になつてゐる。その条路の突き当りで、カラカラランと云う音がした。深い井戸へ石片を抛げ込んだ時と調子は似ているが、普通の井戸よりも、遙に深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間に、側へ当つて鳴る音が、冴えている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間がかかる。けれども一本道を、真直に上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつと出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝つて、底で出ただけの響は、いかに微な遠くであつても、洩らすところなく上まで送り出す。——ざつとこんな音である。カラララン。カカラアン。……

初さんが留つた。

「聞えるか」

「聞えます」

「スノコへ鉋を落してる」

「はああ……」

「ついでだからスノコを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達がその傍そばまで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後へ抜く拍ひょう子しに、大きな箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。一尺前は大きな穴である。広さは畳二畳敷にじようじきぐらいはあるだろう。箕に入れたばらの鉋あらがねを、掘子ほりこが抛なげ込んだばかりである。突き当りの壁は突立つったっている。微かすかなカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡ぬれて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗のぞいて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。自分は板の三分の一ほど

まで踏み出した。

「もつと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇ちゆうちよした。これでさえ踏板はすが外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退くとて間まが一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地ひらちの十間にも当る。自分は何分なにぶんにも躊躇ちゆうちよした。

「出ろやい。吝けちな野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだろう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかった。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこまで視線に這入はいるんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちや大変だと神経を起こすと、後から背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地こたを持ち応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退どきな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の

大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体を見て、すぐ傍へ避けた。そうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ飛び退けるほどの距離まで退いた。掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣呑がるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁から二尺ばかり手前まで出て、足を揃えたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端に、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突つ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰もない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切つたと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入ってた。すると初さんも掘子もみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思つて、依然として恐れ入ってた。その時初さんがこんな事を云つ

て聞かした。

「何になつても修業は要るもんだ。やつて見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前が掘子になるにしたつて、おつかながつて、手先ばかりで抛げ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心の穴へは這入りやしねえ。そうして、鉋の重みで引つ張り込まれるから、かえつて剣呑だ。ああ思い切つて胸から突き出してかからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくつちや駄目だ。ハハハハ」

と笑つた。

後あともどり戻

をして元の路へ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れた。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平らな路を縫うように突き当つた所で、初さんが留まつた。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降参したら、落第するにきまつてるから、我慢に我慢を重ねて、ここまで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだろうくらいの目算はあつた。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留まつて、

一段落つけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程はけつして一丁や二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ろうかしらと考えた。こう云う時の出処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩れる場合のうちでもつとも顕著なる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前申す通り自分は初さんの顔を見た。すると、下りようじゃないかと云う親密な情合も見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇もあらわれていない。下りたかろうと焦らす気色は無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱の色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題が潜んでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。

「下りましょう」

と思い切つて、云つた。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穏かに同意の意を表した。なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切つ立つた、屏風のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてゐる。勾配も何にもない。こちらの壁にぴったり食つついて、棒を空にぶら下げたように、覗くと端が見えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己が先へ下りるからね。気をつけて来たまえ」

と初さんが云つた。初さんがこれほど丁寧な言葉を使おうとは思ひも寄らなかつた。おかた神妙に下りましようと思つたので、幾分か憐愍の念を起したんだろう。やがて初さんは、ぐるりと引つ繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈んだ。と思うと、足からだんだん這入つて行く。しまいには顔だけが残つた。やがてその顔も消えた。顔が出ている間は、多少の安心もあつたが、黒い頭の前までは、ずぼりと穴へはまつた時は、さすがに心配なのと心細いので、じつとしていられなくて、足をつま立てるやうにして、上から見下した。初さんは下りて行く。黒い頭とランテラの灯だけが見える。その時自分は気味の悪いうちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわ

ないと、下り損^{そこ}なうかも知れない。面目ない事が出^{しゅったい}来る。早くするに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向^{うしむき}になつて初さんのように、膝^{ひざ}を地^じにつけて、手で摺^ずり下^{さが}りながら、草鞋^{わらじ}の底で段々を探つた。

両手で第一段目を握つて、足を好加減^{いいかげん}な所へ掛けると、背中が海老^{えび}のように曲つた。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真直^{まっすぐ}に立つと、カンテラの灯^ひが胸の所へ来る。じつとしてゐると燻^{えぶ}されてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに应じて握り更^かえなくつちやならない。おろそうとすると、指で提^さげてゐるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅多^{めった}に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかつて灯が揉^もみ潰^{つぶ}されそうになる。親指へカップを差し込んで、振子のように動かしした時は、はなはだ軽便な器械だと思つたが、こうなると非常に邪魔になる。その上梯子^{はしご}の幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもつて来て恐怖が手伝う。そうして握り直したんびに、段木^{だんぎ}がぬらぬらする。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透^すかして見ると、へな土が一面に粘^ついている。上り下り^{のぼさが}の草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗^{のぞ}いた。よせば善かつたが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻つて、かたく握つた手がゆるんで来た。これは

死ぬかも知れない。死んじや大変だと、囁^{かじ}りついたなり、いきなり眼を閉^{ねむ}った。石^{シヤボン}鱈^{だま}球の大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本^ね当^むを云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶった眼の前に湧^わいて出る石^{シヤボン}鱈^{だま}球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかにも不思議であつた。今考えると、目^め舞^{まい}のする前に、ちらりと初さんを見たに違ないんだが、ぐらぐらと咄^{とつち}癡^ちて、死ぬ方が怖^{こわ}くなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に嚙^かりついて眼を閉るや否や生き返つたんだらう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑^{あな}は暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちやであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切つ立つた壁の向う側を降りているようだ。今度は二度目のせい^{せい}か、落ちるほど眩^め暈^{まい}もしなかつたんで、よくよく眸^{ひとみ}を据^すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はてなと思つた。ところへカンテラがまたじいと鳴つた。保証^{あかり}つきの灯火だが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬ

るぬるする段木だんぎを握り更え、握り更えてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがやツぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子を見ると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の梯子がついている。手を延ばすと届くように懸かけてある。仕方がないから、自分はまたこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降りた。長さは前のと同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子が懸かけてある。どうも是非に及ばない。また移った。やつとの思いでこれも片づけると、新しい梯子はもとのごとく向側に懸かつている。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、手が怠だるくなって、足が悸ふるえ出して、妙な息が出て来た。下を見ると初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇まつくらだ。自分のカンテラへはじいじいと点滴しずくが垂れる。草鞋わらじの中へは清水しみずがしみ込んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになった。下り出すと足を踏み外はずしかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめって逆さかさに頭を割るばかりだと思うと、どうか、こうか、段々を下り切る力が、どつかから出て来る。あの力の出所でどころはどうてい分らない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染にじみ出すように来たから、自分

でも、ちゃんと自覚していた。ちようど試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うつとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断言しにくいが、何しろ降りた事はたしかである。下読したよみをする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えていくごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちようど十五あつた。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸い一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちや、どうだ」

と奨励しょうれいした。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的の笑を洩らした。そこで自分も我慢のしついでだと観念して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下りるに従つて路へ水が溜つて来た。ぴちやぴちやと云う音がする。カンテラの灯で照らして見ると、下谷辺の溝渠が溢れたように、薄鼠になつてだぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷たい。指の股が切られるようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨にも水の中へ落さなくつちやならない。片足を揚げると、五位鷺のようにそのままで立つていたくなる。それでも仕方なしに草鞋の裏を着けるとぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭のような波が立つ。その片側がカンテラの灯できらきらと光るかと思うと、すぐ落ちついてもとに帰る。せつかく平になつた上をまたぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這入つて行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜り抜けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われない行先をあてにして、ぐるりと廻ると、足の甲でとまつた水が急に脛まで来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がっくり落ちがして膝まで漬かつちまう。こうなると、動きたんびにぎぶぎぶ云う。膝で切る波が渦を

捲いて流れる。その渦がだんだん股の方へ押し寄せてくる。全く危険だと思った。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑のなかで、いっぱいになりやしないかと思うと急に腰から腹の中までが冷たくなって来た。しかるに初さんは辟易した体もなく、さつさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後から聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然として、ざぶりざぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬かっているのは、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、または廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒されながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思ってるうち、水はどうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなつたから、後から初さんと呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾身を思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云う間際には単音の叫声となつてあらわれるところを、まだ初さんの手前を憚るだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、

さすがの初さんも水の中で留まったなり、振り返った。カンテラを高く差し上げる。眸ひとみを据すえると初さんの眉まゆの間に八の字が寄つて来た。しかも口元は笑っている。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰あたの辺へりを、物凄ものすごそうに眺ながめた。初さんは毫ごうも感心しない。やつぱりにここにここしている。出水でみずの往来を、通行人が尻しりをまくつて面白おもしろそうに渉わたる時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしょうか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだったが、やがて真面目まじめになつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなああたりめえ 当あた前りめえだ。そんなに、おつかながるに

や当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」

となかなか承知しないから、仕方なしに、股またまで濡ぬらしてついで行つた。たださえ暗い坑あなの中だから、思い切つた喩たとえを云えば、頭から暗くら闇やみに濡れてると形容しても差さ支しかえない。その上本当の水、しかも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は蹠くろふしからだんだん競せり上がつて来る。今では腰まで漬つかっている。しかも動くた

んびに、波が立つから、實際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体が腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切って、不知案内の所を海鼠なまこのようにについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞ほらのように深く開いてる中から、水が流れて来る。そうしてその中でかあんかあんと云う音がする。作事場さくじばに違いない。初さんは、穴の前に立つたまま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸ひたるまで、屈こんで洞の中を覗のぞき込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微かすかな灯かひを無理に広げ間まへ使つて、引つ張り足りないから、せつかくの光が暗くら闇やみに圧倒されて、茫ぼう然ぜんと濁なっている体ていであつた。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついてゐる辺あたりから、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳はね返つたものが、纏まとまつて穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這入へえつて見るか」

と云う。自分はぞつと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じや止めにして置こう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但し書^{ただがき}をつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案^{あん}の定釣^{じょう}り出された。

「明日^{あした}つから、ここで働くんでしょうか。働くとすれば、何時間水に漬かつてる——漬かつてれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくつてもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になつたんだろう。

「だって八時間は働かなくつちやならないんでしょう」

「そりやきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切つてらあ。だが心配しなくつてもいい」

「どうしてですか」

「好^いいてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙つて歩き出した。二三歩水をぎぶぎぶ云わせた時、初さんは急に振り返つた。

「新^{しんめえ}前は太抵二番坑か三番坑で働くんだ。よつぽど様子が分らなくつちや、ここまで下りちや来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑つた。自分もにやにやと笑つた。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝^{くるぶし}まで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉^{うれ}しかった。それから先は、

とんとん拍子に嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいにはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のスノコから落ちて来た鉤あらがねを聚めて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうぶつた。いくら面白く運転する器械でも、明日の自分に用のない所は見る氣にならなかつた。器械を見ないとするとこれで、まあ坑内の模様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さんが帰るんだと云う通知を与えてくれた。腰きり水に漬かるのは、いかな初さんも一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡ぬれないで済む路を通つてくれた。それでも十間ほどは腫ふくら脛はぎまで水が押し寄せた。この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来たなと感じて、往きに臍へその近所が氷りつきそうであつた事を思い出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鵜いすかの嘴はしと善い方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしょうか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑つていた。その時は自分も愉快だったが、しばらくすると、例の梯子はしごの下へ出た。水は胸までくらい我慢するがこの梯子には、——せめて帰り路

だけでも好いから、遁れたかつたが、やつぱりちようどその下へ出て来た。自分は蜀の棧しよくさ道んどうと云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、棧道を逆に釣るして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものである。自分はそこへ来ると急に足が出なくなった。突然脚氣かかけに罹つたような心持になると、思わず、腰を後へ引つ張られた。引つ張られたのは初さんに引つ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分が起つたんで、強いて形容すれば、疝氣せんきに引つ張られたとでも叙したら善かろう。何しろ腰が伸せない。もつともこれは逆棧道さかさんどうの祟りだと一概に断言する気でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上つて、奮発の籠たかがしだいしだいに緩んだのもたしかな事実である。何しろ歩けなくなった。この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁へつぷり腰だ。ちつと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云つたぎり、暗い所を潜くぐつて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地びたへ着けた。アテシコはこう云うときに非常に便利になる。御蔭おかげで、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚よごれたりす

る憂いがないだけ、惨憺みじめなうちにも、まだ嬉しいところがあった。そうして、硬く曲った背中を壁へ倚もたせた。これより以上は横のものを豎たてにする気もなかった。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めていた。身体からだが動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方相あいび合つて、生死せいしの間に彷徨ほうこうしていたと見えて、しばらくは万事が不明瞭ふめいりようであつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かい空気が吸つて見たいような気がしたが、だんだん心が昏くらくなる。と坑あなのなかの暗いのも忘れてしまう。どっちがどっちだか分らなくなつて朦朧もうろうのうちに合体がたい稠和ちゆうわして来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとして、意識が稀薄しやばつきになつたまでである。しかしその稀薄な意識は、十倍の水に溶いた娑婆しやば気であるから、いくら不透明でも正気は失わない。ちようど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かように水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世の日が烈はげし過ぎて困る自分には——東京にも田舎いなかにもおり終おほせない自分には——煩悶はんもんの解熱劑げねつざいを頓とん服くしなければならぬ自分には——神経纖維の端の端まで寄つて来た過度の刺激を散らすなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もし驅落かけおち

が自滅の第一着なら、この境界きょうがいは自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停車場ステーションである。自分は初さんに置いて行かれた少時しばしの休憩時間内に、
 図らずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。
 正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだから、ほかの娑婆氣と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあった。正気を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動ほしいままを恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が滅却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の差である。その最も淡いうす生涯しょうがいの中に、淡い喜びがあつた。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していたろう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったろう。ところが——ここでまた新しい心の活作用に現参げんざんした。

というのはいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留っていてくれなかった。動いて来た。油の尽きかかったランプの灯ひのように動いて来た。意識を数字であらわすと、平へ

生^{いぜい}十のものが、今は五になつて留まつていた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零^{れい}にならなければならない。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉^{うれ}しさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚していた。嬉しさはどこまで行つても嬉しいに違ない。だから理窟^{りくつ}から云うと、意識がどこまで降^{さが}つて行こうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだんだんと競^せりおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗^{あんちゆう}中^{ちゆう}から躍^{おど}り出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじや大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開^あいた。

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通^{かよ}つて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじや大變だ」までが順々につながつて来て、そこで、ぷつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作^{しよさく}になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向轉換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証^{しやうこ}拠^こには、眼を開いて、身の周囲^{まわり}を見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残つていた。たしかに残つていた。自分は声だの耳だのと云う

字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際に「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたときや受け取れなかった。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云つて、神——神は^{だいきつゐ}大嫌だ。やっぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたまでであろうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようとは夢にも思ひ浮べなかつた。これだから自殺などではできないはずである。こう云う時は、魂の^{だんどり}段取りが平生と違うから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。氣をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身^{かげみ}につき添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救つたんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかつたのは、己^{うぬぼれ}惚の強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかつたんだろう。

そこへ初さんがひよつくり歸つて来た。初さんを見るが早いか、自分の意識はいよいよ^{めいりよう}明瞭になつた。これから例の^{さかさんどう}逆棧道を登らなくつちやならない事も、^{あした}明日から、^{のみ}鑿と槌^{つち}でかあなかあんやらなくつちやならない事も、^{ナンキンまい}南京米も、^{ナンキンむし}南京虫も、ジャンボーも^{だるま}達磨も一時に残らず分つてしまい、そうして最後に自分の墮落がもつとも明かに分つた。

「ちつたあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登ってやろう」

と云うから、礼を云って立っていると、初さんは景氣よく段木だんぎを捕つかまえて片足踏ふん掛がけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾ついて来ねえ」

と振り返って、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になって、下から見上げると、初さんは登って行く。猿のように登って行く。そろそろ登ってくれる様子も何もありやしない。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切って登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子はしごに託する事ができる。しかし上になると、全く反対で、ややともすると、身体が後うしろへ反れる。反れた重みは、両手で持ちこたえなければならぬから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平ひらと五本の指で、このしめだか高たかを握らなければならぬ。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの

昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇に逆落しになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰のような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになった。

二三度上^{うわまぶた} 瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼうつとしてゐる。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。手の甲で擦ろうと思うが、あやにく両方とも塞がっている。自分は口惜^{くやし}くなつた。なぜこんな猿の真似をするように零落^{おちぶ}れたのかと思つた。倒れそうになる身体^{からだ}を、できるだけ前の方にのめらして、梯子に倚^{もた}れるだけ倚れて考えた。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まつたと云い切つてもよろしい。何しろ動かなくなつた。また動けなくなつた。じつとして立つていた。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ清水^{しみず}が沁み込むのも、全く気がつかなくつた。したがって何分過つたのかとんと感じに乘らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかであるのに、眼だけが霞^{かす}んでくる。いくら瞬^{まばたき}をしても駄目だ。湯の中に眸^{ひとみ}を漬けてるようだ。くしゃくしゃする。焦心^{じれつ}たくなる。癩^{かん}が起る。奮興^{ふんこう}の度が烈^{はげ}しくなる。そうして、身体は思うように利^きかない。自分は齒を食い締^{しば}つて、両手で握つた段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕

ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。——梯子の下では、死んじや大變だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別を起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生涯しょうがいにおける心理推移の現象のうちで、もつとも記憶すべき事実である。自分は心理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえって、實際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にしたい。

アテシコを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚よりかかっていると、その状態がなだらかに進行するから、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまったもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づくけいろ経路を取るのが普通である。ところがその普通の経路を行き尽くして、もうこれがどん詰づまりだと云う間際まぎわになると、魂が割れて二様の所作しよさくをする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまう。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切の手前まで行つて、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確實になる。自分が梯子はしごの下

で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行つたものが、順路をてくてく引き返す手数てすうを省はぶいて、急に、娑婆しゃばの真中に出現したものである。自分はこれを死を転じて活に帰す経験と名づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢あつた。自分は初さんの後あとを追つ懸あせけて登らなければならない。その初さんは、とつくに見えなくなつてしまった。心は焦あせる、気は揉もめる、手は離もせない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。——万事が痛切である。自覺の強度がしだいしだいに劇はげしくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向つて登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興ふんこうの極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白おもしろいと思うのはその一つ、——すなわち積極の頂点からとんぼ返りを打つて、魂が消極の末端にひよつくり現あらわれる奇特きせきである。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切つた途端たんに、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活かつ上じょうより死に入る作用と名なづけている。この作用は矛盾のごとく思われるが實際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証しょうこ拠しやうこ発奮して死ぬものは奇麗きれいに死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨うまく死に切れないようだ。人の身の上はとにかく

く、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々しい、死んじまえと思つた時は、手を離すのが怖くも何ともなかった。無論例のごとくどきんなどとはけつしてしなかつた。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙な精神作用を承^{しょうと}当^うした。

自分は元來が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かつたから、今まで浮氣に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやつて見せたいと云う念があつた。短銃^{ピストル}でも九寸五分^{くすんごぶ}でも立派^{たけ}に——つまり人が賞^ほめてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴^{けごん}の瀑^{たき}までも出向きたいなどと思つた事もある。しかしどうしても便所や物置で首^くを縊^くるのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目^{まじめ}であつたにしても、さほど差^せし逼^{せま}つてはいなかつたんだらう。しかしこのくらい断乎^{だんこ}として、現に梯子^{はしご}段^{だん}から手を離しかけた、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張つていたに違ない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔^{けんかく}もあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅^ぜ沢^{いたく}過ぎたようだ。しかしこの贅沢

心のために、自分は発作性^{ほつさせい}の急往生を思いとまって、不束^{ふつつか}ながら今日まで生きている。全く今は際^{きわ}にも弱点を引張つていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心持後^{あと}へ引いて、手の握^{にぎり}をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここで死んだつて冴^さえない。待て待て、出てから華厳^{けこん}の瀑^{たき}へ行けと云う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊^{しま}つた。曇つた眼が、急に明かるくなつた。カンテラが燃えている。仰向^{あおもむ}くと、泥で濡^ぬれた梯子段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。もし途中で挫折^{させつ}すれば犬死になる。暗い坑^{あな}で、誰も人のいない所で、日の目も見えない。鉋^{あらがね}と同じようにころげ落ちて、それっきり忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よし見つかつても半獣半人の坑夫共に軽蔑^{けいべつ}されるのは無念である。是非共登り切つちまわなければならない。カンテラは燃えている。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先には太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華厳の瀑がある。——どうあつても登らなければならない。左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕^{あと}のつくほど強く握つた。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上げた。カンテラの灯^ひは暗い中を豎^{たて}に動いて行く。

坑は層一層と明かるくなる。踏み棄てて去る段々はしだいしだいに暗い中に落ちて行く。

吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。

すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸崖からは水が垂れる。ひらりとカンテ

ラを翻えすと、崖の面を掠めて弓形にじいと、消えかかつて、手の運動の止まる所へ落ち

ついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻えす。灯は斜めに動く。梯子の通る一尺幅

を外れて、がんがらがんの壁が眼に映る。ぞつとする。眼が眩む。眼を閉つて、登る。灯

も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。動く手も動く足も見えない。

手障足障だけで生きて行く。生きて登つて行く。生きると云うのは登る事で、登ると

云うのは生きる事であつた。それでも——梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登つたのか、天佑で登つたのかほとんど判然し

ない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚つた時に、坑の中へぴた

りと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、——あんまり長えから。

見に行こうかと思つたが、一人じや氣味がわるいからな。だけでも、好く上がつて来たな。

えらいや」

と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。何でも梯子はしごの上でよつぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪わるかったから途中で休んでいました」と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困こまつたろう。途中つて、梯子の途中か」

「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日あすは作業もできめえ」

この一言いちごんを聞いた時、自分は糞くそでも食くらえと思った。誰が土竜もぐらもちの真似なんかするものかと思った。これでも美しい女に惚ほれたんだと思った。坑あなを出れば、すぐ華嚴けげんの瀑たきまで行くんだと思った。そうして立派に死ぬんだと思った。最後に半時もこんな獣けだものを相手にしてられるものかと思った。そこで、自分は初さんに向つて、簡単に、

「よければ上がりましょう」

と云つた。初さんは怪訝けげんな顔をした。

「上がる？ 元気だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲目めあきめくら。人を見損みそくなやがつて」と云いたかつた。し

かし口だけは叮嚀ていねいに、一言ひとこと、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やつぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じょうだんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましょう」

と自分はむつとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行っちゃいけねえ、後あとから尾ついて来ねえ」

「そうですか」

「当あたりめえ前まへだあな。人つけ。誰が案内を置き去おきざりにして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退のけないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折ったり、四つに這はつたり、背中を横よこつ丁ちよにしたり、頭だけ曲げたり、坑あなの恰かつこ好うしだいでいろいろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようである。畜生中ちゆうばらつ腹で急ぎやがるなど、こつちも負けない気で歩き出したが、そこへ行くと、いくら氣ばかり張っていても駄目だ。五つ六つ角を曲つ

て、下りたり上つたり、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなった。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄う。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠つたように打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見ていろと云う勢で、根限り這つたり屈んだりしたが、残念な事には初さんの歌がだんだん遠くへ行つてしまう。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのててててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見当がついたが、しまいにはそのててても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすがに茫然とした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力で日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒した坑だから、まるで土蜘蛛の根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開いている。滅多な穴へ這入るとまた腰きり水に漬る所か、でなければ、例の逆さの栈道へ出そうであるに踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行つたんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならない。どんな穴でも上りならば好いとする。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そ

うして迂路^{うろ}ついていたら、どこかの作事場^{さくじば}へ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。こ
う決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷^{まよ}っていた。非常に気が急^せいて息
が切れたが、めちやめちやに歩いたために足の冷たいのだけは癒^なった。しかしなかなか出
られない。何だか同じ路を往たり来たりするような案排^{あんばい}で、あんまり、もどかしもの
だから、壁へ頭をぶつけて割つちまいたくなった。どつちを割るんだと云えば無論頭を割
るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疔^{かんしやく}癩^くが起った。どうも歩けば歩くほ
ど天^{てんじよう}井^いが邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋^{わらじ}の底で踏む段々が邪魔になる。坑
総体が自分を閉じ込めて、いつまで立つても出してくれないのがもつとも邪魔になる。こ
の邪魔ものの一局部へ頭を擲^たきつけて、せめて罅^{ひび}でも入らしてやろうと——やらないまで
も時々思うのは、早く華嚴^{けげん}の瀑^{たき}へ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向う
から一人の掘子^{ほりこ}が来た。ばらの銅^{あかがね}をスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕^みを抱^だいてよちよちカ
ンテラを揺^ゆりながら近づいた。この灯を見つけた時は、嬉しくって胸がどきりと飛び上
った。もう大丈夫と勇んで近寄つて行くと、近寄るがものはない、向うでもこつちへ歩い
て来る。二つのカンテラが一問ばかりの距離に近寄つた時、待ち受けたように、自分は掘
子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼^{あお}ん蔵^{ぞう}であつた。この坑のなかですら、只事^{ただごと}とは

受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵に違ない。それで口を利くのが厭になった。こんな奴の癖に人に調戲ったり、颯たり、辱めたりするのかと思つたら、なおなお道を聞くのが厭になった。死んだって一人で出て見せると云う氣になった。手前共に口を聞くような安っぽい男じゃないと、腹の中であしかに申し渡して擦れ違つた。向うは何にも知らないから、これは無論だまつて擦れ違つた。行く先は暗くなつた。カンテラは一つになった。氣はますます焦慮つて来た。けれどもなかなか出ない。ただ道はどこまでもある。右にも左にも這入つた、また左にも這入つた、また真直にも歩いて見た。しかし出られない。いよいよ出られないのかと、少しく途方に暮れている鼻の先で、かあんかあんと鳴り出した。五六歩で突き当つて、折れ込むと、小さな作事場があつて、一人の坑夫がしきりに槌を振り上げて鑿を敲いている。敲くたんびに鉤が壁から落ちて来る。その傍に俵がある。これはさつきスノコへ投げ込んだ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰っている。掘子が来て担いで行くばかりだ。自分は今度こそいつに聞いてやろうと思つた。が肝心の本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちようどいいから少し休んで行こうと云う氣が起つた。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持つて来いの腰掛になる。自分はどさ

つとアテシコを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持つたままである。

「何をしやがるんない」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳には敲たたき込まれるように響いた。高い影は大腿に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張つた、体格たくまの逞たくましい男であつた。顔は背の割に小さい。その輪廓りんかくがやや判然する所まで来て、男は留まつた。そうして自分を見下みおろした。口を結んでいる。二重ふたえまぶた瞼の大きな眼を見張っている。鼻筋が真直まつすぐに通っている。色が赭黒あかぐろい。ただの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生のように輕蔑けいべつしていたのに、——誓つて死んでしまおうと覺悟をしていたのに、——大腿に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしくなつた。しかし、

「何でこんな所を迷子^{まご}ついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意に俵の上へ腰をおろしたんでないと見極^{みきわ}めた語調である。

「実は昨夕^{ゆうべ}飯場^{はんば}へ着いて、様子を^み見に坑^{あな}へ這入^{はい}ったばかりです」

「一人ですか」

「いいえ、飯場頭^{はんばがしら}から人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内は」

「先へ出ちまいしました」

「先へ出た？ 手前^{てまえ}を置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太^ふえ野郎^てだ。よしよし今に己^{おれ}が送り出してやるから待つてろ」

と云ったなり、また鑿^{のみ}と槌^{つち}をかあんかあん鳴らし始めた。自分は命令の通り待つていた。

この男に逢^あつたら、もう一人で出る気がなくなった。死んでも一人で出て見せると威張った決心が、急にどこへか行つてしまった。自分はこの変化に気がついていて、それでも別に恥かしいとも思わなかった。人に公言した事でないから構わないと思った。その後^ご人に

公言したために、やらないでも済む事、やつてはならない事を毎度やった。人に公言すると、しないのとは大変な違があるもんだ。その内かあんかあんがやんだ。坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐あぐらをかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草たばこ入を取り出した。茶色の、皮か紙か判然しないもので、股引ももひきに差し込んである上から筒袖つつぽうかぶが被さっていた。坑夫は旨うまそうに腹の底まで吸った煙けむを、鼻から吹き出している間に、短い羅宇らおの中途を、煙草入の筒でぽんと払はたいた。小さい火球ひだまが雁首がんくびから勢よく飛び出したと思つたら、坑夫の草鞋わらじの爪つま先へ落ちてじゆうと消えた。坑夫は殻からになった煙管きせるをぶつと吹く。羅宇の中に籠こもった煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利きいた。

「御前おめえはどこだ。こんな所へ全体何しに來た。身体からだつきは、すらりとしているようだが。今まで働いた事はねえんだらう。どうして來た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、來たんです。……」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云わなかつた。死ぬんだとはなおさら云わなかつた。しかし今までのように、腹なかの内で畜生あつかいにして、

口先ばかり叮嚀ていねいにしていたのとはだいぶん趣おもむきが違ちがう。自分はただ洗い攪ぎい自分の思おもわくを話してしまわないだけで、話しただけは真面目に話したものである。すこしも裏表はない。腹から叮嚀ていねいに答えた。坑夫はしばらくの間黙もくつて雁首かりげを眺ながめていた。それからまた煙草を詰めた。煙が鼻から出だした真最中に口を開ひらいた。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識である。熱誠である。最後に彼の使った漢語である。――彼かれは坑夫などの夢にも知りようはうがな漢語を安々と、あたかも家庭の間で昨日きのうまで常じょう住じゅう坐ざ臥ふ使しつていたかのごとく、使った。自分はその時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張つたなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸くびを前の方に出して、胡坐こざの膝ひざへ片手を逆さかに突ついて、左の肩を少し聳そびやかして、右の指で煙管を握にぎつて、薄くちびるい唇くちびるの間から奇麗きれな齒はを時々あらわして、――こんな事を云った。句の順序や、単語の使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはとうしようもない。――

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤いやしい商売しょうばいはしているが、まあ年長者の云う事だから、参考さんこうに聞きくがいい。青年せいねんは情じょうの時代だ。おれも覺おぼえがある。情じょうの時代に

は失敗するもんだ。君もそうだろう。己もそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己の事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察している。咎めやしない。同情する。深い事故もあるだろう。聞いて相談になれる身体なら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じてゐる。これが当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛けたおれもの後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙な眼だつた。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、懐旧と云うのか、沈吟と云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑の中で、人氣はこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球に吸いつけられた。そうして彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はしないが、それが基で容易ならん罪を犯した。罪を

犯して気がついて見ると、もう社会に容れられない身体からだになっていた。もとより酔興すいきようでした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけつして見逃みのがさない。おれは正しい人間だ、曲った事が嫌きらいだから、つまりは罪を犯すようにもなったんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄すてなければならぬ。功名も抛なげうたなければならぬ。万事が駄目だ。口惜くやしいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕とらえられなければならない。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を使用した。）しかし自分が悪い覚おぼえがないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己おれの性質としてできない。そこで突つ走った。逃げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜もぐり込んだ。それから六年というもの、ついに日光ひのめを見た事がない。毎日毎日坑たの中でかんかん敲たたいているばかりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシキを出たつて構わぬ、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕つかまらないが、出ない。こうなりや出たつて仕方がない。娑婆しゃばへ帰れたつて、娑婆しゃばでした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は敷^{やぶ}から棒^{ぼう}の質問に、用意の返事を持ち合せなかったから、はつと思った。自分の腹^{むかし}中にあるのは、昔^{むかし}どころではない。一二年前から一昨日^{おととい}まで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思った。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮^{さえぎ}るごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚^{おうつ}ないところは、大抵^{もよお}見^{みつ}悉^みした。でも出る気にならない。いくら腹が立つても、いくら嘔吐^{おうと}を催^{もよお}しそうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗くつて狭^{せま}い所だと思えばそれで済む。身体も今じや銅^{あかがね}臭^{くさ}くなつて、一日もカンテラの油を嗅^かがなくなつちやいらなくなつた。しかし——しかしそりやおれの事だ。君の事じやない。君がそうなつちや大変だ。生きてる人間が銅臭^{にさんち}くなつちや大変だ。いや、どんな決心でどんな目的を持つて来ても駄目だ。決心も目的もたつた二三日^{にさんち}で突ツつき殺されてしまふ。それが氣の毒だ。いかにも可^{かわ}哀^{あい}想^{そう}だ。理想も何にもない鑿^のと槌^{つち}よりほかに使う術^{すべ}を知らない野郎なら、それで結構だが。しかし君のような——君は学校へ行つたろう。——どこへ行つた。——ええ？ まあどこでもいい。それに若いよ。シキへ抛^{ほう}り込まれるには若過ぎるよ。ここは人間の屑^{くず}が抛^{ほう}り込まれる所だ。全く人間の墓^{はかし}所だ。生き

て葬^{ほうぶ}られる所だ。一度踏^ふんだが最後、どんな立派な人間でも、出られつこのない^{おとし}陥^{おとし}穽^{あな}だ。そんな事とは知らずに、大方ポン引^{びき}の言いなりしだいになって、引張られて来たんだろう。それを君のために悲しむんだ。一人を墮落させるのは大事件だ。殺しちゃう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をする。他人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人だ。が、こうなつちや墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたって、悔^{くや}んだって墮落しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早く帰るがいい。君が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃない。——君は親があるか……」

自分はただ一言^{ひとこと}あると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業についたらよかろう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよかろう。東京なら東京へ帰るさ。そうして正當な——君に適當な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云つてもここはいけない。旅費がなければ、おれが出てやる。だから帰れ。分つたろう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安^{やす}さんと聞きやあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合し

てやる」

安さんの言葉はこれで終った。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理非人情りひにんじょうを解しない畜類の発達した化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢つたのは全くの小説である。夏の土用に雪が降ったよりも、坑あなの中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟きせきのように思われた。大晦日おおみそかを越すとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云う諺ことわざも記憶していたが、窮きわまれば通ずという熟語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだけに思つて、芝居氣を起しては困つていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違う。真から一万人を畜生と思ひ込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿つうふんの焰ほのおで、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻ひるがえし得るほどの力をもって、自分の耳に応こたえた。

しばらくは二人して黙っていた。安さんは一応云うだけの事を云ってしまったんだから、口を利きかないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいでは安さんに済まない。心底しんぞこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのは山々であったが、何分にも鼻の奥が詰つて不自由である。しかも強しいて言

葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇の両端^じがむずむずして、小鼻がぴくついて来る。やがて鼻と口を塞^せかれた感動が、出端^{では}を失つて、眼の中にたまつて来た。睫^{まつげ}が重くなる。瞼^{まぶた}が熱くなる。大に困^{おおい}つた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐^{あぐら}をかいたまま、黙^{もく}っていた。その時次の作事場^{さくじば}で鉤^{あがね}を敲く音がかあなかあん鳴^なつた。今考えると、自分と安さんが黙^{もく}然^んと顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだが、それを正確に知^しつて置きたかつた。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山^{やま}の中では有ろうはずがない。日の照らない坑^{あな}の底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨^{おしえ}を垂^たれて、尊^{たつ}とい涙を流した舞台があるうとは、胡坐をかいて、黙然と互に顔を見守^もっていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草^{たばこ}を呑^のみ出した。ぷかりぷかりと煙^{けむ}が出た。その煙が濃く出ては暗がりに消え、濃く出ては暗がりに消える間に、自分はようやく声^{こゑ}が自由になつた。

「ありがたいです。なるほどあなたのおつしやる通り人間のいる所じやないでしょう。僕もあなたに逢^あうまでは、今日限り銅山^{やま}を出^{きよう}ようかと思つてたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切^きつたら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやつぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが拵えてやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云つて毫も貰う気は起らなかった。昨日飯場頭の合力を断つた時の料簡りようけんと同じ

かと云うと、それとも違う。昨日は是非貰いたかった、地平へ手を突いてまで貰いたかつ

た。しかし草鞋わらじせん銭を貰うよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂き

たいところを、無理に断つたのである。安さんの旅費は始めから貰いたくない。好意を空

しくすると云う点から見れば、貰わなければ済まないし、坑夫をやめるとすれば貰う方が

便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかった。これは今から考えると、全く向うの人

格に対して、貰つては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるという念から萌きざしたものでら

しい。先方がいかにも立派だから、こつちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、

自分の体面を損そこなう虞おそれがある。向うの好意を享うけて、相当の満足を先方に与えるのは、こち

らも悦よろこばしいが、受けるべき理由がないのに、濫みだりに自己の利得のみを標準めやすに置くのは、

乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき安さんの前で、自分は乞食である、乞

食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗きれなものである。自分は

「旅費は頂きません」

と断った。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸ふかして、煙管きせるを筒つつへ入れかけていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりや失敬した」

と云ったんで、自分は非常に氣の毒になった。もしやるから貰って置けどでも強いられたならきつと受けたに違ちがない。その後氣をつけて、人が金を貰うところを見てみると、始めは一応辞退して、後では大抵懷ふところへ入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないんだろうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりや失敬した」と云ってくれたんで、自分はこの形式に陥おちいらずに済んだのはありがたかった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍にぶった際だから、ことによれば、旅費だけでも溜

めた上、帰る事にしようと言ふ腹もあつたんで、

「よく考えて見ましょう。いずれその中^{うち}また御相談に参りますから」と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送つてやろう」

と煙草^{たばこ}入^{いれ}を股^{もも}引^{ひき}へ差し込んで、上から筒^{つつ}服^{つぽう}の胸^{むね}を被^かせた。自分はカンテラを提^さげ

て腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑^{あな}は存外^{ぜんがい}登り安かつた。例の段々を四五遍通り抜けて、

二度ほど四つん這^ばいになつたら、かなり天^{てん}井^{じよう}の高い、真^ま直^{すく}に立つて歩けるような路

へ出た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電氣灯の見える所で留つた。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついて上がると、軌道^{レール}の敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくつちやあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があつたら来るがいい。氣をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這^{はい}入つた。振り向いて、一口^{ひとくち}礼を云つた時は、もうカンテラが角を曲つていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰つて来る。

途中でいろいろ考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行ったら、今頃は何に成っているか知らないが、どうしたって坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪い人でなくって、社会が悪いのかも知れない。自分は若年じやくねんであつたから、社会とはどんなものか、その当時明瞭めいりやうに分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌ろくなもんじやなかうと考えた。安さんを眞ひいきにするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思つていた。その人間がなぜ安さんのような好人を殺したのかなおさら分らなかつた。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかつた。ただ安さんが可哀かわいそう想であつた。できるなら自分と代つてやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差支さしかえない。安さんは人間から殺されて、仕方なしにここに生きているのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が気の毒だ。

安さんは墮落したと云った。高等教育を受けたものが坑夫になったんだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮落ばかりでなくって、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さんも達磨に金を注ぎ込むのかしら、坑の中で一六勝負をやるのかしら、ジャンボーを病人に見せて調戲うのかしら、女房を抵当に——まさか、そんな事もあるまい。昨日着き立ての自分を見て愚弄しないものないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心までの坑夫じゃない。それでも墮落したと云った。しかもこの墮落から生涯出る事ができないと云った。墮落の底に死んで生きてるんだと云った。それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてかかん敲いている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になった上として、できるだけ急ぎ足で帰って来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇んだ。空はまだ曇っているが、濡れる気遣はない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦りながら、いそ

いそ近づいてくると、初さんは奇怪な顔をして、

「やあ出て来たな。よく路が分ったな」

と云った。自分が案内につけられながら、他を置き去りにして、何とかして何とか、てててと云う唄をうたつて、大いに焦して置いて、他が大迷つきに、迷つて、穴の角へ頭をぶつつけて割つて見ようとまで思つたあげく、やつとの事で安さんの御情で出て来れば、「よく路が分ったな」と空とぼけている。その癖親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算である。自分は石へ腰を掛けて薄笑いをして、この案内の頭の上へ唾液を吐きかけてやろうかと思つた。しかし自分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留まらなくつちやならない身体である。唾液を吐きかければ、喧嘩になるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にスノコの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐がない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、どうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨くやったと云うくらいだから、ただ

自分の損にならないようにと云うだけで、それより以外に賞める価値のある所作じやないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者だと思ふ。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉の先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡であつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍まで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまつている。責任のある自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出してしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭に証拠だてられる以上は、こいつは親方に対して済ましちやいられない。となると後できつと敵を打つだろう。無責任が露見するのは痛快だが——自分はけつして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流の嘘はつかない。——そこまでは痛快だが、敵打は大に迷惑する。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」
とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を

上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取って平した地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変らず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭が顔を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着たままである。「帰ったか。御苦労だった。まああっちへ行つて休みねえ」

と云うが早いか初さんは消えてなくなった。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立つたまま、談話をした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりや大変だ。随分ひどかったでしょう。それで……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭いやでたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞつとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかった。こんな奴といつしよに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体からだも魂も塩を懸かけた海鼠なまこのようにたわいなくなつた。その時飯場頭はようやく口を利きいた。奇麗きれいさっぱりと利きいた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰もらつてね。健康の証明書を持つて来なくつちやいけない。——今日と——今日は、もう遅いから、明日あしたの朝、行つて見て貰もらつたらよからう。——診察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたらう。あの青いペンキ塗りの家うちだ。じゃ今日は疲れたらうから、飯場へ帰つて緩ゆつくり御

休み」

と云つて窓を閉てた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げて、飯場へ引返した。緩く
り御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、緩くり寝られるくらいなら、こ
んに苦しみはしない。起きていれば癡猛組どうもうぐみ、寝れば南京虫ナンキンむしに責められるばかりだ。た
また飯の蓋ふたを取れば咽喉のどへ通らない壁土が出て来る。——しかしいる。いるときめた以
上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちはある。シキの人間がみ
な南京虫になつても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えである。
こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場はんばへ歸つて、二階へ上がった。上がると案のじよ
う大勢囲炉裏いろりの傍そばに待ち構えている。自分はくさくさしたが、できるだけ何喰わぬ顔をし
て、邪魔にならないような所へ坐つた。すると始まつた。皮肉だか、冷評だか、罵詈ばりだか、
滑稽こっけいだか、のべつに始まつた。

一々覚えている。生涯しょうがい忘れられないほどに、自分の柔らかい頭を刺激したから、よ
く覚えている。しかし一々繰返す必要はない。まず大体昨日きのうと同じ事と思えば好い。自分
は急に安さんに逢あいたくなつた。例の夕食ゆうめしを我慢して二杯食つて、みんなの眼につかな
いようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャンボの通った石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際を、右へ上ると斜に頭の上に被さっている大きな槐の奥にある。夕暮の門口を覗いたら、一人の掘子がカントラの灯で筒服の掃除をしていた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀に聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待ってたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ上れ」

見ると安さんは唐棧の着物に豆絞か何にかの三尺を締めて立っている。まるで東京の馬丁のような服装である。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺めて首を傾げて、

「なるほど東京を走ったまんまの服装だね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあった

つけ。今じゃこれだ」

と両袖の衿を引っ張って見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑っていた。安さんは、

「ハハハハ 根性こんじょうはこれよりまだ墮落しているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑って立っていた。この時分は手持無沙汰てもちぶさたでさえあればにやにやして済ましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙はるか世馴よなれている。この体ていを見て、

「さつきから来るだろうと思つて待つていた。さあ上あがれ」

と向うから始末をつてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救たすける方の側がわだと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上つて見た。部屋はやつぱり広いが、自分の泊つた所ほどでもない。電気灯は点ついている。囲炉裏いろりもある。ただ人数にんずが少い、しめて五六人しかいない。しかも、それが向うに塊かたまつてゐるから、こつちはたった二人である。そこでまた話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆あきれている。

「あなたのおつしやった事は、よく分つています。しかし僕だつて、^{酔興}にここまで来た訳じやないんですから、帰るつたつて帰る所はありません」

「じややつぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」

と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよつとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」

と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に噴き出した。

「冗談云つちやいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅沢^{ぜいたく}じやねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れれば代つて上げたいと思います」

と至極真面目^{しごく}に云うと、安さんは、また噴き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕^{ゆうべ}も今日も散々苛責^{いじめ}られました」

安さんはまた笑い出した。

「太^{ふて}え野郎だ。誰が苛責^{かたき}た。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵^{かたき}を打ってやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留^{とど}まる気になった。あんな獯^{どう}猛^{もう}もこつちさえ強くなりやちつとも恐ろしくないんだ、十^{じゅう}把^ぱ一^{いつ}束^{とく}に罵倒^{じつぱひとからげ}するくらいの勇気がだんだん出てくるんだと思った。そこで安さんに敵は取ってくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼^{たの}んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、気の毒そうな顔をして、呆^{あき}れ返っていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのつて、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、にくいですから」

「せつかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちやいけない」

自分は謹^{つつし}んで安さんの旨^{むね}を領^{りょう}した。実際自分もその考えでいたんだから、これはけつして御交際^{おつきあい}の挨拶^{あいさつ}ではなかった。それからいろいろな話をしたがシキの中の述懐と大した変りはなかった。ただ安さんの兄^{あに}さんが高等官になって長崎にいと云う事を聞いて、

大いに感動した。安さんの身になつても、兄さんの身になつても、定めし苦しいだろうと思ふにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなつた。帰る時に安さんが出口まで送つて来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇つた空が晴れて、細い月が出ている。路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襯衣シヤツを通して、蒲鉾かまぼこ形の月の光が肌まで浸しみみ込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩ある行き出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになつた。何の当分のうちだ。馴なれればそう苦にする事はない。何しろ一万余人もかたまつて、毎日毎日いっしよに働いて、いっしよに飯を食つて、いっしよに寝ているんだから、自分だつて七日も練習すれば、一人前いちにんまえに墮落する事はできるに違ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに出て来た。しかしただこの場合に都合のいい文字として湧わいて出たまでで、墮落の内容を明かに代表していなかつたから、別に恐ろしいとも思わなかつた。それで、比較的元氣はんばついて飯場へ歸つて来た。五六間手前まで来ると、何だかわいいわ云つてゐる。外は淋さびしい月である。自分は家の騒うちぎを聞いて、淋しい月を見上げて、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入はいるのが厭いやになつた。月を浴びて外に立っているの

も、つらくなった。安さんの所へ行つて泊めてもらいたくなくなった。一步引き返して見たが、あんまりだと気を取り直して、のそのそ長屋へ這入った。横手に広い間^まがあつて、上り口からは障子^{しょうじ}で立て切つてある。電気灯が頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中^{うち}から出る。自分は下駄^{げた}を脱いで、足音のしないように、障子の傍^{そば}を通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡した時、ほっと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金^{きん}さんが平たく煎餅^{せんべい}のようになって寝ている。それから例の帆布綿^{ほもめん}にくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方とも極^{きわ}めて静かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然^{ばくぜん}としてただ広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみのままで、ごろりと横になるか、または昨夕^{ゆうべ}の通り柱^{もた}へ倚^よれて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱^{もた}へ倚^より懸^かるのは苦しい。どうかして布団^{ふとん}を敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫^{ナンキンむし}がいても寝られるかも知れない。それに蒲団^{ふとん}の奇麗^{きれい}なのを選^よつたらよからう。ことさらに日によつて、南京虫の数^{かず}が違^{ちが}わないとも限るまい。いろいろな理窟^{りくつ}をつけて布団を出して、そうつと潜^{もぐ}り込んだ。

この晩の、経験^{けいけん}を記憶^{きこく}のまま、ここに書きつけては、自分がお話しにならない馬鹿だと

吹^{ふいちよう}聴^{ちよう}する事になるばかりで、ほかに何の利益も興味もないからやめる。一^{ひとくち}口に云うと、昨夜^{ゆうべ}と同じような苦しみを、昨夜以上に受けて、寝るが早いのか、すぐ飛び起きちまつた。起きた後で、あれほど南京虫に螫^さされながら、なぜ性^{しょうこり}懲^{ちやう}もなくまた布団^{ふとん}を引つ張り出して寝たもんだらうと後悔した。考えると、全くの自業自得^{じごうじとく}で、しかも常識のあるものなら誰でも避け^よられる、また避けなければならぬ自業自得だから、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭^{いや}になつて、布団の上へ胡坐^{あぐら}をかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫^さされた。臀^{しり}と股^{もも}と膝^{ひざ}頭^{がしら}が一時に飛び上がった。自分は五位^{ごい}鷺^{さぎ}のように布団の上に立つた。そうして、四圍^{あたり}を見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺^{こん}の兵児帯^{へこおび}を解いて、四つに折つて、裸の身体中所嫌わず、びしやびしや敲^{たた}き始めた。それから着物^{うしろ}を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に倚^よりかかった。家が恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入^{はい}つて更紗^{さらさ}の布団と、黒天鵲絨^{くろびろうと}の半襟^{はんえり}の掛^かかった中形の搔捲^{かいまき}が恋しくなつた。三十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲を懸^かけて、暖^{あつ}たかにして楽々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後^{のち}は、机^すを据^すえたまんま、空^{から}ん胸^{どう}にしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔

捲も、畳んだなり戸棚にしまつてあるに違ない。もつたないもんだ。父も母も澄江さんも艶子さんも南京虫に食われないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。羨ましい。――それとも寝られないで、のつそつしているかしらん。父は寝られないと疳癰かんしやくを起して、夜中に灰吹をぼんぼんたた敲くのが癖だ。煙草たばこを呑むんだと云うが、煙草は仮託かこつけで、実は、腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦にが々しい倅せがれだと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の余り眼を覚まして敲いてるか。どっちにしても氣の毒だ。しかしこつちじゃそれほど思つていないから、先方さきでもそう苦にしちゃいまい。母は寝られないと手水ちようずに起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧さんをおろすのを忘れて、翌朝あくるあさよく父に叱られている。昨夜も今夜もきつと叱られるに違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている――どうしても寝ている。自分のいる前では、丸くなつたり、四角になつたりいろいろな芸をして、人を釣つてゐるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生へいぜいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけつして出て来ないから、始めは不思議に思つたが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなければならぬのは、よッほどの因果いんがだ。随分憎らしいと思うが、憎らしいと思ひながらもやッぱり惚ほれ込んでゐるらし

い。不都合な事だ。今でも、あの色の白い顔が眼前にちらちらする。怪しからぬ顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ気の毒だ。しかしこっちで惚れた覚もなければ、また惚れられるような悪戯をした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくれても仕方がない。気の毒がる事は、いくらでも気の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不断の白い飯も虫唾が走るように食いたいが、それよりか南京虫のいない床へ這入りたい。三十分でも好いからぐつすり寝て見たい。その後でなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚めた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行つて、顔を洗つて、南京米を食う。万事昨日の通りだから、省いてしまふ。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山を登つて来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道も家も間違えようがない。飯場を出て二丁ばかり行くと、すぐ道端にある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さもかなりだけに、寧猛組とはまるで不釣合である。野蠻人が病氣をするんでさえすでに不思議なくらいなのに、病氣に罹つたものを治

療してやるための器械と薬品と医者と建物を具えつけたんだから、世の中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合つて、小学校を建てて子弟を通学させるようなものだ。文明と蒙昧もうまいの両極端がこのペンキ塗の青い家の中で出逢つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますぴんぴん蒙昧になつてくる。下手に食い違つた結果が起るものだ。と考えながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺めてながいる。せっかくの考えもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩れてくずしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように寧猛の極致を尽している。あれじゃ、どうしたつて病院の必要があるはずがないとまで思つた。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈いたきような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色は晴れがましいうちに湿しつとりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼まつさおな色が笑み割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。昨夕ゆうべと今朝とはほとんど十五度以上も違うようである。道傍みちばたに、たった一つ蒲公たん英ぼあが咲いている。もつたないほど奇麗な色だ。これも寧猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土の廊下が地面と擦れ擦れに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸^かつて、手前の右手に控所と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切つて、控所へ這入ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子窓^{ガラスまど}には受附と楷書で貼^はりつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片^{かみきれ}を出す、窓の中に腰を掛けていた二十二三の若い男が、その紙片を受取つて、ありもしない眉^{まみえ}へ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺^{なが}めた上、

「こりや御前か」

と、さも横風^{おうふう}に云つた。あまり好い心持ではなかつた。何の必要があつて、こう自分を輕蔑^{けいべつ}するんだか不平に堪^たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌^{あいきょう}のない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨拶^{あいさつ}が足りないと云わんばかりに、しばらくは自分を睨^{にら}めていたが、こつちもそれつ切り口を結んで立つていたもんだから、

「少し待っている」

と、ぴしやりと硝子戸^{ガラスど}を締めて出て行つた。草履^{ぞうり}の音がする。あんなにばたばた云わせな

くつても好きそうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰つて来ない。ぼんやりしていると、眼の前にジャンボーが出て来た。金^{きん}さんがよつしよいよつしよいと担^{かつ}がれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思つた。何のために薬を盛つて、患者を施^{せり}療^{りょう}するのか、ほとんど意義をなさない。こんな体^{てい}裁^{さい}のいい偽善はない。病人はいじめるだけいじめる。ジャンボーは囃^{はや}したいだけ囃す。その代り医者にかけてやると云うのか。鄭^{てい}重^{ちゆう}の至りである。

「おいあっちへ廻れ」

と突然受附の声がした。見ると受附は硝子窓の中に威^{いた}丈^{たけ}高^かに突立つて、自分を眼下に睥^へ睨^いしている。自分は控所を出た。右へ折れて、廊下伝いに診察場へ上がったたら、薬の臭^{におい}がぷんとした。この臭を嗅^かぐと等^{ひと}しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思ひ出した。死んでここの土になつたら不思議なものだ。こう云うのを運命というんだろう。運命の二字は昔から知つてたが、ただ字を知つてるだけで意味は分らなかつた。意味は分つても、納^な得^{とく}がむずかしかつた。西洋人が筍^{たけのこ}を想像するように定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでいるシキとを結び

つけて、二三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元来この椅子に腰を掛けている本人からしてが、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当がつかない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、薬瓶と、窓と、窓の外の山とを見廻した。もっとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画と見えるだけで、その他には何物をも認める事ができなかった。

そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やっぱり坑夫の類型である。黒のモーニングに縞の洋袴を着て、襟の外へ顎を突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云つた。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内なかで云うべきほどの敬

意^{こも}が籠^{こも}っていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業って別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄^{やっかい}介^{かい}になっていました」

「親の厄介^{やっかい}になっていた。親の厄介^{やっかい}になって、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視^みた上、いきなり自分の鼻^{つま}を撮^まんだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今度口を塞ぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこが悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片へ、何か書いて抛り出すように自分に渡した。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の地下である。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭を嗅いで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいいいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金さんのようによっしよっしよっしでジャンボーを見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャンボーになって、それから思う存分嘸し立てられて、敲き立てられて、——もつとも新参だから嘸してくれるものも、敲いて

くれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——どうなる事が自分にも分らない。それは分らなくつてもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界のべつ、のつぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もつとも穢きたないものと感じていたが、かように万物を色の変化と見ると、穢きたないも穢きたなくないもある段じゃない。どうでも構わないから、どうとも勝手にするがい、自分が懷ふところ手でをしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けごんの瀑たきなどへ行くのは面倒になった。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきをせくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運命に吹き払われるまでは、ここにるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であった。さつきはもつたいないほど美しい色だと思つたが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まって、見ていたが、やっぱり美しくない。それからまたあるき出した。だらだら坂を登ると、自然と顔が仰向あおもむきになると例の通り長屋から、坑夫が頼杖ほおづえを突いて、自分を見下みおろしている。さつきまではあれ

ほど厭いやに見えた顔がまるで土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎にくらしくもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔であるごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出来たただの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいを行くような心持で、親方うちの家までやって来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がりりと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがないんだから、平生へいぜいならはつと驚く訳だが、この時はまるで何の感じもなかった。ただ器械のように挨拶あいさつをすると、娘は片手を障子へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父おとつさん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭はんばがしらの娘だなど合点がてんしたが、ただ合点したままで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行つて来ました」

「健康診断を貰つて来たかい。どれ」

自分は右の手に握つていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやったろうかと、始めて

気がついた。

「持つてゐるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持つていたから、皺しわを伸のして親方に渡した。

「気管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりや困つたな。どうするい」

「やつぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするつたつて、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困つたな。しかしせっかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになって、飯場はんばへ歸つて来た。

その晩は平気で囲炉裏いろりの側そばに胡坐あぐらをかいていた。坑夫共が何と云つても相手にしなかった。相手にする料簡りょうけんも出なかつた。いくら騒いでも、愚弄からかつても、よしんば踏んだり

蹴^けたりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団^{ふとん}は敷かなかつた。やはり囲炉裏^{いろり}の傍^{そば}に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝^{うたたね}をした。囲炉裏へ炭を継^つぐものがないので、火の気^けがだんだん弱くなって、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟^{えり}の所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいっぱいあつた。あの星は何しに、あんなに光つてるのだろうと思つて、また内へ這^{はい}入つた。金^{きん}さんは相変らず平たくなって寝ている。金さんはいつジャンボーになるんだろう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだろう。安さんは六年このシキに這入つてると聞いたが、この先何年^{あちがね}鉋^たを敲くだろう。やつぱりしまいには金さんのように平たくなつて、飯場の片隅^{かたすみ}に寝るんだろう。そうして死ぬだろう。——自分は火のない囲炉裏^{いろり}の傍^{そば}に坐つて、夜明まで考えつづけていた。その考えはあとから、あとから、仕切^{しき}りなしに出て来たが、いずれも干枯^{ひから}びていた。涙も、情^{なさけ}も、色も香^かもなかった。怖い事^{こわ}も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行つた。親方は元氣のいい声をして、

「来たか、ちようど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところ

ろがないんでね、——少し困ったんだが。とうとう旨い口を見附けた。飯場の帳附だ
 がね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやってたくらいだが、せ
 つかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができようと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋だ、や
 や豆だ、ヒジキだつて、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込ん
 どいて貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取つたと云う
 事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこつちでその帳面を見て勘
 定日に差し引いて給金を渡すようにする。——なに力業ちからわざじゃないから、誰でもできる
 仕事だが、知つての通りみんな無筆の寄合よりあいだからね。君がやってくれるとこつちも大変
 便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くつて、まことに御気の毒だ。月に四円だが。——食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかった。ようやく安心したとまでは固もとより行かな

かつた。自分の鉱山における地位はこれでやつときまつた。

翌日 あくるひ

から自分は台所の片隅に陣取つて、かたのごとく帳附 ちようつけ を始めた。すると今

であのくらい人を輕蔑 けいべつ していた坑夫の態度ががらりと變つて、かえつて向うから御世辞

を取るようになった。自分もさつそく墮落 けいこ の稽古 けいこ を始めた。南京米 ナンキンまい も食つた。南京虫 ナンキンむし に

も食われた。町からは毎日毎日ポン引 びき が棕鳥 むくどり を引張つて来る。子供も毎日連れられてく

る。自分は四円の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。しかしその後 のち 東京へ帰ろ

うと思つてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東

京へ歸つた。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんな事実であ

る。その証拠には小説になつていないんでも分る。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年1月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年4月13日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

坑夫

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>